

## 第 1 部 序 論

### 第 1 節 興 味 に 関 連 し た 研 究

興味という概念は日常的によく使われる概念であり、我々が頻繁に経験しているものである。我々は興味が生じた際に興味を喚起した対象に対して精神活動や活動などを集中させていると考えられる。現在に至るまで興味について心理学研究の分野ではどのように取り扱われてきたのであろうか。興味に関連していると考えられる概念については心理学分野でもいくつかの観点から検討が行われてきた。例えば動機づけ研究では個人の動機づけの特性を採り上げたものは何らかの形で興味と関連を持った対象を採り上げたものと考えることができる。

類型学的研究：人間の動機づけについて類型学的な検討を行ったものには Murray(1938)の欲求の分類や EPPS(Edwards, 1954)などが含まれている。

Murray はパーソナリティー変数を挙げた中で顕在的欲求を 20 項目、潜在的欲求を 8 項目、内的状態として 4 項目、一般的性格として 12 項目を挙げた。この中の顕在的欲求が特に心因的欲求として採り上げられているものであり、屈従、達成、親和、攻撃、自律、中和、防衛、恭順、支配、顕示、障害回避、屈辱回避、養護、秩序、遊戯、拒絶、感性、性、救援、理解がこれにあたる。

Edwards はこの Murray のリストに基づいて人間の性格を欲求の構造によって把握することを目的とした質問紙を作成した。この質問紙には Murray のリストに挙げられた心因的欲求とは若干の相違があるものの、達成、追従、秩序、顕示、自律、親和、他者認知、救護、支配、

内罰，養護，変化，持久，異性愛，攻撃の15項目が含まれている。

これらの研究では人間が動機づけられる対象の性質に基づいて動機づけを分類し，これらの動機づけの要素に基づいて各個人の特性を検討することが目的とされてきた。つまりこうした研究では人間の精神活動や，こうした精神活動によって生起される行動がどのような対象を指向しているかを取り上げていると考えることができる。この点から上記のような研究が人間の興味に関連したものであると考えることができる。

人間学的な理論に基づく考え方： Maslow(1954)は人間の欲求を採り上げ，これに階層構造を仮定した。Maslowはこの欲求という概念を比較的広義に捉え，生物学的な欠乏状態を満たすだけでなく人間的成長といった概念まで含めて考えている。Maslowはこの欲求を比較的下位に属する欠除動機と，欠除動機が満たされたうえで始めて見られる成長動機に大別する。欠除動機には生理的欲求，安全への欲求，愛情と所属の欲求，尊重への欲求が含まれる。成長動機には自己実現の欲求と超越への欲求が含まれている。これらの各欲求は下位のものが満たされていない場合にはこれが優位を占めているが，ひとたび満たされるとより高位の欲求が注意と努力を占有するようになると考えられている。

人間学的理論の問題点として，第1に実証性に乏しいという点，第2に個人ごとの差異を強調するあまり一般的な傾向を導き難いという点が挙げられている。またMaslowの取り上げた欲求と言う概念は本来水や食物，酸素などに対する生理的な要求とタバコやアルコールな

どに対する学習性の欠乏とを包括した概念である。これらはいずれも生体内の恒常性の維持を目的としたものであり、必ずしも Maslow が欲求として挙げたものに適合する概念ではない。Maslow が挙げた項目を検討すると、彼の言う欲求という概念は「精神活動の集中する対象」と考えることができる。この点から考えると Maslow の概念は興味と類似したものといえる。

学習性無力感研究： 学習性無力感研究は失敗経験後の当該の課題に対する動機づけの低下を取扱ったものである。つまり我々が日常的に経験しているように興味が生じた場合には当該の対象に対して積極的に接近傾向が生じるのに対して、学習性無力感はこうした接近傾向を減少、もしくは消失させるという点において相反する働きをもつものである。この意味から学習性無力感と興味との間には何らかの関連が示唆される。

当初の学習性無力感研究 (Seligman, 1975) では随伴性の概念に基づいて検討が行われてきたといえる。その後 Abramson, Seligman, & Teasdale (1978) は学習性無力感に対して原因帰属の概念を取り入れた改訂を行った。これは、学習性無力感研究が人間に適用されるようになった際に認知的要因を考慮する必要が生じたためと考えられる。

原因帰属理論は個人が特徴的な帰属スタイルを持っているという前提に立って研究が行われるため、パーソナリティ理論の側面を持ったものであると考えることができる。帰属は全体制 - 特殊性、安定性 - 不安定性、内在性 - 外在性の 3 つの次元を用いて判断される。内在性の次元は原因が個人内にあるのか、個人外にあるのかに

ついて規定する。安定性の次元は、問題となっていることの原因が行動する際に常に関係するものなのか、一時的なものなのかを規定する。また、全体制の次元ではその原因が特定の対象だけに関わっているのか、他の多くの対象にも関係するのかを規定する。生起した事象に対する個人の原因帰属を判断する場合には、これら3つの次元についてそれぞれ検討し総合的に検討される。この結果、負の価値を持つ事態において内的で全体的、かつ安定的な帰属を行った場合に無力感が形成されることが考えられる。これに対して、正の価値を持つ事態で外的で特異的、かつ不安定な帰属をする傾向のあるものも同様に学習性無力感を生起しやすいとされている。

近年の学習性無力感研究は先述のようにパーソナリティ研究の側面が強くなってきている。これに対して先に学習性無力感との関連を指摘した興味は個人内で比較的一定した傾向を認めることはできるものの、時として大きく変化するものである。このため、現在の学習性無力感研究がパーソナリティ特性に偏向したものであり、環境要因や課題遂行状況に含まれる文脈を考慮していないという問題があると考えられることができる。

内発的動機づけ理論に基づく研究：内発的動機づけ研究は White(1959)の competence の概念に始まると考えることができる。その後、内発的動機づけという用語を提唱した Hunt(1965)や好奇心についての研究を行った Berlyne(1971)の研究などを経て現在の認知的評価理論 (Deci, 1975) に至るものとなっている。近年の内発的動機づけ研究は研究の中心が自己決定性に移った結果、興味を中心的に採り上げたものではなくなってしまった。しかし内発的動機づけが生じた際に当該の課題に対して

精神活動が集中するとともに課題遂行の持続が増すという性質を持つことや、内発的動機づけの測度の一つとして課題に対する興味が挙げられている。さらに内発的動機づけ研究の始まりが興味とほぼ同義と考えられる好奇心に対する研究であったことを考えると、興味は内発的動機づけと非常に関連の深い概念であると考えられることができる。

近年の内発的動機づけ研究は Deci(1975)の認知的評価理論以来大きく発展してきたといえる。内発的動機づけは当初 S-O-R 理論では説明のつかなかった有機体の遊びや探索行動といった行動を説明する概念として提唱された。Deci(1975)による内発的動機づけアプローチでは White(1959)のコンピテンスの概念や deCharms(1968)による主体的因果律、Angyal(1941)による自己決定を統合し、有機体は生得的に有能感や自己決定の感覚を求めようとして行動を起こす傾向にあるとされる。この概念が S-O-R 的な動機づけ理論とまったく大きく異なるのは認知的要因が大きく関係している点である。当初の理論では、内発的動機づけは認知された因果律の所在の有機体内部から外部へ、また外部から内部への移動によって影響を受けると考えられてきた。具体的には内発的に動機づけられた行動に対して明白に外的な報酬が与えられる場合等がこれにあたる (Deci, 1971; Deci, 1972)。内発的動機づけは有能さと自己決定の感覚が高められることによって促進され、逆にこれが低められることによって抑制される (Lepper, & Cordova, 1992)と考えられている。また近年では内発的動機づけを促進する要因として関係性が提唱されている。これは個人にとって重要な意味を持つ他者との関係性が課題遂行文脈に存在した場合に内発的動機づけが促進されるというものである。内発的動機づけの概念は外的報酬のな

んら存在しない状況での有機体の行動を説明するものであり、教育場面や産業場面に即した研究が多く見られる。こうした研究では様々な場面において自己決定やコンピテンス、関係性の認知が喚起されることによって内発的動機づけが高められるという結果が得られている（Langer, & Rodin, 1976; Pelletier, Tuson, & Haddad, 1997; Reeve, & Deci, 1996）。

認知的評価理論に基づく内発的動機づけ研究は近年、先述の自己決定、有能さ、関係性の各要因に基づいて様々な検討が成されてきている。Deci(1975)はこれらの要因が人間にとって生得的なものと仮定している。しかし内発的動機づけ研究を概観すると内発的動機づけの概念自体がこれを規定する要因との関係において定義されており、曖昧なものであると言わざるを得ない。このため当初自己決定と有能さの要因のみで行われてきた内発的動機づけ研究に対して後付け的に関係性の要因が付加され、これらすべてが人間の生得的な性質であると定義されるようになってきたと考えられる。

## 第 2 節 興味概念の提案

### 内発的動機づけ研究から興味研究へ

#### 内発的動機づけ研究の発展

従来の S-O-R 理論や動因理論を基にした動機づけ研究では、有機体の行動は報酬や嫌悪刺激の回避のような、明白に有機体外にある報酬によって引き起こされると仮定する。しかし、人間ばかりでなく他の有機体においてもその行動のすべてがホメオスタティックな危機に起因するものではない。特に人間の場合にはこうした行動の方が多岐にわたり、その行動の大半を占めているといえる。しかし、従来の動機づけ理論では、有機体が生理的な欠乏状態にない場合に起こるこうした行動に対しては適切な説明がなされなかった。

こうした S-O-R 理論や動因理論の当てはまらない有機体の行動に対しては従来から様々な立場から検討が行われてきたといえる。探索行動に対する研究はこのうちのもっとも端的なものの一つであると考えられる。Dashieil(1925)はラットの探索行動が空腹であるか否かに関わらずに生起することを示し、Nissen(1930)はラットが探索行動のために電気ショックを受ける床の上を通ることを示している。また Butler(1953)は問題箱の中に入れられたサルが外の景色を見るためだけに弁別課題を学習することを示した。これらの一連の研究からは Harlow(1953)の言うようにすべての学習が動因低減に依存するというのは誤りであり、有機体には好奇心に基づく動機づけや探索することに対する動機づけが存在すると考えることができる。

探索行動が従来の動因理論では説明がつかないことが

明らかになるにつれて「探索動因 (Montgomery, 1952)」や「操作動因 (Harlow, 1953)」、「退屈動因 (Myers & Miller, 1954)」などといった動因命名アプローチと呼ばれるアプローチが見られるようになった (Deci & Ryan, 1985)。しかし動因の定義として体細胞の欠乏状態に起因するものであることが示されていることから、探索行動を動因として考えることは妥当ではないと考えられた。このためこれ以降の研究は認知的動機づけ、もしくは有機体を情報処理プロセスであるとして考える方向へと変化することになった。

内発的動機づけ研究の発端と考えられるのは White (1959) による Competence の概念である。彼は有機体が環境に対して効果的に働きかけることのできる能力として Competence の概念を提唱し、有機体が Competence の知覚を求めようとする傾向を Competence 動機づけと呼んだ。Competence とは有機体が環境と効果的に相互交渉する生得的な能力を指している。また特に環境との効果的な相互交渉の結果得られる効力感 (feeling of efficacy) の縦束を求める動機づけのことを effectance 動機づけと呼び、こうした動機づけの結果として学習が成立すると考えた。

こうした流れの中で明確に内発的動機づけの概念を定義したのは Hunt (1965) であると考えられる。彼の定義によると「有機体の知覚と環境との相互作用に固有な動機づけ」、「情報処理と行為に固有な動機づけ」が内発的動機づけであるとされている。Hunt によると個体は刺激入力と順応水準の間にズレを経験した際に内発的に動機づけられると考えられている。このズレはそれ自体が行動を生起するエネルギーを生じ、ズレが消去した際に行動が終結すると考えられた。同様に有機体を一種の情報処

理システムであるとみなした概念として好奇心研究を行ってきた Berlyne(1971)によるものが挙げられる。Berlyne は情報処理過程に 2 つの機制が存在していることを指摘している。一つは個人が不確かさを経験した際に、この不確かさを低減するように生起される反応の過程であり、特殊探索と呼ばれるものである。もう一方はわずかの刺激入力しか経験していないときに必要とされる刺激作用を獲得するために携わる反応の過程であり、拡散的探索と呼ばれるものである。波多野・稲垣(1971)は内発的動機づけを構成する要素として認知的動機づけと社会的動機づけが存在していることを指摘し、この認知的動機づけが拡散的好奇心と特殊的好奇心に区別することができるとした。さらに稲垣はこうした考え方を推し進め、より深い理解を求める存在として人間を捉える事によって人間の能動性を概念化し、内発的動機づけの中心的な働きとして「理解への動機づけ」を提唱した。このような認知動機づけに基づいた流れを総括する中で鹿毛(1994)は内発的動機づけについて「情報収集とその体制化」を目標としたものであると指摘している。

また、Angyal(1941)は有機体が自らの行動に対して自己決定的であることを求める動機づけを提唱した。同様の概念として、deCharms(1968)は主体的因果律を提唱している。これらの概念は有機体が行動を起こす際に、自らの行動の原因(causal agent)となる存在であろうとする傾向を有していることを仮定する。

これらのアプローチに対して、現在主流となっている認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究は White(1959)の Competence の概念と Angyal(1941)の自己決定の概念、deCharms(1968)の主体的因果律の概念を取り入れて Deci(1975)が提唱したことに始まる。内発的

動機づけの概念では，有機体は生得的に自己決定と有能さの感覚を得ようとする傾向があると仮定している．この理論では，内発的に動機づけられた行動に従事しているものは，当該の行動をとる際に自らの有能感と自己決定の感覚を持つことを目的としていると考えられる．

近年の認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究では，特に自己決定の要因が多く採り上げられるようになってきている．こうした背景にはアンダーマイニング効果（Deci, 1971; Kruglansky, Friedman, & Zeevi, 1971; Lepper, Greene, & Nisbett, 1973）の発見が大きく関係していると考えられる．アンダーマイニング効果とは，内発的に動機づけられた行動を行っている者に対して明白な外的報酬を与えることによって内発的動機づけが低下する現象である．この発見は外的な報酬は行動や学習の成立，保持を促進するという従来の学習理論に対して反証を挙げたという意味で大きな衝撃を与える事となった．Deci (1975)の認知的評価理論では自己決定と有能さの概念を用いてこのアンダーマイニング効果を説明し，一定の成果をあげてきた．このことからアンダーマイニング効果という非常に衝撃的な現象に対して明確な説明を与えることができたために，内発的動機づけ研究において自己決定の要因が着目されるようになってきたと考えられることができる．

近年の研究において Ryan と Deci (2000) は従来の認知的評価理論を再検討する中で従来の外的制御 内的制御といった単純な分類から，これをさらに自律性の程度に基づいて細分化し，整理している．こうして行われた行動の分類は，自律性の低いものから順に Non-regulation（意図的でない行動など），External-regulation（服従など），Introjected-regulation（自我関与など），

Identified-regulation ( 価値観 など ) , Integrated-regulation ( 自覚 など ) , Intrinsic-regulation ( 興味 など ) といった制御過程によって特徴づけることができる . この概念化において最も特徴的であると考えられる点は External-regulation から Integrated-regulation までを外発的動機づけに分類している点である . つまりこの概念化によっても内発的動機づけは行動の制御が自己決定的であるか否かによって規定されていると考えることができる . このことから近年の認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ理論が自己決定の概念を非常に重要視していると考えられる .

#### 内発的動機づけ研究の問題点

現在主流となっている認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究は先に述べたように自己決定や有能さ Deci (1975) , 関係性 (Markus, & Kitayama, 1991) の要因を中心にして展開されているということが出来る . 先にあげたように Ryan と Deci (2000) による近年の内発的動機づけ概念の再構成においても制御なしから内発的制御に至る序列は , 行動を生起することに関わった制御過程に見られる自律性の程度に基づいていると考えることができる . しかし初期の Berlyne (1950) や Hunt (1965) の見解を進めた稲垣 (1984) の概念化にもあるとおり , 本来内発的動機づけとは「人間が環境を理解するために情報収集を行い再体制化する」という認知的な働きを中心として検討が行われるべきである . つまり内発的動機づけを環境中の情報を収集し , 自らの認知構造の内に体制化することに対する動機として定義することが最も適切であると考えられる . これに対して Ryan と Deci (2000) は認知的評価理論 , もしくはこの上位理論である自己決定理論において行動の制御が自律的なものを内発的動機づけであると考えている . また現在こうした理論に基づいて

内発的動機づけ研究を行っている多くの研究においてこうした誤解が見られている。

内発的動機づけ研究の問題点の一つとして、近年の認知的評価理論に基づく内発的動機づけ研究において中心的な概念である自己決定の要因 (Ryan, & Deci, 2000) が行動に対して必ずしも直接的な影響をもたない (芳野・青柳 1998) という点が挙げられる。これは「環境中の情報を収集し、自らの認知構造の中に体制化する」という本来の内発的動機づけの定義に基づく、以下のように考えることができる。つまり環境との相互作用の中で有効に情報を収集し、これを認知構造の中に体制化するためには必要な情報を取捨選択するという意味において自己決定的に行動することが重要であると考えられる。しかしこうした行動に対する自己決定的な関わり方は情報の収集と体制化にとって充分条件ではないと考えられる。特に実験場面において様々な条件を統制した環境では提示された課題に含まれている情報の体制もしくは構造が必ずしも各個人が求めているものとは一致していないために、このような状況下での自己決定は各個人の内発的動機づけを高めるものではないと考えられる。

また現在の認知的評価理論に基づいた研究では内発的動機づけに対して影響を与える要因のうち、自己決定や有能感、関係性といった限られたものに限定して検討されているために場合によっては内発的動機づけにとって瑣末な事象の検討に終始してしまっている可能性がある。つまり本研究において仮定したように内発的動機づけを「情報の収集と再体制化に対する動機づけ」と考えると、現在考えられている要因以外にも内発的動機づけに影響を与える様々な要因を想定することが出来るであろう。また内発的動機づけに対する詳細な理解が得られないま

ま検討を行っているために，新たに内発的動機づけに対して影響を与える要因が発見される可能性が充分にある．事実，当初は自己決定と有能感 Deci(1975)に基づいて研究されてきたが，近年になって新たに関係性の要因 (Baumeister, & Leary, 1995) が付加されるという事態が生じている．

#### 興味概念の必要性

上記のように近年の内発的動機づけ研究における問題点は，内発的動機づけそのものが本来持っている性質についての検討を行っていない点にあると考えられる．つまり本来は「情報を収集し，再体制化する」という学習のための動機づけとして内発的動機づけを捉え，環境との相対的な関係性においてより積極的に環境を学習し適応する傾向を持った存在としての人間の動機づけ傾向を捉えた上で検討を行う必要があったと考える．これに対して近年の研究の流れでは，内発的動機づけ研究の中で非常に印象的であったアンダーマイニング効果を説明する概念として提唱され，認知的評価理論の中心的概念となった自己決定や有能感，また自己決定の概念との対比において話題となった関係性の要因など，手近な部分から研究が進んでいったと考えることができる．こうした問題を解消する為に現在，本来の意味での内発的動機づけそのものに対する検討が必要とされている．

内発的動機づけは本来「有機体が環境中の情報を収集し，これを認知構造の中に再体制化することに対して持っている生得的な動機づけ傾向」として定義されるべきものであった．こうした動機づけ傾向は人間の適応との関係から成立してきたと考えることができる．つまり人間が他の生物と最も異なる特長的な点は，体の大きさに

対して大脳が非常に発達していることであると考えられる。この大脳の発達は何の哺乳類と比較しても顕著なものであり、人間はこの発達した大脳を用いて周辺環境中の情報を収集、保持するとともに、これを体制化することによって環境の変化の原因を分析、もしくは予測することによって現在のように適応してきたと考えることができる。これらのことから人間にとって環境に適応する為には自らが存在している環境中に存在している情報を収集し、体制化することは必要不可欠な適応方略であると考えることができる。近年の認知的評価理論や自己決定理論に基づいた内発的動機づけ研究に最も欠如していたのはこうした視点であると考えられる。

#### 本研究における興味概念

こうした点を考えると、現在必要とされているのは内発的動機づけそのものに対する検討である。Izard(1977)は興味 興奮(interest-excitement)という感情が内発的動機づけの中心的な概念であるという見解を述べている。確かにこのうちの興奮は感情、もしくは情動反応として考えることができる。しかし興味は単なる感情反応のみに留まるものではない。我々が日常的に経験しているとおり、興味とは必ず何らかの対象に対して選択的に生じるものである。また興味が生じると当該の対象に対して各々の興味の度合いに応じて精神活動が集中し、これに伴う行動が喚起されることになる。つまり興味には精神活動を特定の対象に方向付ける機能と活動に対するエネルギーを供給する機能が存在していると考えることができる。このことから考えると興味には感情的な側面以外にも動機づけ的な側面を仮定することができる。つまり興味は内発的動機づけに伴って生じる感情としての側面以外に、内発的動機づけの本質的な働きを担う動機づけとしての側面が存在していると考えることができる。ま

た Berlyne(1950)は現在内発的動機づけとして捕らえられている探索行動の原因となる動機づけを新奇性(Novelty)や好奇心(Curiosity)として検討しているが、この好奇心という概念は興味とほぼ同義の概念と考えることができる。また Ryan と Deci(2000)においても内発的動機づけに関わる制御過程として楽しさや生得的な満足とともに興味を挙げている。このことから興味には動機づけ的側面が存在していることがうかがえる。そこで本研究では興味を中心にして内発的動機づけを検討することによって、現在認知的評価理論に偏った内発的動機づけ研究の新たな方向性を提唱することができると考えた。

#### 興味の定義について

興味の定義について Berlyne(1949)は4つの立場があることを示している。この中で最も古くから提唱されてきたものは、動機づけ機能として興味を考える立場である。これに対して近年では興味を態度であると考えた立場や感情であると考えた立場、性格の構造と関連した自我の基本的機能であると考えた立場が見られるようになってきているとしている。このように近年の興味概念は態度や感情、性格、動機づけなどを含む、全人格的な概念であると考えられるようになってきている。これに対して先に挙げた Izard(1977)では内発的動機づけの中心的な構成概念として興味の持つ感情的な側面を採り上げていると考えることができる。本研究ではこの Izard の立場をとり、興味を内発的動機づけの中心的な概念として捕らえることとした。つまり本研究で採り上げた興味の概念は内発的動機づけ理論との関係に着目した限定された概念であるといえる。そこで本研究では内発的動機づけの概念を検討した上でその中心的概念として、興味の動機づけ機能としての側面を採り上げて検討すること

とした。以降では本研究で採り上げた内発的動機づけとの関連から見た興味を、現在一般的に用いられている全人格的な意味を持つ興味の概念と区別するために「興味」として表わすこととする。本研究の研究1から3では「興味」について動機づけとしての側面から捉え、「特定の対象に対する反応の方向性を規制する心的な構えであり、こうした対象への行動を促進、維持する動機づけ的側面を持つもの」として定義した。この場合に「興味」とは人間の動機づけに対して影響を与える主要な規制の一つとして採り上げられることになる。しかし先に示したとおり、興味には「動機づけ的な側面」以外にも「態度としての側面」や「感情としての側面」、「自我の基本的な機能としての側面」も存在していると考えられる。こうした点も考慮に入れた上で研究3から研究4では「興味」の動機づけ的な側面のみにとらわれず、「周辺環境中の様々な対象に対して形成される反応傾向であり、興味を喚起する対象に対して接近傾向や回避傾向を生起させる過程」として「興味」を採り上げた。またこれは「個人内で比較的一定した傾向をもつ Personality structure としての側面や態度としての側面を持つもの」として定義される。この場合に「興味」は、個人内に形成される価値観や経験、意味づけなどの過程を含むものであると考えられる。

興味とは一般的に多く用いられている用語であるが、心理学分野においてテクニカルタームとして用いるには厳密さを欠いたものであるといわざるを得ない。そこで本研究ではこうした「興味」について一般的な興味の概念や Berlyne(1949)の概念化を基にして2つの立場から検討することとした。

狭義の「興味」

狭義の「興味」とは課題や状況など、特定の対象に直

面した際に、この対象と交渉を持つか否かを判断する働きを指す。つまり先の概念に照らして考えると、興味の動機づけ的側面がこれにあたる。この場合の「興味」は対象の性質や、その対象との相互交渉に関わる周辺の文脈、各個人の状態など様々な要因の影響を受けると考えられる。このため同一の個人が同一の対象との相互交渉を持つ場合であっても、前後の文脈や個人内の状態によって「興味」の持ち方が変化することが考えられる。つまり狭義の「興味」は、直面している対象に対して「興味」を持つか否かが問題となる。

狭義の「興味」は Berlyne(1971)のいう特殊的探索と類似した概念である。特殊的探索とは、不確かさを経験した場合にこの不確かさを低減するために生じるものである。本研究の定義に基づいた場合に特殊的探索は直面している環境に対する適応可能性を高めることを目的として生起されると考えることができる。特殊的探索に基づく規制には、直面している環境中に含まれている情報の内容を検討するという条件と、その情報が学習すべきものか否かを検討するという条件が関連してくると考えられる。

広義の「興味」

また一方では「興味」を広義に捉える立場が考えられる。広義の「興味」とは個人内で比較的一定した傾向として存在している興味度の高さを指す。広義の興味は先の概念に照らして考えると「Personality structure」や「態度」に基づく定義に類似したもの、もしくは「Personality structure」や「態度」を構成する要因の一つと考えることができる。この場合の「興味」は一般的な用語で言うと好奇心の強さと非常に近い意味を持つと考えられる。広義の「興味」には過去の経験や個人の価

値観 ,意味づけの過程などが関係していると考えられる .

広義の「興味」は個人の様々な経験を通して形成されると考えられる . 様々な対象との相互交渉を行う中で過去に「興味」を喚起する対象と多く接し , こうした対象との交渉を通じて認知構造を有効に再体制化することができたものは , 新しく経験する様々な対象に対してもより積極的に関わろうとするであろう . 逆にこうした経験を多く持たなかった場合や , 相互交渉を通して期待する効果を得られない経験が多かった場合には , その他の対象に対しても積極的な関わりを持ち難くなるであろう .

さらに広義の「興味」に対して影響を与える要因としては個人の価値観がある . 人間の「興味」は必ずしも周辺環境のすべてに対して指向されているわけではない . 我々は環境中の特定の対象に対して選択的に「興味」を生じ , こうした対象との相互交渉を持つことを切望するものである . またこのようにして選択的な交渉を持つ対象は個人によって大きく相違が見られるものである . このために場合によっては各個人が選択的に相互交渉を持つようとする対象を採り上げて , その個人の特徴として扱うこともある . 例えば「彼はとにかく飲み会が好きな人だ」といった場合である . このように周辺環境の中から自らが相互交渉を持つ対象を抽出する場合には , 各個人の持っている価値観が重要な働きをしていると考えられる .

同様に広義の「興味」において重要な役割を果たすものとして「意味づけ」の働きを採り上げることが出来る . 我々は周辺環境からの刺激を単なる情報入力として捉えているのではない . 我々は外界からの刺激が入力され , 意識された段階で既に何らかの意味づけを行っている .

例えば机の上に置かれた金属の薄片をナイフであるとして認識した段階で、既にその金属の薄片は「切るための道具」として認識されていることになる。さらにこの認識を行った主体がキャンプなどのアウトドア活動を愛好していれば、ナイフは有用な道具として意味づけられるであろう。こうした活動をまったく行わない個人にとってはこの金属の薄片は無意味なものである。逆に幼い子供を持つ母親の場合には危険なものとして意味づけられるであろう。このように同一の対象に対しても個人ごとに意味づけは異なり、これによって「興味」にも差を生じることとなる。

本研究では内発的動機づけの本来の定義である「情報を収集し、再体制化するという学習のための動機づけ」という立場から、環境との相対的な関係性においてより積極的に環境を学習し適応する傾向を持った存在としての人間の動機づけを検討することとした。この立場から考えると、内発的動機づけの中心的な概念である「興味」は、環境からの影響受けると考えることができる。我々は自らの存在している周辺環境に対して適応することを一つの目的としている。周辺環境に適応できないということは、自らの生存可能性を低下させるからである。この適応という概念は個体と周辺環境との双方向的な関係性の中で成立するものである。このため環境に対してより積極的に適応するためには、環境の変化に応じて柔軟に自らの「興味」を変化させる必要があると考えられる。

つまり広義の「興味」とは過去の経験や価値観、有意義性についての判断を含み、より積極的に環境に対して適応するための個人的な傾向であると考えることができる。この広義の「興味」は先に挙げた Berlyne(1949)の興味概念に含まれている「Personality Structure」や「態

度」としての側面を取り入れたものである。

### 第 3 節 「興味」の定義

#### 本研究における「興味」の定義

本研究で採り上げるべき「興味」について定義を行う。まず第一に本研究で採り上げた「興味」が従来の動機づけの概念ともっとも端的に異なるのは以下の点である。すなわち「興味」とは「自らの存在する環境に対する適応可能性を高めるために、周辺環境に存在する情報を収集し、認知構造を再体制化すること」を目的とした認知的動機づけであるという点である。

また「興味」には二つの側面が仮定される。第 1 の側面は狭義の「興味」である。狭義の「興味」とは特定の対象に直面した際に活動を喚起するか否かについて行う判断であると考えられる。第 2 の側面は広義の「興味」である。広義の「興味」とは個人が持つ好奇心の強さと言ってもよく、過去の経験や価値観、有意味性についての判断を含み、より積極的に環境に対して適応するための個人的な傾向であると考えられることができる。

上記のような目的のため、「興味」の性質として以下のものを仮定することができる。

- 1 . 狭義の「興味」は、対象となる課題に対する動機づけを高めることによって課題遂行を高める働きを持つと考えられる。
- 2 . 本研究の定義に従った場合、「興味」は内発的動機づけの中心的概念となる。このため従来の内発的動機づけ研究や学習性無力感研究で採り上げられて来た原因帰属などの要因は狭義の「興味」を媒介として、動機づけや行動に対して影

響を与えると考えられる。

- 3 . 広義の「興味」や狭義の「興味」は動機づけや行動に対して直接的な影響を持つと考えられる。
- 4 . 広義の「興味」は発達の過程を通じて、各々の時期ごとに重要な環境の影響を受けて形成されると考えられる。
- 5 . 広義の「興味」は日常生活との密接な関係の中で形成されると仮定される。このため、広義の「興味」は個々の個人の日常生活を反映した構造を持つと考えられる。
- 6 . 「興味」は周辺環境に対する人間の適応方略の一つと考えられる。このため広義の「興味」の構造は、生活環境に伴って変化すると考えられる。

## 第 2 章 本研究の目的ならびに意義

これまで見てきたように、「興味」についての研究は今までもにも数多く見られたがこれらは環境の中で生活している人間の「興味」を検討する上において十分に満足に行くものではなかった。そこで本研究では「興味」について大きく二つの立場を仮定した。一つは狭義の「興味」であり、特定の対象と直面した際にこの対象に対して活動を喚起するか否かに付いての判断を行うものである。また狭義の「興味」とは別に広義の「興味」を仮定することができる。広義の「興味」は個人内で比較的一定した傾向として存在する興味度の高さであり、ここには過去の経験や個人の価値観、有意味性についての判断などが含まれる。本研究は人間の動機づけを扱うにあたって「興味」を取り上げることの重要性を提唱すると共に、「興味」がどのようなものであるかについて検討することを目的とした。

第 3 章では人間の動機づけの中で「興味」が果たす役割の重要性について検討した。研究 1 では近年の認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究の中で中心的な概念となっている自己決定の要因と狭義の「興味」を採り上げ、行動との関係を検討することを目的とした。研究 2 では内発的動機づけ以外に学習性無力感の概念を採り上げて検討を行った。自己決定や狭義の「興味」が、学習性無力感研究で採り上げられてきた原因帰属の要因と共に、失敗経験後の学習性無力感形成に対して与える影響を検討することを目的とした。研究 3 では研究 1, 2 を受けて狭義の「興味」と共に広義の「興味」を仮定し、これらが遂行可能課題、遂行不可能課題の遂行や動機づけに対して与える影響を検討することとした。

第 4 章では、第 3 章で仮定された広義の「興味」が発

達過程を通してどのように形成されるかについて検討することを目的とした。研究4では3章，特に研究3の結果を受けて，発達過程の中で思春期の親の養育態度が広義の「興味」に対して与える影響や，学業成績との関連を検討した。

第5章は広義の「興味」がどのような構造を持ち，周辺環境の影響をどのように受けているかを検討することを目的とした。研究5では大学生の「興味」の構造を検討すると共に，日常生活の充実感との関連からこの妥当性を検討することを目的とした。研究6では社会人の「興味」が，社会人にとって重要な環境の一つであると考えられる職業の影響によって変化するか否かについて検討することを目的とした。

## 第 2 部 本 論

### 第 3 章 動機づけと「興味」の関係についての検討

第 3 章では第 1 に動機づけ研究の中で「興味」を取り上げる意義があるか否かを検討することを目的とした。このために狭義の「興味」を仮定し、従来の動機づけ研究で採り上げられてきた要因と共に、行動や動機づけに対して与える影響を検討することを目的とした。また「興味」には広義の「興味」も仮定されることから、狭義の「興味」や広義の「興味」が人間の行動や動機づけに対して与える影響を検討することを目的とした。

本研究では狭義の「興味」として課題興味を採り上げた。研究 1 では課題興味は課題選択として採り上げられた。これは複数の課題のうちいずれを選択するかというものである。研究 2, 3 では特定の課題に対する興味度として採り上げられた。これは特定の課題に対してどの程度「興味」を持つかと言うものである。これらはいずれも狭義の「興味」の定義である「特定の対象と直面した際にこの対象に対して身体、精神的な活動を喚起するか否かに付いての判断」に見られるように、特定の対象を明示的に提示した上で回答させられた。また広義の「興味」としては一般興味を仮定した。一般興味とは個人内で比較的一定した傾向として存在している興味度の高さであり、好奇心という概念と非常に類似したものである。研究 3 ではこの概念に基づいて質問紙を作成し、検討した。

研究 1 は従来の内発的動機づけ研究の文脈で行われた。ここでは難易度選択（自己決定）と共に課題選択（本研究の課題興味）が内発的動機づけに対して与える影響を検討することを目的とした。この研究では当初予期した

結果が得られなかったものの、課題興味が高い影響をもっていることが示された。このため研究2では研究1の結果を受けて自己決定や原因帰属といった従来の研究において直接的に動機づけと関連していると考えられてきた要因と共に課題興味を採り上げ、動機づけや行動に対する影響を検討することを目的とした。研究3では研究1ならびに研究2の結果を受けてさらに詳細に自己決定や原因帰属などの要因と共に課題に対する「興味」が失敗経験後の課題に対する動機づけに対してどのような影響を与えるかについて検討した。またこの際に先に挙げた一般興味を取り上げ、課題興味と同時に検討することを目的とした。

## 1. 研究 1 「興味」と自己決定が課題に対する動機づけに与える影響<sup>\*1</sup>

### 目的

研究 1 では課題に対する「興味」の持ち方が課題遂行に伴う自己決定の剥奪とともに、内発的動機づけに対して与える影響を検討した。日常生活の場面において我々が頻繁に経験しているように、なんらかの課題を遂行する場合、興味度の高い課題に対する自己決定権の剥奪は興味度の低い課題に対する自己決定権の剥奪に比べて内発的動機づけを低減させると考えることができる。本研究ではこの点について検討を行った。

### 方法

被験者 早稲田大学人間科学部学生のうち男子 40 人であった。

### 材料

#### 課題

「興味」測定課題：実験課題に対する「興味」の程度を経験させるために実施した課題である。アナグラム課題には 4 文字課題，5 文字課題，6 文字課題が各 2 問づつが含まれた。言葉探しパズル課題は 5×5 の升目の中にひらがなが書いてあり，その中から 4 文字の名詞を探すものであった。言葉探しパズル課題の詳細については図

---

<sup>\*1</sup> 青柳 肇・芳野 郁朗 1997 興味課題における自己決定権の剥奪が内発的動機づけに及ぼす効果 ヒューマンサイエンス 9 巻 2 号 94-101 頁

3-1-1 に示した .

実験課題 : アナグラム課題 1 4文字 , 5文字 , 6文字  
のアナグラム課題各 10 問ずつで構成された . 回答不可  
能な項目を含んだ課題を遂行した後同様の課題に再度  
従事することを希望するか否かを内発的動機づけの指標  
とするため , 各文字数ともに半数が解答不可能であった .  
アナグラム課題 2 4文字 , 5文字 , 6文字のアナグラム  
課題各 10 問ずつで構成された . 全問解答可能であった .  
実験課題の詳細については表 3-1-1 に示した .

質問紙 : 内発的動機づけを測定する項目を独自に作成  
した . 回答は 4 件法であった . 質問紙の詳細については  
表 3-1-2 に示した .

あ	き	う	こ	ひ
り	か	わ	な	ふ
そ	せ	つ	ら	く
み	へ	ん	き	ろ
か	す	お	ゆ	う

図 3-1-1 言葉探しパズル課題

表 3-1-1 アナグラム課題

1)ミコケネ	11)オレカノチキ	21)キツメリ
2)セクキンタ	12)ナノケモマ	22)イノシヨ
3)ニユアル	13)ンメウソ	23)ワヒクヤ
4)カンセイス	14)テネレフオ	24)ノコヤミキオ
5)タタナキヘラ	15)カカイス	25)ランスセイ
6)ウイカウ	16)モコウトシロ	26)スコロタルヘ
7)イヨイスクカ	17)カソリミ	27)オツクスト
8)セカノンシン	18)マオコンンタ	28)イマンホクロ
9)モノサセレ	19)スロトイハ	29)スキイイタメ
10)キスキヤ	20)ントコクタ	30)クライスト

表 3-1-2 内発的動機づけに関する質問紙表

<p>1)この課題を成功(失敗)した。          (成功 やや成功 やや失敗 失敗)</p>
<p>2)この課題は面白かった。          (面白かった まずまず あまり まったく)</p>
<p>3)やらされているといった感じがした。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>4)課題が成功(失敗)して満足(不満)だった。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>5)課題に対して「興味」を持った。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>6)課題を解決する際にうまくやろうとした。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>7)実験中に緊張した。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>8)今回の課題は自分の好みにあっていた。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>9)課題に対してやる気を持った。          (強く やや強く あまり まったく)</p>
<p>10)課題について、もっと選択肢が多いほうが良い。          (そう思う まあそうだ あまり思わない まったく)</p>

## . 手 続 き

「興味」測定課題の遂行：実験課題の遂行への導入に際して各群の被験者に対し、本実験が心理学の実験で用いられる課題が被験者の好みによってその結果に影響が出るかについて調べるものであることを告げ、2種類の「興味」測定課題を行わせた。課題の遂行はアナグラム課題、言葉探しパズル課題の順におこない、各遂行時間は各三分間であった。各課題とも、時間内に練習課題を完了できなかった被験者にはその課題を被験者の目前で解答して見せ、ツァイガルニーク効果の発生を防いだ。被験者は練習課題遂行後アナグラム課題と言葉探しパズル課題のどちらが好みであったか、もう一度やりたいかについて回答を求められた。この場面で行われた課題の選択によっていずれの課題に対して「興味」を持っているかを判定した。

実験課題の遂行：課題選択とは無関係にすべての被験者は実験場面においてはアナグラム課題の遂行を求められた。実験課題は難易度があり、難易度1（非常にやさしい）から5（非常に難しい）の5水準の課題を提示し、被験者は、本実験において遂行を希望する課題の水準の選択を求められた。ただし問題の内容は全て同一であり、その表紙に書かれた難易度（難易度1,大学生で平均90%の正解率から難易度5,大学生で平均20%の正解率まで）のみが変えられていた。課題選択場面においてアナグラム課題を選択した被験者のうち半数は難易度選択場面で自らの選択した課題の遂行を認められ、これをCC(Choice-Choice)群とした。すなわちこの群は好みの選択も難易度の選択も認められたことになる。また残る半数は自らの選択とは無関係に難易度3の課題の遂行を

求められ、これを CN(Choice - Non choice)群とした。この群は好みの選択は認められたが、難易度の選択は認められなかったことになる。課題選択場面において言葉探しパズル課題を好んだ被験者のうち半数はアナグラム課題の難易度選択において自らの選択した課題の遂行を認められ、これを NC(Non choice - Choice)群とした。この群は好みの選択は認められず、難易度の選択は認められたことになる。また残る半数は自らの選択とは無関係に難易度 3 の課題の遂行を求められ、これを NN(Non choice - Non choice)群とした。この群は好みの選択、難易度の選択ともに認められなかったことになる。また、難易度選択において難易度 3 を選択した被験者は全て CC 群もしくは NC 群に割り当てた。この操作によって CC 群、CN 群の被験者は NC 群、NN 群の被験者と比較して課題に対してより強い興味度を持つと規定した。したがって、群構成は以下の通りである。

CC 群：課題選択権あり，難易度選択権あり。

CN 群：課題選択権あり，難易度選択権なし。

NC 群：課題選択権なし，難易度選択権あり。

NN 群：課題選択権なし，難易度選択権なし。

実験課題の遂行：実験課題については各群ともに六分間の試行とした。また、実験場面では各群ともに半数の被験者に対して全問解答可能なアナグラム課題 1 を、残りの半数に解答不可能な課題を含むアナグラム課題 2 を与えた。

各群ともに実験課題遂行場面の終了後にもう一つ同様のアナグラム課題があり、別の実験であるため課題への参加は自由であることを告げ参加の意志の確認を行った。

課題への参加を希望した被験者には実験課題遂行場面と同様に難易度選択を行った。この場面では、すべての被験者が希望通りの難易度で課題遂行にあたった。また

課題への参加を希望しなかった被験者についてはその課題は行わなかった。

質問紙による内発的動機づけの測定：課題が終了した被験者に対しては内発的動機づけに関する質問紙への回答を求めた。以下の検討においては各質問項目への回答について、逆転項目のものは得点を反転した上で各々の得点について群間で比較した。

実験後のケア：実験の終了に際して本実験において設定されていた難易度はなく、すべて同じものであり、実験課題遂行場面において用いられたアナグラム課題はその半数が解答不可能であったことを説明した。

## 結果

内発的動機づけの指標として各群ごとの難易度選択、アナグラムの課題遂行量、課題遂行量、正答数、自由選択および、質問紙を用いた。表 3-1-3 は難易度選択、課題遂行量、正答数について各群の平均と標準偏差を示したものである。課題に対する内発的動機づけが高まった状態では正反応が増大すると考えられるため、正答数をここに含めた。

表 3-1-3 各群の課題遂行結果

		CC	CN	NC	NN
難易度	Mean	3.600	3.400	2.600	2.300
	SD	0.800	1.281	1.281	1.616
遂行	Mean	11.80	10.00	10.50	9.700
	SD	1.077	2.049	2.156	2.610
正答	Mean	10.90	8.900	9.200	8.800
	SD	2.202	2.343	2.182	2.135

各項目 N=10

質問紙各問に対する回答について実験群間について一元配置の分散分析を試みた。有意差の見られたものは問2「この課題は面白かったですか」( $F(3,36)=4.163$ ,  $p<.05$ , 数値の大きさは大きいものから順にCC群, CN群, NC群, NN群の順), 問5「この課題に取り組むにあたって課題に対する興味を持ちましたか」( $F(3,36)=5.798$ ,  $p<.005$ , 数値の大きさはCC群, CN群, NN群, NC群の順), 問8「今回の課題が自分の好みにあっていると思われましたか」( $F(3,36)=13.226$ ,  $p<.00001$ , 数値の大きさはCC群, CN群, NC群, NN群の順), 問9「課題に対してどの程度やる気を起こしましたか」( $F(3,36)=3.128$ ,  $p<.05$  数値の大きさはCC群, CN群, NC群, NN群の順)であった。

難易度選択について実験群間で分散分析をおこなった結果, 有意差の見られたものは自由選択課題( $F(3,21)=3.183$   $p<.05$ , 数値の大きさはCN群, CC群, NC群, NN群の順)のみであり, これ以外に有意差の認められたものはなかった。

各問題の文字数別の正答数および遂行数の違いについて分散分析により検討を加えた。この結果, 有意傾向の見られたものは5文字課題の正答数, ( $F(3,36)=2.530$   $p<.1$ )で, CC群, CN群ならびにNN群, NC群の順であった。

各実験群間の質問紙, 課題遂行量, 正答数, 難易度選択で差の見られた項目の平均値についてt検定による多重比較をおこなった。表3-1-4はこれを示したものである。

表 3-1-4 質問紙各問とアナグラム正答数，遂行量の各群間の多重比較（有意差のあるもののみ）

項目	群	平均値	標準偏差	t値
五文字正当数	CC	3.3	0.483	2.635 *
	CN	2.4	0.966	
問2	CC	1.8	0.422	3.795 **
	NC	2.6	0.516	
問5	CC	1.6	0.516	4.093 ***
	NC	2.7	0.675	
問8	CC	1.8	0.632	4.950 ***
	NC	3.2	0.632	
問9	CC	1.4	0.516	2.714*
	NC	2	0.447	
問2	CC	1.8	0.422	2.835 *
	NN	2.8	1.033	
問5	CC	1.6	0.516	3.198 **
	NN	2.6	0.843	
問8	CC	1.8	0.632	4.636 ***
	NN	3.5	0.972	
問9	CC	1.4	0.516	2.400 *
	NN	2.2	0.919	
問5	CN	1.9	0.738	2.530 *
	NC	2.7	0.675	
問8	CN	2.1	0.568	4.098 ***
	NC	3.2	0.632	

df=18

\* p< .05

\*\* p<.01

\*\*\*p<.001

## 考察

質問紙に対する回答についての分散分析において有意差の見られた項目は、問2「この課題は面白かったですか」、問5「この課題に取り組むにあたって課題に対する「興味」を持ちましたか」、問8「今回の課題が自分の好みにあっていると思いませんか」、問9「課題に対してどの程度やる気を持ちましたか」であり、これは内発的動機づけの構成概念を直接的に示したもののみである。これらの質問項目に対しての回答結果がCC、CN、NC、NN群の順になったことから内発的動機づけの強度は前記の順になっているといえる。このことから、「興味」を持った課題を選択するほうが、課題の難易度を選択することよりも課題への動機づけに対して強い促進的効果を与えることが判明した。

ところで、当初の予測では自らが課題選択をした課題に対しては興味度が高くなると考えられ、アナグラム課題を選択したことにより高興味度の課題を行ったCC群、CN群の方が、自ら選択した課題を行えなかったNC群やNN群より、後の難易度選択で選択権を剥奪された場合に、より大きく内発的動機づけが低下するとされた。よって、アナグラム課題を選択した被験者が課題難易度選択場面において選択権を剥奪された場合にはより内発的動機づけを低減される傾向が強くなると予想される。つまり、この場合CN群の被験者においてもっとも内発的動機づけの低減が強く、次いで興味度の程度の弱い課題に対する選択権の剥奪を受けたNN群、言葉探しパズル課題を選択したが難易度選択において自らの望む課題の遂行を認められたNC群、もっとも自己決定権の強いCC群の順になると予想された。本実験ではこの質問紙の結果を含めて大半の分析においてこの予想は支持されず、前述のように内発的動機づけが強いと判断される順に

CC群，CN群，NC群，NN群となっている。これは先に述べたように課題の興味度のほうが後の選択権よりも重要な意味を持つためと考えられる。

課題遂行結果では，自由選択課題の難易度選択場面のみ有意傾向が見られたが，この試行に関してもその参加が自由選択であったために各群の被験者数においてばらつきがあることなどの問題点があり，明確なことは言えない。

各文字数別の遂行結果に注目して行った検定は有意差は見られず，有意傾向の認められたものは5文字課題の遂行量のみであった。各文字数別の正答率が4文字課題では91.5%，5文字課題では51.5%，6文字課題では46%であったことから，文字数の多少を課題の難易度として考えれば，この結果は目標の誘発性は達成の困難度（誘因価）に関連し，適度な難易度の課題において動機づけが最も高くなるという Atkinson の理論 (Atkinson, 1964) に合致するものであることが伺える。動機づけと課題の難易度に関する理論においては Atkinson と同様に Vroom は，目標の誘意性は目標達成の重要性に関係し，容易な課題において動機づけは最大となる (Vroom, 1964) と考察し，両者の理論は対立しているようにみえる。これに対して Deci はこの両者の関係について，Atkinson の理論で扱われている動機づけの形態は比較的内発的なものであり，Vroom の理論は比較的外発的な動機づけについて扱っている (Deci, 1975) と説明している。この見解に基づくならば一切の明白な外的報酬を導入しなかった今回の実験で5文字の課題が中程度の難易度であったとすればここでの遂行結果が高難易度や低難易度の課題と比較して内発的動機づけの程度に差が見られたと解釈することは妥当であろう。しかし，問題の難

易度の判断は主観的なものであり，本実験ではそれを測定していないために結論を出すには慎重を要する．

各実験群間の母平均値の差の検定から，CN群，NC群間の差に注目すると，CN群の方がより強く内発的動機づけを示す傾向が見られる．この結果は当初の仮説は支持しないが，内発的動機づけに対する影響を与える要因としてみた場合，難易度選択よりも課題選択の効果が強くあらわれていることを示すものである．つまり課題に対する自己決定と課題への「興味」を比較した場合に，課題に対する「興味」は課題遂行に対して強い動機づけを形成すると考えることができる．

## 2. 研究 2 「興味」と自己決定が学習性無力感形成に及ぼす効果<sup>\*2</sup>

目的 研究 1 において「興味」が従来の研究で採り上げられてきた自己決定よりも動機づけに対して強い影響をもつことが示された。そこで研究 2 では先に述べたように特定の課題に対する接近傾向という意味において「興味」や内発的動機づけ研究とは逆の効果を持っている学習性無力感形成を採り上げ、「興味」や自己決定と共に課題に対する動機づけに与える影響を検討した。学習性無力感研究は課題遂行に伴う失敗経験によって当該の課題に対する動機づけが低下する現象を取り扱ったものである (Hiroto, 1974; Hiroto, Seligman, 1975; Weiner, 1974; Dweck, 1975)。これらの研究では失敗経験に対して無力感を形成し易いパーソナリティーや無力感を形成しにくいパーソナリティー特性があることが示されてきた。これに対して内発的動機づけ研究では、課題に対して内発的動機づけを持つことが失敗経験後の動機づけの低下を抑制することが示されている (Seta, Seta, 1982; Clifford, 1984; Fair, Silvestri, 1992)。内発的動機づけと、学習性無力感は互いに失敗経験後の課題に対する動機づけの変化について扱った研究ともいえ、相互に関連性を持つものと考えられる。そこで本研究では学習性無力感形成に関連する要因として原因帰属様式や課題遂行にもとなう自己決定権の有無と共に、課題に対する「興味」を採り上げ、失敗経験後の学習性無力感形成に与える影響を検討した。

---

<sup>\*2</sup> 芳野 郁朗・青柳 肇 1998 学習性無力感に及ぼす課題の自己決定の効果 ヒューマンサイエンスリサーチ 7 巻 217  
227 項

## 方法

### 被験者

被験者は埼玉県内私立大学学部生であった。このうち男性は 8 名，女性は 13 名であり，平均年齢は 21.4 歳 ( $SD=1.334$ ) であった。

### 材料

興味度測定課題：被験者に両課題を経験させるため，実験課題と同様の課題を 10 問と数的処理課題(3つの数字の間に算術子を入れて等式を完成させるもの)10 問を同一紙で提示した。課題の詳細については表 3-2-1A ならびに表 3-2-1B に示した。

実験課題：カタカナ 4 文字から 6 文字までのアナグラム課題を用いた。問題数は 20 問であった。なお被験者に課題遂行において学習性無力感を形成させるために，前半の問題は半数が解答不可能なものであった。実験課題の詳細については図 3-2-2 に示した。

課題に対する「興味」質問紙：本研究に際して作成された課題に対する「興味」の測定を目的とした質問紙であった。本質問紙は内発的動機づけの概念に基づいて作成され，11 問から構成された。また回答は 4 件法で行い，当てはまる場所にをつけて答えさせた。課題遂行に伴う原因帰属についての質問紙：Peterson ら(1982)の ASQ をもとに作成された強矢ら(1987)の帰属スタイル尺度(ASQ)に能力帰属，努力帰属，運帰属などの項目を追加し作成した 11 項目の質問紙であった。この質問

紙は Peterson ら (1982) が行ったようにパーソナリティーとしての帰属傾向の測定を目的としたものではなく、実験課題の遂行結果に対する被験者の帰属を測定することを目的としたものであった。

表 3-2-1A 興味度測定課題 アナグラム

ン	イ	ス	キ	ハ	
ウ	ス	ン	ナ	ア	
シ	ツ	マ	ム		
ヒ	ト	ン	ヒ	マ	
イ	ン	キ	ケ	サ	
フ	コ	ラ	ン	メ	
マ	リ	ツ	ナ	ヒ	
マ	タ	ナ	イ		
モ	イ	キ	セ	ン	ク
シ	ロ	モ	ウ	コ	ト

表 3-2-1B 興味度測定課題 数的処理

3	8	2	=	22
5	7	4	=	32
2	6	4	=	4
9	6	2	=	6
8	2	5	=	11
7	6	5	=	8
6	2	3	=	1
9	6	5	=	49
7	8	9	=	6
2	4	3	=	5

表 3-2-2 実験課題

ホカネメツ	ミセカンウフ
レスヌケナセア	サケンイカツ
ウカオヤヘケメ	ムウントシテ
ヤケマサルテ	ウウトケコイ
オツマメカン	イヨイスクカ
セマンタモケ	ムリクンカサ
クナインヘル	イイヨヘウタ
ワウマハレ	マクススリ
ムカンタ	スライムオ
トヘンホタネ	ンタクセキ

### 手続き

実験場面では複数の被験者を同時参加させ、同一の場面内で自己決定権を持つものと自己決定権を持たないものを作った。このことにより被験者に対して一方には自己決定権が与えられ、他方は自己決定権が剥奪されたことを明確に示した。

実験は以下の手順で行われた。

課題の興味度測定：実験課題の遂行に先立って被験者に両課題を経験させるため、実験課題と同様の課題を同一紙面上で提示した。実験の開始時にアナグラム課題に対してはカタカナを並べ替えて名詞を作ること、数学課

題に対しては数字の間に算術子を入れ等式を完成させることを教示した。施行時間は5分間であった。また、両課題はともに全問が解答可能な課題のみで構成されており、被験者全員がすべての問題に正答した。したがって課題の得手不得手による被験者の課題選択の差異はなかったものと考えられた。

課題の選択に対する自己決定権の導入：興味度測定課題の遂行後、どちらの課題が面白かったか、実験課題ではどちらの課題を遂行したいかについての質問紙に回答を求めた。ここで被験者全員に対して挙手による課題選択の意思表示を求め、同一の実験場面に参加した被験者すべてに対してアナグラム課題の遂行を希望した者の意見を採用し全員がアナグラム課題を行うことを告げた。このため実際に実施された実験課題はアナグラム課題のみであった。従ってアナグラム課題を選択した被験者を自己決定群(N=11)、数的処理課題を選択した被験者を非自己決定群(N=10)とした。

課題の遂行：アナグラム課題遂行に際し、飛ばしてもよいが、必ず課題は前の問題から順に行うよう教示した。また、実験場面は15分間であった。

課題への興味度の測定：課題遂行後、課題に対する「興味」質問紙への回答を求めた。

原因帰属の測定：課題遂行後に課題遂行に伴う原因帰属についての質問紙に対する回答を求めた。

被験者への実験終了後のケア：実験の終了後、各被験者に課題の半数が解答不可能であったことを告げ、失敗経験のケアを行った。

## 結果

原因帰属尺度 原因帰属尺度に含まれる項目中，PetersonらのASQはその合計点で測定したが，追加された7項目については能力帰属，努力帰属，運帰属，課題帰属のそれぞれ個別に検討された。

課題に対する「興味」尺度 課題に対する「興味」尺度は逆転項目得点を反転させた後に因子分析を行った。因子分析に当たっては固有値の差ならびに，「興味」という単一の概念を測定するという目的から1因子を抽出することとし，主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った。因子分析に当たっては因子負荷量の低い項目を除外したところ9項目が分析に含まれた。この結果，問8「課題に取り組む際にやる気がわいた」(.866)，問7「課題に取り組む際に課題に対してまったく「興味」を持たなかった」(.859)(逆転項目)，問5「課題を解いているときにまったく面白くなかった」(.844)(逆転項目)等が含まれ，“課題に対する「興味」”と命名された。またこの1因子による説明率は.539であった。この結果についての詳細は表3-2-3に示した。

表 3-2-3 課題に対する興味尺度の因子分析結果

		FACTOR1	共通性
Q1	今回採り上げた課題は自分にとって面白い物であった	0.759	0.576
Q2	今回の課題には、仕方なく参加しただけである	0.684	0.468
Q3	同様の課題があった場合、これに参加してみたいと思う	0.555	0.308
Q5	課題を解いているときにまったく面白くなかった	0.844	0.712
Q6	今回の課題は自分の好みに合っていなかった	0.556	0.309
Q7	課題に取り組む際に課題に対してまったく興味を持たなかった	0.859	0.738
Q8	課題に取り組む際にやる気がわいた	0.866	0.750
Q9	課題に取り組むにあたってうまくやろうと思った	0.831	0.691
Q10	失敗（成功）に対して満足（不満）に感じた	0.541	0.293

課題遂行結果に対して「興味」や自己決定権，ASQ得点，課題に対する原因帰属が与える影響 課題遂行に対する各要因の効果を検討するため，失敗経験後の課題正答数を目的変数とし，自己決定権，課題に対する「興味」の因子得点，ASQ得点，能力帰属，努力帰属，運帰属の要因を予測変数とした重回帰分析を行った．分析はフォワードセレクション方式のステップワイズ法で行い，探索的に要因を検討する目的から有意水準は20%で要因の選出を行った．この結果，課題に対する「興味」因子が全効果中の90%以上を占めたため，あらためて課題に対する「興味」因子のみを用いて回帰分析を行った．この結果については表3-2-4Aならびに表3-2-4Bに示した．

表 3-2-4A 失敗経験後の課題遂行を目的変数とした重回帰分析

(ステップワイズ法，フォワードセレクション)

step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積		F
1	課題に対する「興味」	0.900	0.900	0.937	155.96***
2	運帰属	0.008	0.908	0.116	2.06

\*\*\* p<.001

表 3-2-4B 課題に対する興味が失敗経験後の

課題遂行に対して与える影響

(重回帰分析，ステップワイズ法，フォワードセレクション)

予測変数	R <sup>2</sup>		F
課題に対する「興味」	0.883	0.943	152.17***

\*\*\* p<.001

自己決定や原因帰属の各要因が課題に対する「興味」に与える影響の検討 先の検討において課題に対する「興味」が失敗経験後の課題遂行に強い影響を与えることが示された。そこでここでは課題に対する「興味」に対して自己決定や原因帰属の各要因が与える影響を検討することとした。このため課題に対する「興味」因子を目的変数とし、自己決定権、ASQ得点、努力帰属、運帰属の要因を予測変数として重回帰分析を行った。また自己決定権については自己決定権を有していたものを1、自己決定権を有していなかったものを0として変数化した。分析はフォワードセレクション方式のステップワイズ法で行い、探索的に要因を検討する目的から有意水準は20%で要因の選出を行った。この結果、自己決定権と努力帰属の要因が選出された。ここでは、自己決定権の有無の効果が全効果中の最大であり、課題に対する「興味」因子の予測性の高さが示された。この結果については表3-2-5に示した。

表 3-2-5 課題に対する「興味」を目的変数とした重回帰分析

step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積		F
1	自己決定権	0.263	0.263	0.692	9.33**
2	努力帰属	0.059	0.322	0.286	1.32

\*\* p < .01

## 考察

本研究の目的は研究 1 で得られた「興味」が課題への動機づけに対して強い促進的効果を持つという知見に基づいて、課題遂行に関わる諸要因との関連を詳細に検討することを目的に行われた。本研究では課題に対する接近傾向という点において正反対の効果を持つ学習性無力感と内発的動機づけや課題に対する「興味」との関係を検討し、「興味」が失敗経験後の動機づけに対して与える影響を調査した。

実験の結果は、失敗経験後の無力感形成に対して主に影響を持っていた要因は課題に対する「興味」であることを示した。従来の研究では原因帰属の効果が挙げられていたが、その効果は、課題に対する「興味」の効果と比較すると小さなものであった。また、課題に対する「興味」は自己決定権と努力帰属、能力帰属との関連を持っていた。自己決定権と努力帰属は正の方向性を持ち、能力帰属は負の方向性を持っていたことから、課題に対する「興味」は自己決定と共に内的で、自己責任性のある帰属によって影響を受けると考えられる。本研究のように、失敗場面を経験させた場合に能力帰属をすることは、自らの有能感を低め、内発的動機づけに対しては抑制的に働いたことが考えられる。

これらの結果から、原因帰属など、従来の学習性無力感研究で取り上げられてきた要因は失敗経験後の課題遂行に対しては、直接的というよりも間接的な効果を持っていることが示唆された。課題遂行に対して最も強い影響を持っていた課題に対する「興味」は、自己決定権の導入によって高められることが示されると同時に、努力

帰属が強いほど高く、能力帰属が強いほど低くなる傾向が見られた。努力帰属を持つことが課題に対する「興味」を高めるという結果は、桜井(1991)の努力帰属をすることによって内発的動機づけ(「興味」)が高められるという見解とも一致している。また、失敗事態に対して能力帰属を行うことが内発的動機づけを低下させるということとは、内発的動機づけの下位概念である有能感の低下に関係し、この意味からも帰属理論と内発的動機づけ理論の関連性が示唆される。また、自己決定権を与えられた群の能力帰属が高くなる傾向が見られたことについては以下のように考えられる。自己決定権の導入によって内発的動機づけとは別に課題に対するより積極的な関与が生じるであろう。このようなより積極的な関与を持った課題で失敗することは自己にとって脅威を生むと考えられる。このため、課題に対して自己決定権を持たず、課題に対する関わり方も消極的である場合よりも無力感傾向を高める可能性が有ることを示唆している。しかし、自己決定は同時に内発的動機づけも高め、結果的に顕在化する無力感は低減されると考えられる。内発的動機づけの促進的効果は、能力帰属を行うことによる動機づけへの抑制効果よりも強いため、通常は自己決定権の導入によって失敗に対する耐性が増すと考えられる。Seligmanによると、学習性無力感を形成した個体は随意反応の始発が低下することも示されており(Seligman, 1975)、この随意反応の始発という概念は内発的動機づけ理論の自己決定と類似した概念である。このことから、学習性無力感を形成した個体が自己決定的に行動を始発しにくいこと、もしくは内発的に動機づけられた個体が失敗場面においても学習性無力感を形成しにくいことが説明される。これらのことも合わせて考えると、従来内発的動機づけ研究と、学習性無力感研究として扱われてきた概念間には密接な関連があり、両研究を統合し

てゆく試みの重要性が示唆される。

また、本研究の結果として問題となるのは、従来の研究で取り上げられてきた失敗経験後の課題遂行に対する原因帰属の要因の影響が実質上見られなかったことである。このことから、原因帰属は直接的に課題に対する動機づけに影響するのではなく、課題に対する被験者の態度に影響を及ぼし、課題に対する態度が課題に対する動機づけに影響を与えていることが考えられる。

本研究で用いた帰属スタイル尺度(ASQ)は、強矢ら(1987)の作成したものを基にしており、従来パーソナリティー研究として行われてきた帰属スタイルとは違い、課題に対する帰属の仕方という観点から測定されている。無力感研究は、このようにパーソナリティー研究から次第に特定の場面に対する反応へと焦点を移し、逆に内発的動機づけ研究は特定の場面に対する反応から、パーソナリティー要因を視野に入れた研究(Boggiano, Barrett, 1985)がなされるようになってきている。無力感形成や、動機づけをめぐる諸理論の展開を考慮すると、パーソナリティー概念が個人の中である程度一貫した構造を持ちながら、周囲の状況に対してより柔軟な構造を持ったものであることが考えられる。パーソナリティーは各個体のおかれた場面によって変化し、各場面に対する個体の反応は個体の持つパーソナリティーによって影響される。今後はこうした視点からのパーソナリティー研究、動機づけ研究が必要と思われる。

### 3 . 研究 3 課題に対する「興味」が後続の同様の課題に対する動機づけに対して与える影響

#### 目的

研究 2 では失敗経験後の動機づけに対して課題に対する「興味」が直接的な影響をもつことが示された。そこで本研究では本研究では「興味」について大きく二つの側面を仮定した。まず「それぞれの課題に対して個別に持つ興味度」を「課題興味」と命名した。「課題興味」は課題の特性や先述の「一般興味」、個人の嗜好、その時々的情動などによって規定されると考えられる。このため、特定の課題に対して高い「課題興味」を示す者が他の課題に対してはあまり「興味」を示さないといったことが生じる。さらに、「課題興味」は課題に直面している際の周囲の状況や本人の精神状態、課題にかかわる人間との関係性の要因などによって影響を受けると考えられる。このため、「課題興味」は同一の課題に対した場合であっても状況が異なれば変化する可能性があり、個人内でも容易に変化するものであると考えられる。これに対して個人内である程度一貫した傾向として存在する「興味」の強さを示す概念として、「一般的な「興味」の高さ」を仮定し、「一般興味」と命名した。「一般興味」とは、「個人が成長の過程で様々な経験を通して獲得した特性として持っている興味度の高さ」と定義する。「一般興味」の高い者はこの傾向の低い者と比較して、未経験の課題や事態に対しても「興味」を持ちやすいと考えられる。一般的に好奇心が強いと言われる人物が、「一般興味」の高い者と考えられる。こうした「一般興味」は個人内で比較的安定した傾向を持ち、短期間のうちに大きく変化することはないと考えられる。本研究ではこれらの要因が帰属スタイルとともに遂行不可能な問題を含む課題の遂行

や後の同様の課題に対する動機づけに対してどのように影響するかをパス解析を用いて検討した。

## 方法

### 被験者

埼玉県内の私立大学学部生 218 人であった。このうち男子は 103 名、女子は 115 名であり、平均年齢は 20.3 歳であった。

### 実施尺度

一般興味測定尺度：個人が日常生活の中で持っている一般的な興味度の高さについての質問紙であり、本研究に際して独自に作成された。一般興味とは個人が比較的安定した傾向として持っている興味度の高さを意味している。このため、質問紙の作成にあたっては以下の二つの傾向を含めることとした。第 1 は、日常生活の中で直面する様々な事象に対して積極的、集中的かつ主体的にかかわる態度である。この傾向は一般的な概念では好奇心の強さとしてとらえられるものである。この項目には問 1「与えられた課題にはどんなものでも熱中する」、問 2「好奇心が強く、何にでも興味を示す」が含まれた。第 2 は行動の持続性である。人間の行動にとって好奇心の高さは新奇な状況に対して行動を始発させる働きを持っている。しかし始発された行動に対してこれを持続させる働きを持たないとすると、その行動は統一性や目的性のない混乱したものとなると考えられる。このため「興味」の過程には行動を始発する好奇心の要因と行動を持続する要因の二つが不可欠であると考えた。この項目には問 3「世の中には夢中になるほど面白いものはない」、問 4「興味のないことはすぐいやになる」が含まれた。

この質問紙は逆転項目を含む上記の4項目から構成され、  
回答は5件法であった。

興味度経験課題：実験試行で行う課題と内容は同一であるが問題数を減らした課題を遂行させ、実験課題に対してどの程度「興味」を持つか経験させた。興味度経験課題は6×6の枠目に書かれたカタカナの中から指定された4つの動物の名前を探す課題であった。指定された動物の名前はすべて解答可能であった。

実験課題：実験課題は20×20の枠目に書かれたカタカナの中から指定された20個の動物の名前を探すものであった。動物の名前は必ず縦、横、斜めのいずれか一直線上に並んでおり、見つけた動物の名前を で囲むことで解答させた。また、一つの文字が複数の動物の名前に含まれることもあった(例：問題に「マングース」と「キングコブラ」があった場合、「グ」の文字を両方の問題で共有することができる)。各単語の前に難易度を表す記号と称してA、Bの記号を表示した。A、Bの難易度に含まれる問題はそれぞれ10問ずつであった。この難易度表示は虚偽であり、実際の難易度とは無関係である。興味度経験課題、実験課題ともに図3-3-1に示した。

興味度経験課題

ス	ナ	マ	ウ	マ	シ
サ	ク	ギ	ナ	サ	ズ
ロ	シ	フ	フ	マ	フ
ギ	ウ	ク	ア	リ	ズ
サ	ロ	ロ	コ	モ	フ
ウ	マ	ク	ネ	ズ	ク

ウサギ

ナマズ

フクロウ

シマウマ

実験課題

マ	シ	ハ	ノ	モ	カ	チ	コ	ジ	ー	ワ	ナ	エ	ギ	サ
ガ	フ	モ	ロ	タ	ン	イ	ヨ	ジ	ギ	マ	ン	ラ	イ	オ
テ	ー	ラ	チ	キ	ナ	ギ	ー	ハ	ワ	マ	ル	ケ	ラ	オ
リ	バ	ヒ	ン	ビ	マ	ヘ	テ	リ	コ	ー	イ	ン	ズ	ミ
マ	ア	キ	バ	カ	ラ	グ	ワ	オ	ノ	ジ	ウ	オ	シ	ノ
シ	ラ	ア	ン	ヒ	テ	ヨ	ロ	ラ	ト	ー	ヨ	イ	ラ	シ
シ	カ	モ	ジ	ザ	ラ	ギ	ン	ン	タ	ナ	コ	ラ	シ	ー
ノ	バ	ン	ー	イ	イ	ダ	メ	ン	キ	ン	カ	ノ	シ	ハ
イ	ハ	パ	オ	ノ	ケ	ル	マ	グ	イ	ラ	ア	イ	ラ	テ
ミ	ン	ソ	ニ	シ	キ	ヘ	ビ	ス	ワ	シ	ヨ	ー	ザ	ロ
チ	ミ	グ	ミ	ロ	ミ	ナ	カ	イ	ー	ガ	バ	ノ	ア	ガ
イ	ミ	ズ	ジ	ー	マ	ン	ギ	ナ	サ	グ	ク	モ	フ	タ
ラ	イ	マ	タ	ケ	ケ	サ	ニ	ハ	ト	ノ	ン	ケ	マ	ガ
マ	ル	グ	ノ	メ	ラ	ン	シ	シ	ノ	ア	ー	マ	ゴ	ウ
ア	ル	マ	イ	シ	ナ	マ	ケ	ル	ナ	ラ	テ	ナ	ン	ク

難易度

- |   |         |   |         |
|---|---------|---|---------|
| A | マンガース   | B | ニシキヘビ   |
|   |         | A | ヒバリ     |
| A | イノシシ    | A | マグロ     |
| B | チンパンジー  | A | ミミズ     |
| B | オランウータン | B | アライグマ   |
| A | シラサギ    | B | エンマコオロギ |
| A | コヨーテ    | B | アルマジロ   |
| A | クワガタ    | A | ライオン    |
| B | ゴマフアザラ  | B | ナマケモノ   |
| B | カモノハシ   | B | キンメダイ   |
|   |         | A | トナカイ    |

図 3-3-1 実験に用いた課題

課題遂行に関する質問紙：課題遂行後に実施した質問紙には以下の項目が含まれた。「実験課題遂行後の課題に対する「興味」」実験課題遂行後の課題に対する興味度を測定するために課題の面白さの評価を行なわせた。回答は7件法であった。「課題の主観的な成功感」実験課題の遂行について被験者の主観的な成功感についての質問であった。回答は「まったくできなかった(1)」から「非常によくできた(5)」までの5件法であった。「課題遂行結果に対する判断」主観的な課題の遂行結果について100点満点で回答を求めた。「成功や失敗に対する原因帰属」課題遂行結果に対する原因帰属について、Petersonら(1982)のASQ(Attributional Style Questionnaire)から全体性・特殊性、安定性・不安定性、内在性・外在性の各次元と統制可能性に対する認知について回答を求めた。回答は各質問ともに7件法であった。「課題の重要性、努力感、再挑戦の意志」本研究で用いた課題が各個人にとってどの程度の重要性を持つか、課題遂行に際してどの程度努力したか、今後同様の課題があった場合これに参加してみたいと思うかどうかについて各々7件法で回答を求めた。

#### 手続き

実験は大学の講義終了後の時間を用いて実施された。また、本実験は全ての被験者に対して同時に実施した。

実験場面は以下の順に行われた。

一般興味尺度の実施：課題遂行に先立って一般興味尺度に対する回答を求めた。興味度経験課題の実施：実験課題に対してどの程度「興味」を感じるかを経験させるため、実験課題と類似のパズル課題を遂行させた。課題遂行時間は3分間であった。課題興味の測定：興味度経験

課題の実施後この課題がどの程度面白いものであるかについて回答させた。ここで得られた課題に対する興味度を以下では課題興味 1 とする。

実験課題の遂行：実験課題の遂行に際してはわからない場合には飛ばしてもよいが必ず前の問題から順に行うように教示した。また課題遂行に際して制限時間は 15 分間であった。なお被験者のうち半数にはすべての動物の名前が解答可能な課題を与えた(以下、解答可能条件とする)。残る半数の被験者には指定された動物の名前のうち難易度 B を表示した単語の前半 6 問は解答不可能な課題を与えた(以下解答不可能条件とする)。

課題遂行に関する質問紙の施行：実験課題終了後、課題遂行に関する質問紙への回答を求めた。課題遂行に関する質問紙には「実験課題遂行後の課題に対する「興味」」、「課題の主観的な成功感」、「成功や失敗に対する原因帰属」、「課題の重要性、努力感、再挑戦の意志」の項目が含まれた。興味度経験課題終了後に回答を求めた課題興味 1 に対して、課題遂行に関する質問紙に含まれた実験課題遂行後の課題に対する興味度を以下では課題興味 2 とする。

実験終了後のケア：失敗経験による被験者への影響を考慮し、実験終了後に一部の問題が解答不可能であったことを告げた。

## 結果

分析に先立って、解答可能条件、解答不可能条件の被験者の課題に対する「興味」のベースラインを比較検討

するために課題興味 1, 2 を条件間で比較した。ここでは解答可能, 不可能の条件を独立変数とし, 課題興味 1, 課題興味 2, 興味度経験課題の遂行量を従属変数として分散分析を行った。この結果, 課題興味 2 ( $F(1, 203) = 16.37$   $p < .0001$  解答不可能条件 < 解答可能条件) のみに有意差が見られた。これに対して両群の課題興味 1, 興味度経験課題の成績はともに差がみられないことが確認された。これらのことから当初は差が見られなかった課題に対する「興味」が実験課題遂行後に有意な差を生じ, 解答不可能課題の効果が適切に導入されたと考えられる。よって, 以下の各項目では解答可能条件, 解答不可能条件ごとにそれぞれ個別に検討することとした。

一般興味の効果を検討するために以下の検討を行った。一般興味尺度の得点によって上位半数を高群, 下位半数を低群とし, 課題遂行数, 各尺度の回答結果について分散分析を行った。解答不可能条件では課題遂行後の課題に対する「興味」( $F(1, 103) = 5.10$ ,  $p < .05$  高群 > 低群), 成功感 ( $F(1, 103) = 5.69$ ,  $p < .05$  高群 > 低群), 努力感 ( $F(1, 103) = 6.44$ ,  $p < .05$  高群 > 低群), 再挑戦の意志 ( $F(1, 103) = 3.97$ ,  $p < .05$  高群 > 低群) に有意差が見られた。また, ASQ からは安定性 ( $F(1, 103) = 10.23$   $p < .01$  高群 < 低群) の各要因に有意差が見られ, 全体性 ( $F(1, 103) = 2.81$   $p < .10$  高群 < 低群) に有意傾向が見られた。解答可能条件では正答数 ( $F(1, 98) = 2.86$ ,  $p < .10$  高群 > 低群), 成功感 ( $F(1, 98) = 3.65$ ,  $p < .10$  高群 > 低群) のみに有意傾向が見られた。以上の結果については表 3-3-1 に示した。

表 3-3-1 一般興味が各要因に対して与える影響

	一般興味	Mean	SD	F	p<
解答不可能群 (df 1,103)					
課題興味	低	2.885	1.491	5.10	0.05
	高	3.604	1.758		
成功感	低	1.846	0.849	5.69	0.05
	高	2.264	0.944		
努力感	低	4.577	1.564	6.7	0.05
	高	5.340	1.454		
再挑戦	低	3.019	1.799	3.49	0.05
	高	3.755	2.209		
解答可能群 (df 1,111)					
正答数	低	18.466	3.399	3.42	0.10
	高	19.382	1.434		
成功感	低	3.776	1.257	2.91	0.10
	高	4.145	1.026		

この結果，解答可能条件では「一般興味」の強さが実際の遂行量や主観的成功を予測した．また，遂行不可能条件では課題興味や再挑戦の意志などの認知的要因を予測することが確認された．このため，「一般興味」は課題遂行に対して有効な予測因となることが一部証明された．

解答可能条件，解答不可能条件ごとに，各々「課題興味」，「一般興味」，「成功感」，「正答数」，「成功，失敗に対する原因帰属の各要因」，「再挑戦の意志」の関係を調べるために重回帰分析を用いてパス解析を行った．以下の項目では重回帰分析の結果モデルに含まれなかった要因については記載していない．

パス解析にあたって，以下のモデルを仮定した．課題に取り組む際に最も先行する要因として，「課題興味」と「一般興味」が考えられる．また，先に述べたように「一般興味」と「課題興味」は相互に影響を与えていると考えられる．課題に対する「興味」は課題に対する取り組み方に影響すると考えられる．「課題の重要度」に対する認知は，課題に対して個人が形成するこのような態度を反映していると考えられる．さらに，「課題の重要度」は課題に対する動機づけを介して「正答数」に影響を与える．続いて課題遂行の結果から「成功感」や「成功，失敗に対する原因帰属」が喚起される．このように直前の課題遂行についての解釈を行なった結果，後の課題に対する動機づけとして「再挑戦の意志」が影響を受ける．以上のような仮定に基づいて以下のパス解析を行った．

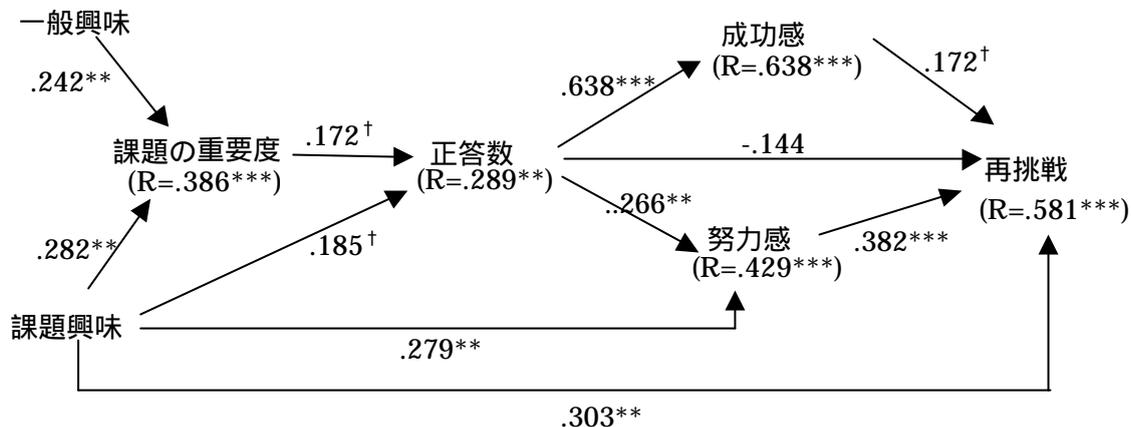
解答不可能条件では「一般興味」，「課題興味」の2変数を第1水準，「課題の重要度」を第2水準，「正答数」を第3水準，「成功感」，「ASQの各要因」，「課題の重要性」，「努力感」，の各変数を第4水準，「再挑戦の意志」を第5水準として，最終的な従属変数である第5水準の「再挑

戦の意志」を順次説明する単方向の因果性を仮定してパス解析を行った。この結果、「一般興味」と「課題興味」の関係性は確認されなかった。また、ASQに含まれる各項目は有意な影響が見られず、モデルには含まれなかった。「課題の重要度」に対しては、「課題興味」、「一般興味」からの影響は見られなかった。「努力感」に対しては、「課題興味」とともに「課題の重要度」の影響が見られた。「再挑戦の意志」に対しては「課題興味」、「一般興味」とともに「課題の重要度」、「努力感」の影響が見られた。「正答数」は「成功感」に対して影響を持っていた。しかし、正答数や成功感是他の変数からの影響を受けず、また他の変数に対する影響も持っていなかった。これらの結果から、解答不可能条件では「一般興味」は以降の同様の課題に対する動機づけの維持に対して直接的な効果を持っていると考えられる。同様に、「課題興味」は以降の同様の課題に対する動機づけに直接影響を与えると同時に、他の様々な認知的要因に対する影響も持っていたといえる。

解答可能条件でも同様のモデルに基づいてパス解析を行った。この結果、解答不可能条件と同様に「課題興味」と「一般興味」の関係は見られなかった。「課題の重要度」は「課題興味」、「一般興味」双方からの影響を受けていた。「一般興味」は「正答数」に対して「課題の重要度」を媒介した間接的な効果を持っていた。また、「課題興味」は「正答数」に対して「課題の重要度」をとおした間接的な効果とともに直接的な効果を持っていた。「成功感」に対しては「正答数」からの影響のみが見られた。「努力感」は、「正答数」と「課題興味」からの直接的な影響を受けていた。「再挑戦の意志」は、「課題興味」からの直接的な効果とともに、「正答数」、「成功感」、「努力感」からの影響が確認された。これらの結果から、解

答可能条件では「課題興味」が様々な要因に対して直接的な効果を持っていると考えることができた。これに対して「一般興味」は「課題の重要性」に対する認知をとおした間接的な効果を持っているといえる。これらの結果は図 3-3-2 ならびに表 3-3-2 に示した。

遂行可能群



遂行不可能群

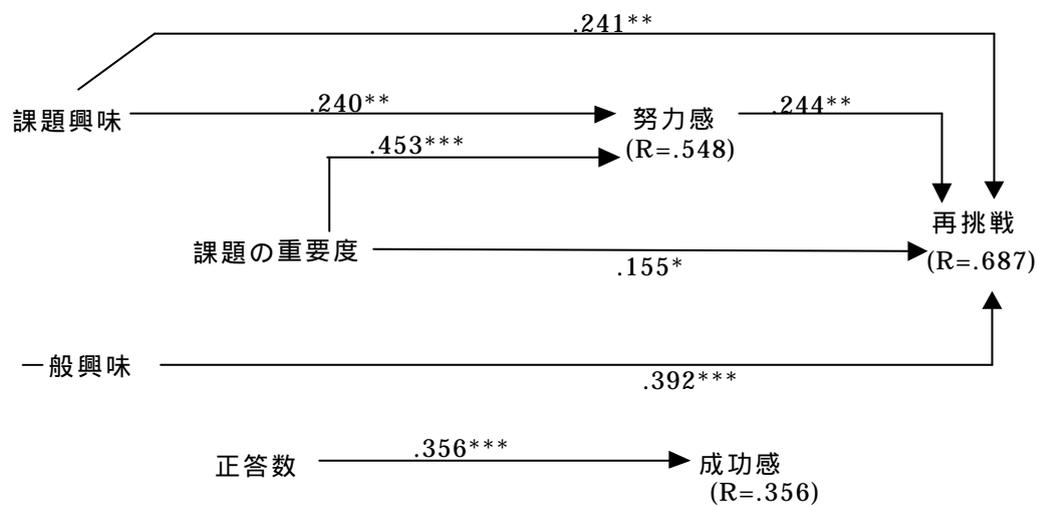


図 3-3-2 各要因から同様の課題への動機づけに至るパスダイアグラム

表 3-3-2 相 関 係 数 の 分 割

独立変数	従属変数	直接効果		間接効果	総効果	相関係数	見かけの相関
		解 答 可 能 条					
一般興味	重要度	0.242	no		0.242	0.139	-0.103
	正当数	no	0.041		0.041	0.138	0.097
	成功感	no	0.026		0.026	0.145	0.119
	再挑戦	no	-0.006		-0.006	0.139	0.145
	努力感	no	0.011		0.011	0.171	0.16
状態興味	重要度	0.282	no		0.282	0.301	0.019
	正当数	0.185			0.392	0.237	-0.155
	成功感	no	0.109		0.109	0.279	0.17
	努力感	0.278	0.062		0.34	0.342	0.002
	再挑戦	0.295	0.142		0.437	0.447	0.01
重要度	正当数	0.278	no		0.278	0.228	-0.05
	成功感	no	0.078		0.078	0.149	0.071
	努力感	no	0.044		0.044	0.231	0.187
	再挑戦	0.407	0.017		0.424	0.488	0.064
正当数	成功感	0.278	no		0.278	0.637	0.359
	努力感	0.158	no		0.158	0.233	0.075
	再挑戦	no	0.06		0.06	0.164	0.104
		解 答 不 可 能					
正当数	成功感	0.119	no		0.119	0.356	0.237
重要度	努力感	0.223	no		0.223	0.317	0.094
	再挑戦	0.479	0.072		0.551	0.519	-0.032
状態興味	努力感	0.428	no		0.428	0.494	0.066
	再挑戦	0.3	0.138		0.438	0.437	-0.001
一般興味	再挑戦	0.494	no		0.494	0.239	-0.199
努力感	再挑戦	0.322	no		0.322	0.518	0.196

## 考 察

本研究では内発的動機づけにかかわる指標としてパーソナリティ特性である「一般興味」と状況依存的な「課題興味」を仮定した。先に述べたように、近年の内発的動機づけ研究では「自己決定」の要因に着目した研究が多く見られ、パーソナリティ研究としての側面は強調されていない。そこで、「一般興味」が内発的動機づけを示唆する指標として適切であるかどうかを検討する必要がある。そこで、内発的動機づけに対する「一般興味」の効果を検討するために解答不可能条件の被験者について一般興味尺度の高、低を独立変数とした分散分析を行った。この結果、一般興味の高いものは低いものと比較して「課題興味 2」、「再挑戦の意志」の得点が有意に高かった。このことから、「一般興味」が失敗経験後の当該課題に対する動機づけを維持していることが示された。このことは、個人内である程度安定したパーソナリティ要因である「一般興味」の高さが内発的動機づけに影響を与えていることを示すものである。また、解答可能条件では「一般興味」は「課題遂行」に対して直接的に効果を持っていた。逆に、解答不可能条件では「一般興味」から「課題遂行」に対する影響は見られなかった。しかし、「一般興味」は「課題興味 2」や「成功感」、「努力感」、「再挑戦の意志」といった様々な要因に対して影響を与えていた。このことから「一般興味」の高いものは、遂行可能な課題の遂行で好成績を示すといえる。さらに遂行不可能、もしくは遂行が困難な課題の場合、学習性無力感の形成に対して耐性を示す傾向があると考えられる。こうした結果は、従来の内発的動機づけ研究において自己決定権が与えられた被験者に見られた動機づけの維持効果 (Lepper, & Cordova, 1992) と同様のものといえる。

パス解析の結果からはさらに詳細な因果関係が得られた。被験者は、課題遂行に先行して課題が解答不可能なものを含んでいることを知らされなかった。このため、本実験での解答不可能課題は被験者にとっては難易度が高い課題と同等の意味を持っていたと考えられる。これに対して、解答可能課題を与えられた被験者は解答不可能課題を与えられた被験者よりも課題の平均点を高く見積もっていた。このため、解答可能課題は解答不可能課題と比較して難易度の低い課題としてとらえられていたことが示唆される。こうした解釈に基づいて以下の検討を行う。

解答可能条件、解答不可能条件ともに、「一般興味」と「課題興味」の関係は確認されなかった。「一般興味」と「課題興味」は先述のとおり、構成概念上の関連性を示唆されるものである。本研究でこれらの関係性が得られなかった原因として以下のことが考えられる。つまり本研究で用いた課題が一種類であったために、課題興味に対して課題の性質の影響が強くと表れたと思われる。今後さらに多くの課題について総合的に検討することによって各々の課題の持つ特性が相殺され、全体的な傾向として「一般興味」と「課題興味」の関係が見られると思われる。

本実験の解答可能条件では、「一般興味」は「課題の重要性」に対する判断に影響を与えていた。ここでは「一般興味」が高い者ほど「課題の重要性」が高いと考える傾向が見られた。また、「課題興味」は「課題の重要性」に対する判断に対して影響を与えるとともに「努力感」、「再挑戦の意志」といった要因に対して直接的な正の影響を持っていた。このことは「課題興味」が、「一般興味」以上に課題遂行や後続の同様の課題への再挑戦の意志を

予測することを示している。解答不可能条件では、「課題興味」は「再挑戦の意志」に対して「努力感」を媒介した間接的な影響とともに直接的な影響を持っていた。また、「一般興味」は「再挑戦の意志」に対して直接的に強い影響を持っていることが示された。解答不可能条件の場合、実際の課題遂行は他の要因とは関係性を持たなかった。これは、失敗経験を以降の行動に対する判断の要因に加えないことでコーピングを行っている結果と考えることができる。これらのことから、「一般興味」や「課題興味」の強さによって失敗経験が無力感形成に与える影響が異なると考えられる。「一般興味」や「課題興味」が高い場合には、失敗経験の有無に関わらず動機づけは維持される傾向にある。これに対して「一般興味」や「課題興味」が低い場合、失敗経験が無ければ無力感形成されないが、失敗事態を経験すると無力感が形成されやすくなると考えられる。

従来 of 学習性無力感研究の文脈では、原因帰属の要因が失敗経験後の無力感形成に対して影響を与えると考えられてきた。しかし本研究の結果、失敗経験後の動機づけに対して影響を与えていたのは「一般興味」や「課題興味」であった。原因帰属の各要因からは有意な影響は見られなかった。原因帰属の要因は課題遂行に対する主観的判断を示す要因であり、これらの要因が直接的に失敗経験後の無力感形成に対して影響を与えているとは考えにくい。むしろこうした認知的要因は、課題に対する取り組み方や態度といった潜在的な変数に影響を与えていると思われる。原因帰属の要因は、これらの潜在変数を媒介して学習性無力感形成に影響を与えると言う媒介過程を持つと考えられる。しかし、「一般興味」や「課題興味」は直接的に課題に対する取り組み方や態度を表す要因と考えることができる。このため、無力感形成に対

して間接的な影響しか持たない原因帰属の要因の効果は、「一般興味」や「課題興味」を検討に加えたことによって不可視化されたと思われる。だが本研究では、こうした要因間の関係性について詳細に検討するためのデータが十分に得られているとは言い難い。こうした点についての検討はさらに詳細な研究が必要とされている。

#### 4. 第3章の総括

第3章では3つの研究を通して課題興味が動機づけに対して与える影響を検討した。研究1では当初の目的とは異なったものの、課題興味が内発的動機づけや課題遂行に対して強い影響を持つことが示された。研究2では学習性無力感形成に対して、課題興味が非常に強い抑制効果を持つことが示された。また同時に従来の動機づけ研究で採り上げられてきた自己決定や原因帰属といった要因は「興味」を媒介とした間接的な影響を持つことが示された。研究3ではこの結果、従来の動機づけ研究で採り上げられてきた自己決定や原因帰属といった要因は、動機づけに対して「興味」を媒介とした間接的な影響を持つことが示された。これらの結果から以下のように考えることができる。

第1に課題興味は人間の動機づけや行動に対して非常に強い影響を持つ。

第2に従来の動機づけ研究で採り上げられてきた自己決定や原因帰属といった要因は課題興味を媒介として、人間の行動や動機づけに対して間接的な影響を与えている。

また特に研究3では課題興味と共に一般興味が動機づけや行動に対して与える影響を検討した。この研究では特に遂行不可能課題を与えた場合に、一般興味や課題興味は動機づけの維持に対して直接及び間接的に非常に強い効果を持つことが示された。一般興味は研究2で採り上げた学習性無力感理論が原因帰属(Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978)の概念を取り入れて以来、

パーソナリティー研究の側面を強めていることを受けて、仮定されたものである。研究 2 まで採り上げてきた課題興味は、特定の課題や対象に直面した際に生じる選択の過程であり、各々の課題遂行の状況や前後の文脈などの影響を受けて変化するものと考えられた。これに対して一般興味はこうした状況や文脈などに関わらず、個人内で比較的一定した傾向として存在する興味度の高さを指す概念として仮定された。研究 3 において課題興味と同様に一般興味は失敗経験後の動機づけの維持に対して影響を持っていたことは、今後「興味」を研究する際にこれら二つの側面を考慮する必要性を示唆している。

しかし特に研究 3 で採り上げた一般興味は、研究 2 で指摘されたパーソナリティー的な側面をることのみを目的としたものであり、本研究の主旨から考えると十分に検討されたものとは言い難い。このことから一般興味については第 4 章以降の研究において十分に検討される必要がある。

## 第 4 章 「興味」の形成

第 3 章では従来の内発的動機づけ研究や学習性無力感研究において採り上げられて来た原因帰属や自己決定といった要因と共に課題に対する「興味」を採り上げ、これらの要因が学習性無力感形成や課題への動機づけに対してどのような影響を持っているかを検討した。この結果課題に対する「興味」は、当該の課題への動機づけに対して直接的かつ強い影響を持っていることが示された。

この結果を受けて第 4 章以降では従来の心理学研究で採り上げられて来た動機づけの概念をも含めた上で様々な事象に対する関係性を構築するための一連のシステムとして「興味」を捉え、こうした概念化に基づいて「興味」について検討することとした。つまり以降の研究においては「興味」について、「自らが存在している環境の中から自己にとって有意味性を持った刺激に対して選択的に精神や肉体の活動を生起し、こうした対象との相互作用に伴って生じる学習の成立や保持を促進するものである」と定義した。

この場合には「興味」は第 3 章で取り上げた狭義の「興味」のような特定の対象と有機体の行動を結合するという限定された意味ではなく、より積極的に周辺環境に対して適応するための全人間的反応群であると考えられることができる。

第 3 章においてはこうした「興味」が発達過程の中でも特に強く影響を受けると考えられる思春期を採り上げ、この時期の親の養育態度と後続の「興味」との関係を検討すると共に、高校生の学業との関係を調査した。

## 研究 4 児童期の親や教師の養育態度が「興味」に対して与える影響

### 目的

研究 3 において，個人内で比較的一定した傾向として一般興味を採り上げ，課題遂行や失敗経験後の動機づけの維持との関係を検討した．この結果，特に遂行不可能課題において一般興味は課題興味と共に，動機づけの維持に対して直接的に強い影響を持っていることが示された．このことから研究 1，2 で採り上げた課題や対称に直面した際の判断である課題興味と共に一般興味を仮定することの妥当性が示された．しかし研究 3 では一般興味について十分な検討が行われたとは言い難い．そこで研究 4 では一般興味が形成される過程を検討することを目的とした．

本研究では思春期の親の養育態度が高校生の「興味」にどのように影響しているかを検討すると共に，これらの要因が高校生の学業に対して与える影響を検討することであった．本研究では小学校高学年を採り上げて親の養育態度の検討を行った．この時期は Freud(1940)のいう潜伏期に当たり，物事に対して勤勉に取り組むという姿勢を獲得する時期であるとされている．人間の発達段階の中でも特にこの時期を取り上げて「興味」との関連を検討することは，日本の社会においてこの時期以降中学校，高等学校と続く教育課程において当該の個人の適応を考える上において非常に重要な意味を持つと考えられる．また生活環境が飛躍的に拡大する大学生以降の年齢層は「興味」に対して影響を与える要因が膨大なものとなる為に調査対象として適切ではないと考えられる．

これに対して高校生では比較的生活環境が限定されると共に日常的な定期試験や大学受験が存在することで学業に対して「興味」が喚起されていると考えられる。このため予備調査として高校生の一般興味を測定するための尺度を作成ならびに検討した。またこれに続く本調査では思春期の親や教師の養育態度と高校生の「興味」の関係、および学業成績との関連を検討した。

## 方法

### 被験者

大阪府内の私立男子高校 3 年生 73 名であった。このうち普通科の生徒は 34 名，また理数科の生徒は 39 名であった。この被験者は研究 1 と同じであった。

### 材料

一般興味尺度：本研究に際して独自に作成された質問紙であった。個人内で比較的一定した性格特性としての興味度の高さという一般興味の概念に基づいて想定される行動を検討して作成された。項目の作成に際しては 2 名によって十分にその内容を検討した。また質問紙の内容や言葉の分かりやすさについては中学，高校の教員の助言を得た。質問紙は 27 項目から構成され，回答は「まったく違う(1)」から「どちらとも言えない(3)」，「まったくそうである(5)」の 5 件法で行なった。

EPPS：Edwards(1954)による EPPS の日本語版(肥田野・岩原ら 1970)のうち「達成」と「変化」に含まれる項目を用いた。「達成」と「変化」に含まれる項目はそれぞれ 9 項目ずつであった。回答は「まったく違う(1)」から「どちらとも言えない(3)」，「まったくそうである(5)」の 5 件法に改めた。

親の養育態度質問紙：本研究に際して独自に作成した質問紙であった。本質問紙は一般興味に影響を与えると考えられた親の養育態度の要因を含むように作成された。また本質問紙は研究の目的から，小学校の高学年の頃を想起させる形で行なった。本質問紙は 32 項目から構成

され、回答は「まったく違う(1)」から「どちらとも言えない(3)」、「まったくそうである(5)」の5件法で行わせた。

学業成績得点：学業成績の得点は生徒のプライバシーを守る意味から採点は各クラスの担当教員が行い、全国的に行なわれた実力テストの偏差値をもとに5段階の得点化を行なった。

### 手続き

高校のロングホームルームの時間に担当教員が行なった。質問紙の実施は一般興味尺度、親の養育態度質問紙、EPPSの達成、変化の順で行なった。実施にあたって各質問紙とも「個人の情報は外部に漏れないこと」、「学校の成績評価とは関係ないこと」、「間違った答えや正しい答えがなく、思ったままを答えること」を教示した。質問紙の回答に際しては成績との照合のために出席番号のみを記入させた。

学業成績の得点化は、実力テストの総合得点の偏差値を用いて行なった。偏差値得点で49点以下を1、50点から54点を2、55点から59点を3、60点から64点を4、65点以上を5、とした。従って学業成績得点は最低1から最高5までの5段階となった。得点化については高校の担当教員に依頼した。学業成績得点は担当教員が出席番号を用いて表記した。調査者はこの学業成績得点表と質問紙に記入させた出席番号とを照合した。

## 結果

学業成績の検討 本研究の対象となった高校は成績別のクラス編成を実施している。このため、理数科クラスと普通科クラスの間で成績が異なることが予想された。そこで、分析に先立って、本研究で得られた学業成績について検討を行った。この結果、理数科クラスでは最小値が 3、最大値が 5、平均値 4.667、標準偏差 0.577であった。また、普通科クラスでは最小値が 1、最大値が 5、平均値 3.441、標準偏差 1.418であった。

これらのことから理数科クラスでは成績得点に天井効果が顕著に現れていたことが判明した。これは理数科の学級が対象校の中でも特に成績の優秀な生徒を集めて構成されていたことと、学業成績を偏差値のまま用いることができず 5 段階に得点化したことが原因であると考えられる。このため学業成績を含む分析に理数科クラスのデータを用いることが困難であると思われた。よって、以下の検討では学業成績を含む分析を行う場合には普通科クラスのデータのみを使用することとした。

一般興味尺度の検討 一般興味尺度について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。この際固有値の差を元に 3 因子を抽出することとした。分析の結果、以下のような結果が得られた。第 1 因子は問 2「こうきしんが強く、何にでもきょうみを持つ」(.682)、問 12「やってみたいことや知りたいことがたくさんある」(.629)、問 25「いろいろな話題について話すことができる」(.523)などが代表し、好奇心因子と命名された。第 2 因子は問 14「やり方がわからない問題よりもとき方のはっきりした問題のほうが好きだ。」(.581)、問 8「物事にのめりこむほうだ」(.499)、問 10「時間がたつのを忘れるほど何

かに集中する事がある」(.478)などが代表し，明快さと集中因子と命名された．第3因子は問18「単純なことをやりつづけるのはいやだ」(.740)，問17「毎日同じことをしているとあきてしまう」(.390)が含まれ，単調さの嫌悪因子と命名された．このため以降は因子分析によって得られた16項目を一般興味尺度として使用することとした．この結果については表4-1-1に示した．

一般興味尺度の因子分析の結果に基づいて信頼性係数を求めた結果，係数は.674であった．この数値は必ずしも高いものとは言えなかった．

親の養育態度質問紙の検討 親の養育態度質問紙について主因子法，バリマックス回転による因子分析を行った結果，固有値の差を元に3因子を抽出した．分析の結果は以下のとおりである．第1因子は問14「私が新しいことをやろうとするとおこった」(.836)，問13「私がふだんの時間をどう使うかについて指示した」(.667)，問12「私にはむずかしすぎることをもとめた」(.654)などが代表し，強制因子と命名された．第2因子は問29「いちど始めたことは最後までやりとおすように言われた」(.813)，問23「家庭では私がうまくできるたくさんのごとをやらせてくれた」(.695)，問17「物事を自分なりのやり方でやるようにしむけた」(.600)などが代表し，取り組み方因子と命名された．第3因子は問22「何かわからないことがあったとき，自分で努力しないと親は助けてくれなかった」(.598)，問32「自分がはじめた習い事がいやになったらいつやめてもよかった」(.544)，問6「ふだん生活の中で時間をどう使うかについて自分で決めることができた」(.453)が含まれ，自主性因子と命名された．以上の結果については表4-1-2に示した．

表 4-1-1 一般興味尺度の因子分析

		FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3
Q2	こうき心が強く 何にでもきょうみをもつ。	0.682	0.219	-0.101
Q12	やってみたい事や、知りたい事がたくさんある。	0.629	0.131	-0.025
Q25	いろいろな話題について話することができる。	0.523	0.194	-0.033
Q7	しゅみが多いほうだと思う。	0.514	0.126	0.124
Q21	知らない国の話などを聞くと、その国にいったくなる。	0.511	-0.103	-0.042
Q22	初めて学ぶ授業のときはわくわくする。	0.455	-0.014	-0.317
Q1	あたえられた課題にはどんなものでもむちゅうになる。	0.406	0.075	-0.295
Q20	「これ、もの見たさ」という気持ちはよく分かる。	0.401	-0.075	0.091
Q14	やり方がわからない問題よりもとき方のはっきりした問題のほうが好きだ。	-0.105	0.581	-0.092
Q8	ものごとくにのめりこむほうだ。	0.291	0.499	-0.180
Q10	時間がたつのを忘れるほど何かに集中する事がある。	0.112	0.478	-0.066
Q5	きょうみをもったことはもっとよゝみりたくなる。	0.269	0.466	0.157
Q16	答えが一つでない問題はいやだ。	-0.124	0.454	-0.044
Q6	新しいものやめずらしいものが好きである。	0.227	0.405	0.300
Q18	単純なことをやりつづけるのはいやだ。	0.138	0.007	0.740
Q17	毎日同じことをしているとあきてしまう。	-0.145	-0.128	0.390
	説明率	0.155	0.098	0.068
	累積説明率			0.321

表 4-1-2 親の養育態度質問紙の因子分析

		FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3
PQ14	私が新しいことをやろうとすると怒った。	0.836	-0.085	0.047
PQ13	私が普段の日常的な時間をどう使うかについて指示した。	0.667	0.181	-0.161
PQ12	私には難しすぎることを要求した。	0.654	-0.130	0.020
PQ26	親は、私が親の思う通りのやり方でやらないと怒った。	0.653	0.029	-0.165
PQ24	私が自分がやるべきことを早くやり終えると次に何をすべきかについて親が決めた。	0.652	0.094	-0.175
PQ7	自分なりに考えて手伝いをしようとしたと怒られた。	0.539	-0.088	0.291
PQ2	私が不得意なことをたくさんやらせた。	0.518	0.170	0.038
PQ25	親に困ったことについて助けてもらいに行くと、自分がバカだと思い知らされた。	0.484	0.043	0.112
PQ19	親が私にやらせたいと思うことは私たちにやらせた。	0.418	0.351	-0.027
PQ29	一度始めたことは最後までやりとおすように言われた。	-0.012	0.813	-0.090
PQ23	家庭では私が上手にできるたくさんのお手伝いをやらせてくれた。	0.055	0.695	0.087
PQ17	物事を自分なりのやり方でやるようにしむけた。	-0.393	0.600	0.125
PQ10	私に何か新しいやり方でいろいろ試させてくれた。	-0.293	0.583	-0.180
PQ27	やらなければならぬ手伝いをしないと怒られた。	0.320	0.548	0.121
PQ9	分からないことをたずねた時、親は喜んで助けてくれた。	0.139	0.542	-0.246
PQ20	自分の家庭で、私はどんな難しいことでもやる気を持って試みればできるようになった。	0.195	0.496	0.121
PQ31	家族できめた約束ごとを破ると怒られた。	0.149	0.493	-0.018
PQ28	自分がしたことについて良いこと、悪いことをはっきりと言ってくれた。	0.030	0.480	0.089
PQ11	困ったことを相談に行くと解決法を教えてくださいました。	-0.116	0.441	-0.172
PQ22	何か問題を抱えていた時、自分でまず解決しようとしなければ親は助けてくれなかった。	0.106	0.226	0.598
PQ32	自分が始めた習い事が嫌になったらいつやめても良かった。	-0.024	-0.161	0.544
PQ6	日常生活の中で時間をどう使うかについて自分で決めることができた。	-0.374	-0.001	0.453
	説明率	0.181	0.166	0.056
	累積説明率			0.403

親の養育態度質問紙の信頼性 親の養育態度質問紙の因子分析の結果得られた項目について信頼性を検討した。この結果、係数は.759であった。

相関関係 一般興味質問紙の並存的妥当性の検討のために EPPS の「達成」と「変化」の項目との相関を求めた。この結果、一般興味尺度の「明快さと集中因子」と EPPS の変化、一般興味因子の「単調さの嫌悪因子」と EPPS の達成、変化の間には有意な相関は見られなかった。しかし、これ以外の関係では有意な正の相関が見られた。また、一般興味尺度の得点合計と EPPS の達成、変化の得点との相関は双方共に有意なものであった。EPPS の達成、変化の間には有意な正の相関が確認された。以上の結果については表 4-1-3 に示した。

表 4-1-3 各要因間の相関関係

	好奇心	明快さと集中	飽き	達成 EPPS	一般興味(合計)
明快さと集中	r= 0.267 p< 0.024 n= 71				
飽き	-0.033 0.785 70	-0.042 0.729 71			
達成 EPPS	0.493 0.000 70	0.510 0.000 71	0.062 0.608 70		0.560 0.000 69
変化 EPPS	0.585 0.000 69	0.041 0.735 70	0.171 0.161 69	0.271 0.024 70	0.508 0.000 68

パス解析 パス解析にあたって時系列的な因果関係が推測されることから以下のようなモデルを作成した。つまり第1水準には親の養育態度の3要因，第2水準に一般興味の3要因，学業成績を第3水準とした単一方向の因果性を仮定したモデルである。

このモデルに基づいて検討を行った結果，一般興味の「好奇心因子」に対しては養育態度の「強制因子(.161)」, 「取り組み因子 (.436\*)」からの影響が見られた( $R^2=.208^*$ )。一般興味の「明快さと集中因子」に対しては養育態度の「強制因子(.145)」のみの影響が見られた( $R^2=.021$ )。一般興味の「単調さの嫌悪因子」に対しては親の養育態度の「強制因子(.208)」, 「取り組み因子(.456\*)」, 「自主性因子(.251)」の影響が見られた( $R^2=.225^+$ )。「学業成績」に対しては一般興味の「好奇心因子(.243)」, 親の養育態度の「取り組み因子(-.240)」の影響が見られた( $R^2=.069$ )。以上の結果については図3-1-1に示した。

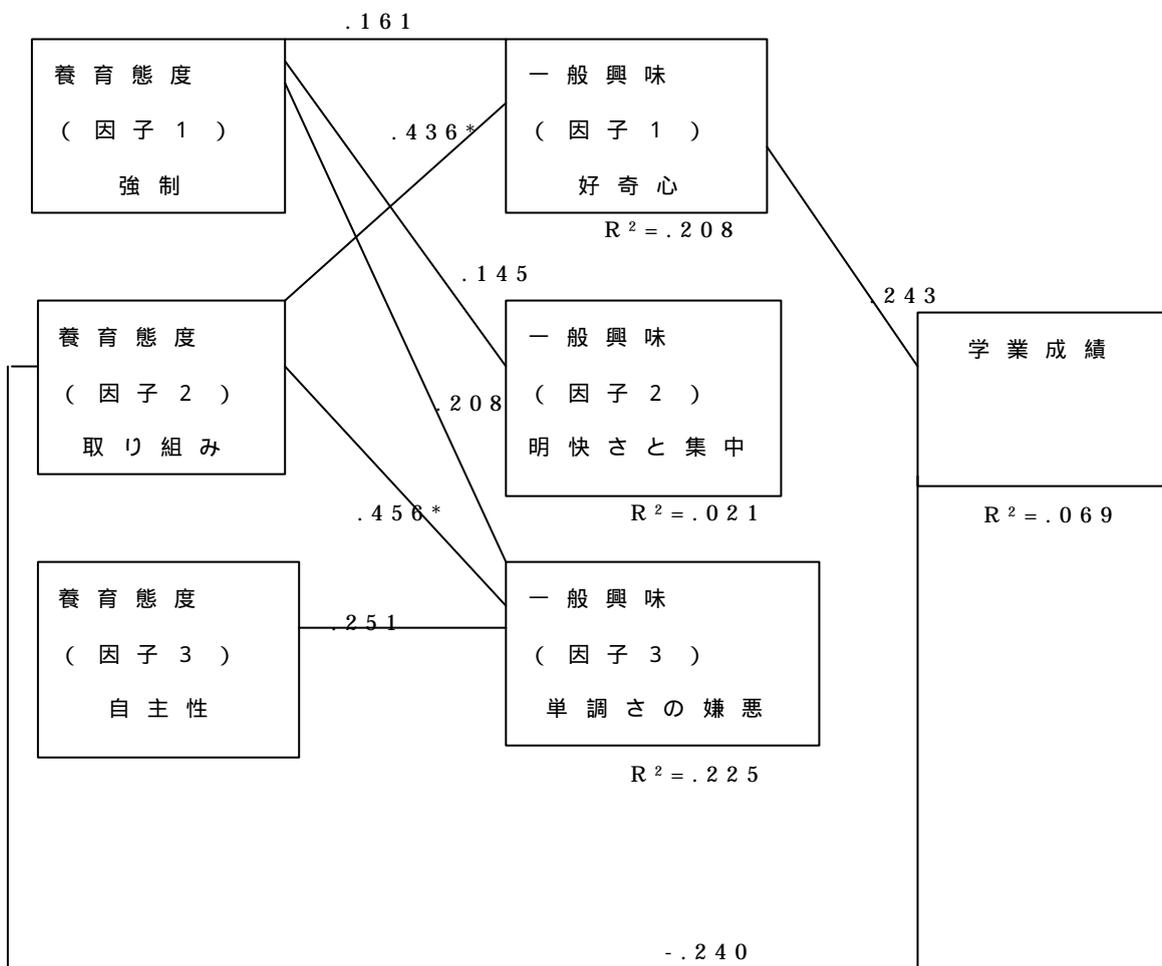


図 3-1-1 思春期の親の養育態度と高校生の一般興味，  
学業成績の関係

## 考察

本研究で作成された一般興味質問紙は信頼性係数がそれほど高いものではなかったものの、EPPSの達成や変化の項目との相関が見られたことから、並存的妥当性については保証されたと考えることができる。

パス解析の結果から、親の養育態度が一般興味に与える影響や、一般興味が学業成績に与える影響が確認された。特徴的であった点は一般興味の「好奇心」が親の養育態度の「強制」と「取り組み」から正の影響を受けていたことである。「興味」は内発的動機づけと非常に密接な関係を持つ概念である。従来の内発的動機づけ研究では自己決定を与えることが内発的動機づけを促進すると考えられてきた(Deci, 1971)。これに対して本研究の結果からは、親が子供に対して様々な強制を与えることや物事に対する取り組み方に対して影響を与える事が子供の好奇心を伸ばすという結果が得られた。このため本調査で得られた結果は従来の内発的動機づけ研究と矛盾していると考えられる。しかし選択的な注意を要する課題の遂行が加齢に伴って上昇するという研究結果(Condry, Haltom, & Neisser, 1977)からも分かるとおり、児童の注意力は成人と比較して低いものであり、単一の対象に対して集中力を持続しにくいものであると考えられる。このため、子供が課題に対して適切に対処するためにはある程度親が子供の行動を制御することが必要になると思われる。そこで親が様々な対象に子供の注意を導く、もしくは注意を維持、誘導するといった関わり方が好奇心に対して正の影響をもっていたと考えることができる。

一般興味や親の養育態度から学業成績に対しても、あ

る程度の影響が確認された。しかし学業成績に対する影響は有意なものとはいえなかった。これは学業成績に対しては知能や生活環境，家族形態など様々な要因が関係していることが原因であると考えられる。

本研究では小学校高学年を採り上げて親の養育態度の検討を行った。この時期は Freud(1940)のいう潜伏期に当たり，物事に対して勤勉に取り組むという姿勢を獲得する時期であるとされている。またこの時期は同時に日常生活に対して最も強い影響を与える存在として親を仮定する事ができ，この親の養育態度が以降の「興味」のあり方に対して強い影響を与えている事は非常に重要な意味を持つと考えられる。なぜなら人間の「興味」がこれまで考えられてきたほどに生得的に規定されたものではなく，所与の環境において各個人が環境から与えられる要請に従って構成されるものである事を示唆するものだからである。

## 2 . 第 4 章 の 総 括

本章は個体発達の過程で「興味」に対して親の養育態度が与える影響と、「興味」が高校生の学業成績に対して与える影響が検討された。この結果高校生の「興味」に対して思春期の親の養育態度が強い影響を持っていることが示された。また高校生の学業成績に対しても「興味」からの影響が見られた。

Ryan と Deci ( 2000 ) では内発的動機づけが最も強力な人間の生得的傾向であると仮定し、同時に内発的動機づけ研究の中心的理論である自己決定理論においてもこれを生得的な性質として仮定している。しかし研究 4 の結果からは個人内で比較的一定した傾向として見られる興味度の高さを示す一般興味には親の養育態度の影響を受けて形成される側面が確認された。ここで採り上げられた一般興味は研究 3 において動機づけに対して直接的に強い影響を持っていることが確認されており、内発的動機づけの中心的な概念であると考えられる。つまり、内発的動機づけは Ryan と Deci が提唱しているように生得的な側面のみではなく、人間の成長過程を通して様々な周辺環境の影響を受けて形成されるものであると考えることができる。

特に本研究で採り上げた思春期において両親との関係は、児童の生活環境の中心的な構成要素の一つであると考えることができる。このことから、人間の「興味」というものは生活環境との相対的な環形成の中で漸次形成されるものと考えることができる。しかしこの点については本研究のみから断定することはできず、以後の研究において検討されるべきテーマである。

## 第 5 章 「興味」の構造についての検討

研究 4 において一般興味が従来の内発的動機づけ研究で考えられていたように必ずしも生得的な要因のみではなく、生活環境の影響によって構成されるものであることが示唆された。しかし研究 4 では一般興味と環境との関係について十分な検討が行われたとは言い難く、本章の研究ではこの点について検討することが一つの目的とされた。

そこで第 5 章では研究 5 において「興味」の構造を検討すると共に、研究 6 では職業を持った成人の「興味」の構造についての検討と周辺環境との相互作用の中で構築される力動性を持った構造として「興味」を提唱する試みを行った。

本邦の社会、文化的背景に照らした場合に成人の生活環境に対して最も強い影響を与える外的要因の一つとして職業を上げることができる。現在の日本社会においては教育課程が終了した後には何らかの形で職業を持ち、収入を得ることによって自らと共に家族の生活を運営するか、もしくは家族の他の構成員によって経済基盤が確保されている場合には家庭の運営を行うことが明示的、暗示的に求められているからである。

社会から個人に対して提示されるこのような要請は、個人の行動に対して非常に強力な影響を与える要因であると考えられる。

また本研究においてこれまで行った検討や従来の研究によって得られた知見をもとに、本研究では一般興味について、個人が持つ好奇心の強さであり、過去の経験や

価値観，有意味性についての判断を含み，より積極的に環境に対して適応するための個人的な傾向であると仮定した．

この考え方に従うと第3章で見られた親の養育態度が「興味」に対して与える影響は，思春期に親から与えられる様々な要請がこの時期の子供にとって非常に重要な環境要因であったことによると考えることができる．

## 1 . 研究 5 「興味」モデル構成の試み\*3

研究 3 において一般興味が人間の行動や動機づけに対して重要な役割を担う概念であることが確認された。また研究 4 では一般興味が発達過程において周辺環境から受ける影響が明らかにされてきた。しかし研究 4 では一般興味と周辺環境の関係について十分な検討が行われたとはいえない。そこで本研究では一般興味と環境の関係について大学生の「興味」を採り挙げて検討することとした。

また先に挙げたように、「興味」と非常に密接な関係を持った概念として内発的動機づけが挙げられている。内発的動機づけ理論は従来より様々な場面で適用されてきているが、こうした研究の中に心理的な健康状態との関連を取り扱ったものが見られる (Schulz 1976)。この研究では内発的動機づけに対して影響を与える要因のうち自己決定を採り上げ、心理的な健康状態との関係が検討された。この結果慰問を受ける時期について自分たちで決定することができた養老院の入居者はそうでなかった者と比較して、明白な健康状態にあったことが示された。この研究では健康の指標として投薬量、慰問者による標定、幸福感や充実感についての自己標定、能動性などが用いられた。この研究と同様の結果は Langer & Rodin (1976) でも得られている。

こうした研究では内発的動機づけが人間の健康に対して与える影響を日常生活の中で総合的に取り扱ったもの

---

\*3 芳野 郁朗 2002 興味モデル構成の試み 感情心理学  
研究 9 巻 2 号 掲載予定 印刷中

と考えることができる。これに対して個々の活動においても同様に、内発的動機づけと健康に関連した心的反応が見られる。Deci(1975)は内発的動機づけを定義する中で、内発的動機づけに伴う心的反応として、満足感や喜びなどを挙げている。逆に内発的動機づけが抑制されることは「つまらなさ」の感覚を生じると述べている。

このことから、内発的動機づけの抑制は心理的なストレスを生じ、結果的に免疫系の働きを通して身体的な健康状態にまで影響を与えることが考えられる。つまり、内発的動機づけと密接な関連をもった「興味」は心理的な健康状態ともまた関連をもっていると考えられる。

先にも述べたように、人間は「興味」を持った活動に対してはたとえ失敗を経験しようとも無力感を形成せず、非常に積極的な関与を維持する。また「興味」を持った活動の遂行に際してはその成否に関わらず、満足感や面白さといった快感情が経験されると考えられる。これは、「興味」を持った活動に対しては内発的に動機づけられるため、その成果よりも学習や習熟、遂行そのものが重要視されると考えられるからである。このため様々な活動に対して「興味」を持っている者は、日常生活の中で満足感や面白さを頻度、強度共に高く経験していると考えられる。

更に、こうした様々な快感情を日常生活の中で経験していることは日常生活の充実感として感じられると考えることができる。このため、日常生活の中で「興味」を多く持っているものは、結果的に日常生活の中で充実感を経験すると考えることができる。

こうしたことから本研究では、調査の結果得られた「興

味」と日常生活における充実感の関係を検討することとした。

## 予備調査

### 目的

予備調査では大学生の「興味」について包括的なリストを得ることを目的とした。

### 方法

#### 被験者

埼玉県内私立大学学部生 51 名であった。

### 材料

日常的な「興味」についての質問紙であり、本研究に際して独自に作成された。大学生が日常的に「興味」を感じている事柄とその理由を対にして自由記述で 5 項目まで回答させた。

### 手続き

質問紙の実施は大学の講義終了後の時間を用いて行われた。質問紙の実施に際して「この質問紙には正しい答えや間違えた答えは存在しないこと」と「普段思っているとおりに答えること」を教示した。また質問紙には 5 項目まで回答欄があるが、5 項目に満たない場合は可能な限り挙げることを告げた。

## 結果

自由記述の回答を元に共通する項目をまとめた結果、「興味」を感じている事柄について114項目の回答が得られた。また、「興味」を感じる理由については235件の回答が得られた。

## 本調査

### 目的

本調査では予備調査で得られた「興味」を感じる対象を基に大学生の「興味」がどのような構造を持つかを検討することを目的とした。また大野(1984)による青年を対象とした充実感尺度との関係を検討することにより、本研究で得られた「興味」の構造の妥当性を検討することを目的とした。

### 方法

#### 被験者

埼玉県内の私立大学学生508名であった。このうち、有効回答数は504名(男子225名,女子276名。性別について無回答であったものが3件含まれた)であり、平均年齢は20.64才であった。

## 材 料

「興味」質問紙：予備調査で得られた「大学生が「興味」を持っている対象」114項目を意味の類似性を基に再度分類したところ、51項目からなるリストが得られた。「興味」質問紙はこの51項目に対してそれぞれどの程度「興味」を持っているかを尋ねるものであった。「まったく興味がない(1)」から「非常に興味がある(5)」までの5件法で回答させた。

充実感尺度：大野(1984)によって作成された充実感尺度を用いた。この尺度は青年の充実感を青年の信頼、自立、連帯の3側面から測定した尺度である。この尺度は逆転項目を含む52項目から構成されたものである。また、下位項目として第1因子「充実感気分－退屈・空虚感因子」、第2因子「自立・自信－甘え・自信のなさ因子」、第3因子「連帯－孤立因子」、第4因子「信頼・時間的展望－不信・時間的展望の拡散因子」の4因子によって構成されている。回答は「今の自分にまったく当てはまらない(1)」から「今の自分に非常に当てはまる(5)」までの5件法で行われた。

## 手 続 き

質問紙には冒頭に教示文として「各質問には正しい答えや間違った答え、望ましい答えが存在しないこと」、「深く考えすぎず、思ったままを回答すること」記載した。

## 結果

「興味」質問紙に対する回答について主因子法による因子分析を行い、プロマックス法による斜交回転によって7因子を抽出した。第1因子には問19「経済」(.758)、問28「政治」(.756)、問45「勉強」(.593)などが含まれ、「知識の獲得」と命名された。第2因子には問35「出会い」(.573)、問13「会話」(.520)、問43「ファッション」(.483)などが含まれ、「対人関係」と命名された。因子3には問34「ツーリング」(.656)や問32「単車」(.643)、問39「ドライブ」(.474)などが含まれ、「レクリエーション」と命名された。第4因子には問11「絵画」(.596)、問7「絵を描く」(.585)、問10「音楽鑑賞」(.569)などが含まれ、「芸術的活動」と命名された。第5因子には問24「裁縫」(.637)、問49「料理」(.514)、問29「ダイエット」(.497)などが含まれ、「日常生活の充実」と命名された。第6因子には問14「体を動かす」(.841)、問27「スポーツ」(.810)、問18「クラブ活動」(.388)などが含まれ、「身体運動」と命名された。第7因子には問3「インターネット」(.767)、問23「コンピュータ」(.735)、問37「テレビゲーム」(.453)などが含まれ、「メディア、テクノロジー」と命名された。この結果は表5-1-1に示した。

この因子構造を参考にして各因子に含まれる項目のうち因子負荷量が.45以上のもの、もしくは上位3項目を用いて検証的因子分析を試みた。また各観測変数には誤差要因を仮定し、潜在変数である各因子には攪乱要因を仮定した。さらに各因子間に仮定されたパスのうち係数の低いものについてはこれを削除した。モデルの検討にはGFI, AGFI, RMSEAなどを用いた。さらに当初の検討では誤差要因間の共分散を仮定していなかったが、修

正指標を参考に解釈可能な項目に関しては誤差変数間の共分散を認めるモデルを構成した。

この結果得られたモデルをパス図にしてあらわしたものが図 5-1-1 である。このモデルの GFI は .851 , AGFI は .821 , RMSEA は .070 であり , モデルは得られたデータとほぼ適合していると考えることができた。またモデルに示された係数や共分散はすべて有意なものであった。この結果から大学生の「興味」の構造として 7 因子のモデルが提示され , データとも適合していることが示された。さらに男女差をモデルに含めた場合にはモデルの適合度が著しく低下した。このため「興味」の構造そのものは男女間で差がなく , 共通したものであることが分かった。

表 5-1-1 興味質問紙の因子分析結果

		1	2	3	4	5	6	7
INT19	経済	0.758	-0.022	0.132	-0.133	-0.186	-0.105	0.162
INT28	政治	0.756	-0.082	0.106	-0.059	-0.189	-0.066	0.127
INT45	勉強	0.593	-0.041	-0.056	-0.038	0.166	0.016	-0.050
INT21	国際交流	0.524	0.052	0.041	0.155	0.065	0.061	-0.043
INT6	英語	0.497	0.016	-0.106	0.237	0.016	0.073	0.025
INT25	仕事	0.438	0.179	0.151	-0.116	0.070	-0.020	0.019
INT15	考えること	0.370	0.045	-0.049	0.216	0.029	0.101	0.024
INT35	出会い	-0.039	0.573	0.041	0.067	-0.053	0.019	-0.034
INT13	会話	0.135	0.520	-0.098	0.225	0.040	0.111	-0.107
INT43	ファッション	0.102	0.483	-0.090	0.094	0.184	-0.043	-0.015
INT40	飲み会	-0.029	0.471	0.255	-0.126	0.092	-0.052	0.105
INT36	テレビ	-0.121	0.453	-0.041	-0.187	0.132	0.062	0.278
INT31	他人	0.211	0.436	0.037	0.061	0.075	-0.042	-0.137
INT1	異性	-0.066	0.426	0.028	0.041	-0.157	0.109	0.184
INT2	イベント	-0.232	0.340	0.140	0.273	-0.011	-0.017	0.212
INT41	バイト	0.085	0.321	0.233	-0.130	0.224	-0.123	0.097
INT34	ツーリング	0.085	0.035	0.656	0.083	-0.063	-0.004	-0.120
INT32	単車	-0.012	0.009	0.643	0.076	-0.178	0.038	0.012
INT39	ドライブ	0.120	0.227	0.474	-0.017	0.102	-0.067	-0.097
INT17	キャンプ	-0.002	0.054	0.452	-0.073	0.201	0.190	-0.069
INT30	ダイビング	0.084	-0.006	0.364	0.129	0.183	0.011	-0.094
INT11	絵画	0.025	-0.193	-0.015	0.596	0.260	-0.089	0.093
INT7	絵を描く	-0.027	-0.126	-0.009	0.585	0.272	-0.012	0.048
INT10	音楽(鑑賞)	0.053	0.235	-0.033	0.569	-0.183	0.016	0.011
INT9	音楽(演奏)	0.018	0.022	0.139	0.555	-0.072	0.008	-0.054
INT47	ライブ	-0.049	0.320	0.180	0.486	-0.119	-0.155	0.054
INT24	裁縫	-0.008	-0.137	0.064	0.072	0.637	-0.091	0.079
INT49	料理	0.066	0.032	0.090	0.050	0.514	0.047	0.014
INT29	ダイエット	-0.010	0.175	-0.135	-0.105	0.497	-0.074	-0.065
INT51	食べること	-0.018	0.259	0.021	-0.119	0.380	0.067	0.004
INT4	占い	-0.211	0.242	-0.079	0.026	0.364	-0.081	0.097
INT22	子供	0.022	0.156	0.078	0.071	0.360	0.120	-0.123
INT42	パズル	-0.091	-0.175	0.282	0.040	0.309	0.047	0.223
INT14	体を動かす	0.030	-0.006	0.013	0.015	-0.033	0.841	-0.010
INT27	スポーツ	-0.024	0.001	0.052	-0.079	-0.093	0.810	0.087
INT18	クラブ活動	-0.082	0.089	0.266	-0.057	0.008	0.388	-0.051
INT20	健康	0.217	0.175	-0.205	-0.048	0.152	0.331	0.037
INT3	インターネット	0.110	0.158	-0.232	0.010	0.060	-0.057	0.767
INT23	コンピュータ	0.268	0.008	-0.073	-0.005	0.040	0.004	0.735
INT37	テレビゲーム	-0.163	0.107	0.108	0.046	-0.101	0.103	0.453
INT16	機械いじり	0.093	-0.223	0.273	0.145	-0.029	0.146	0.363

因子間相関

	factor1	factor2	factor3	factor4	factor5	factor6	factor7
factor2	0.117						
factor3	0.064	0.239					
factor4	0.281	0.162	0.299				
factor5	0.285	0.283	0.116	0.431			
factor6	0.141	0.403	0.325	0.128	0.234		
factor7	0.197	0.103	0.473	0.221	0.089	0.136	

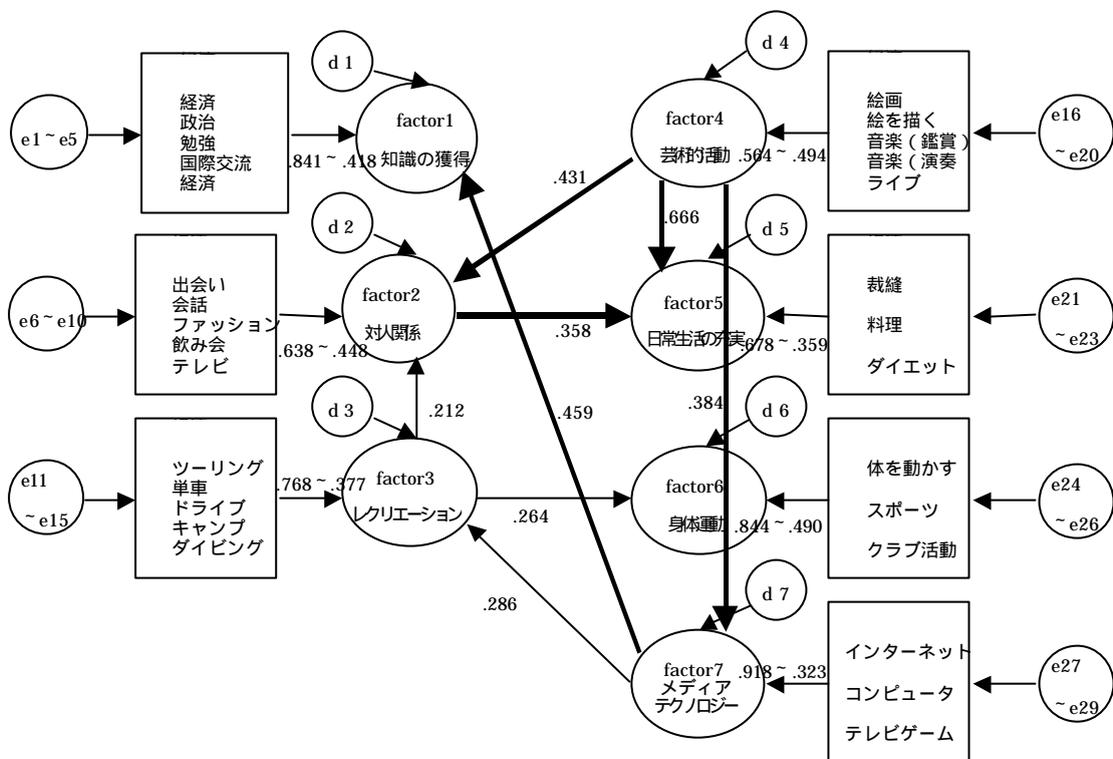


図 5-1-1 興味質問紙の因子構造モデル

(すべてのパスは  $p < .01$  で有意)

充実感尺度は既にその信頼性と妥当性が検討されたものである。しかし本研究では「興味」との関係の検討に共分散構造分析を用いるため、前提となる各々の因子構造が安定していることが望ましいと考えられる。このため因子構造の確認の意味で再度因子分析を行った。因子分析は主因子法を用い、プロマックス回転によって因子を抽出した。この結果、大野(1984)に示された4因子とは若干異なった以下の4因子の構造が示された。第1因子は問3「毎日の生活に退屈している(逆)」(.732)、問1「毎日の生活がおもしろくない(逆)」(.693)、問21「毎日、毎日、変化のない単調な日々でつまらない(逆)」などが含まれ、「充実感」と命名された。第2因子は問14「自身の信念にもとづいて生きている」(.650)、問33「私は主体的に生きていると思う」(.613)、問35「生きていく上で自分の決めたことに責任がもてる」(.583)などが含まれ、「主体性」と命名された。第3因子には問50「いっしょうけんめいにがんばってみてもしかたがないと思う(逆)」(.657)、問27「私はなにか困ったことがあるとすぐに投げ出してしまう(逆)」(.524)、問30「だれも私を相手にしてくれないような気がする(逆)」(.508)などが含まれ、「無気力のなさ」と命名された。第4因子には問44「いざとなるとどうしても人をたよってしまう」、問52「自分の生き方を考えるとき、人の意見に左右されやすい」(.509)、問34「私は社会や親きょうだいに甘えていると思う」(.506)が含まれ、「依存性」と命名された。このため以降の分析では今回得られた因子構造を用いて検討を行うこととした。またこの結果は表5-1-2に示した。

この因子構造を参考に、確認的因子分析に用いるモデルを構成した。充実感尺度では各因子に含まれる項目の

うち因子負荷量が.45以上のものを最大5項目まで用いて共分散構造分析による確認的因子分析を行った。また各観測変数には誤差要因を仮定し、潜在変数である各因子には攪乱要因を仮定した。さらに各因子間に仮定されたパスのうち係数の低いものについてはこれを削除した。モデルの検討に用いた指標は興味度質問紙の分析と同様である。また「興味」質問紙の場合と同様に当初の検討では誤差要因間の共分散を仮定していなかったが、修正指標を参考に解釈可能な項目に関しては誤差変数間の共分散を認めるモデルを構成した。

この結果得られたモデルをパス図に表したものが図5-1-2である。またこのモデルのGFIは.925, AGFIは.901, RMSEAは.062であり、得られたデータとモデルの適合度は非常に高いといえた。また係数はすべて有意なものであった。

表 5-1-2 充実度尺度の因子分析結果

		1	2	3	4
LIFE3	毎日の生活に退屈している(第1因子)	0.732	-0.090	0.058	-0.155
LIFE1	毎日の生活が味もしくくない	0.693	-0.060	0.138	-0.164
LIFE21	毎日、毎日、変化のない、単調な日々でつまらない(第1因子)	0.664	-0.101	0.233	-0.076
LIFE19	毎日毎日が空虚である	0.645	-0.057	0.272	-0.048
LIFE12	生活に充実感で満たされた楽しさがある(第1因子)	0.635	0.366	-0.148	-0.184
LIFE38	今の自分のなにかもとの足りなさを感ずる	0.634	-0.165	-0.212	0.328
LIFE23	自分の理想とはかけ離れた今の生き方に焦燥感を感じる(第3因子)	0.598	-0.054	0.042	0.194
LIFE5	自分が本当にもとめているものが見つからないというあせりがある	0.560	-0.015	-0.119	0.198
LIFE2	毎日の生活にはりがある(第1因子)	0.544	0.176	-0.064	-0.202
LIFE29	今の自分が嫌いである	0.483	0.057	0.136	0.222
LIFE4	今の自分に誇りを感じている	0.456	0.347	-0.170	0.099
LIFE42	日ごろ「何もやる気がしない」と感ずる	0.446	-0.138	0.352	0.115
LIFE7	何をすべきかというところが自分でもよくわからない	0.396	0.087	-0.060	0.295
LIFE14	自らの信念にもとづいて生きている(第2因子)	-0.121	0.650	0.011	0.198
LIFE33	私は主体的に生きていると思う(第2因子)	-0.013	0.614	0.004	0.203
LIFE35	生きていく上で自分の決めたことに責任がもてる	-0.140	0.583	0.122	0.173
LIFE26	自分の生き方は自分で決めることができる(第2因子)	-0.157	0.551	0.190	0.141
LIFE10	私は自分の将来に夢をもっている	0.043	0.529	0.059	0.001
LIFE39	私には未来に明るい希望がある	0.266	0.523	0.008	-0.014
LIFE49	毎日の生活の中でものをやりとげる喜びがある(第4因子)	0.219	0.520	0.031	-0.261
LIFE24	自分の生き方に自信がもてる	0.325	0.504	-0.171	0.198
LIFE47	自分の責任をまはすことに喜びを感ずる(第4因子)	-0.131	0.491	0.256	-0.279
LIFE18	私は独立心が強いと思う(第2因子)	-0.077	0.480	-0.102	0.149
LIFE37	私には毎日の生活の中でなにかへの使命感がある(第4因子)	-0.013	0.467	-0.140	-0.077
LIFE28	私は社会や家族の期待こたえていると思う	0.175	0.462	-0.221	-0.005
LIFE51	私は困難に直面しても多少のことではへこたれない	-0.097	0.428	0.154	0.210
LIFE20	私にはもう立ちこめる夢中になれる没頭できることがある	0.255	0.374	0.121	-0.152
LIFE16	自分の周囲の人たちや家族の人たちなどにとって私の存在は意味があると思う	0.177	0.345	0.192	-0.130
LIFE50	いっしょうけんめいがんばってみてもしかたがないと思う	0.083	-0.030	0.657	-0.084
LIFE27	私はなにか困ったことがあるとすぐに投げ出してしまう	-0.023	0.047	0.524	0.247
LIFE30	だれも私を相手にしてくれない、ような気がする(第3因子)	0.297	-0.141	0.508	0.130
LIFE9	自分の生き方や人生について真剣に考えたことなどない	-0.193	0.270	0.489	-0.093
LIFE17	私ひとりくらい、まじめにやらなくてもよいと思う	0.051	-0.037	0.410	-0.019
LIFE32	毎日つまらないが今のままで別に不満はない	-0.049	-0.070	0.409	-0.097
LIFE15	特別おもしろいこともない、つまらないこともない、人生はこんなものだと思う	0.120	-0.034	0.387	0.001
LIFE48	私をわかってくれる人がいないと思う(第3因子)	0.267	-0.038	0.384	-0.008
LIFE11	何をやっても私はだめだと思う	0.207	0.201	0.350	0.179
LIFE44	いざとなるとどうしても人をたよってしまう(第2因子)	-0.036	0.044	0.064	0.567
LIFE52	自分の生き方を考えるとき人の意見に左右されやすい	-0.083	0.148	0.037	0.509
LIFE34	私は社会や親きょうだいに甘えていると思う	0.036	-0.002	-0.169	0.506

因子間相関

	factor1	factor2	factor3	factor4
factor1				
factor2	0.527			
factor3	0.539	0.567		
factor4	0.303	0.316	0.248	

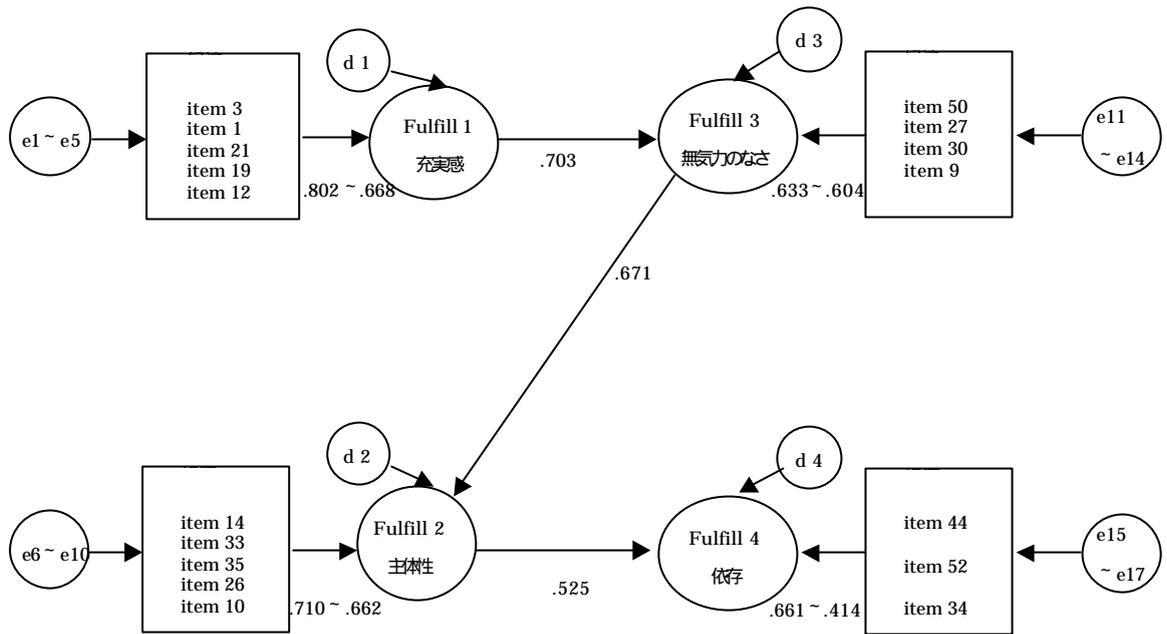


図 5-1-2 充足感尺度の因子構造モデル

(すべてのパスは  $p < .01$  で有意)

「興味」質問紙と充実感尺度ごとの検討においてデータとの適合性の高いモデルが得られた。そこで「興味」と充実感の関係を検討するために双方の質問紙について回帰法によって因子得点を算出し、「興味」質問紙の7因子と充実感尺度に含まれる4因子の間の相関を求めた。「興味」質問紙と充実度尺度の相関は表5-1-3に示した。この結果、仮定された「興味」と充実感の関係は支持され、「興味」質問紙の妥当性に対して一定の支持が得られた。さらに興味度質問紙と充実感尺度の間に何らかの関係が存在することが確認されたことから、その関係を詳細に検討するために共分散構造分析を用いた検討を行った。モデルの構成に当たっては各々の確認的因子分析の際に得られたモデルを変更しないことに留意し、相互の関係性を示すパスのみを加えた。モデルの検討に用いた指標は以前のものと同様である。

検討の結果得られたモデルをあらわしたものが図5-1-3である。このモデルのGFIは.833、AGFIは.818、RMSEAは.053であり、得られたデータとほぼ適合するモデルと考えられた。この結果得られた係数は全て有意なものであり、かつ解釈可能なものであったと考えられる。

表 5-1-3 興味質問紙と充実度尺度の因子間の相関

	satisfv1	satisfv2	satisfv3	satisfv4
interest1	0.134**	0.235**	0.233**	0.088*
interest2	0.105*	0.152**	0.125**	-0.137**
interest3	0.094*	0.149**	0.077†	0.116**
interest4	0.125**	0.177**	0.227**	0.041
interest5	0.138**	0.147**	0.172**	-0.145**
interest6	0.173**	0.237**	0.211**	0.022
interest7	-0.003	0.090*	-0.023	0.137**

† p < . 1 0      \* p < . 0 5      \*\* p < . 0 1

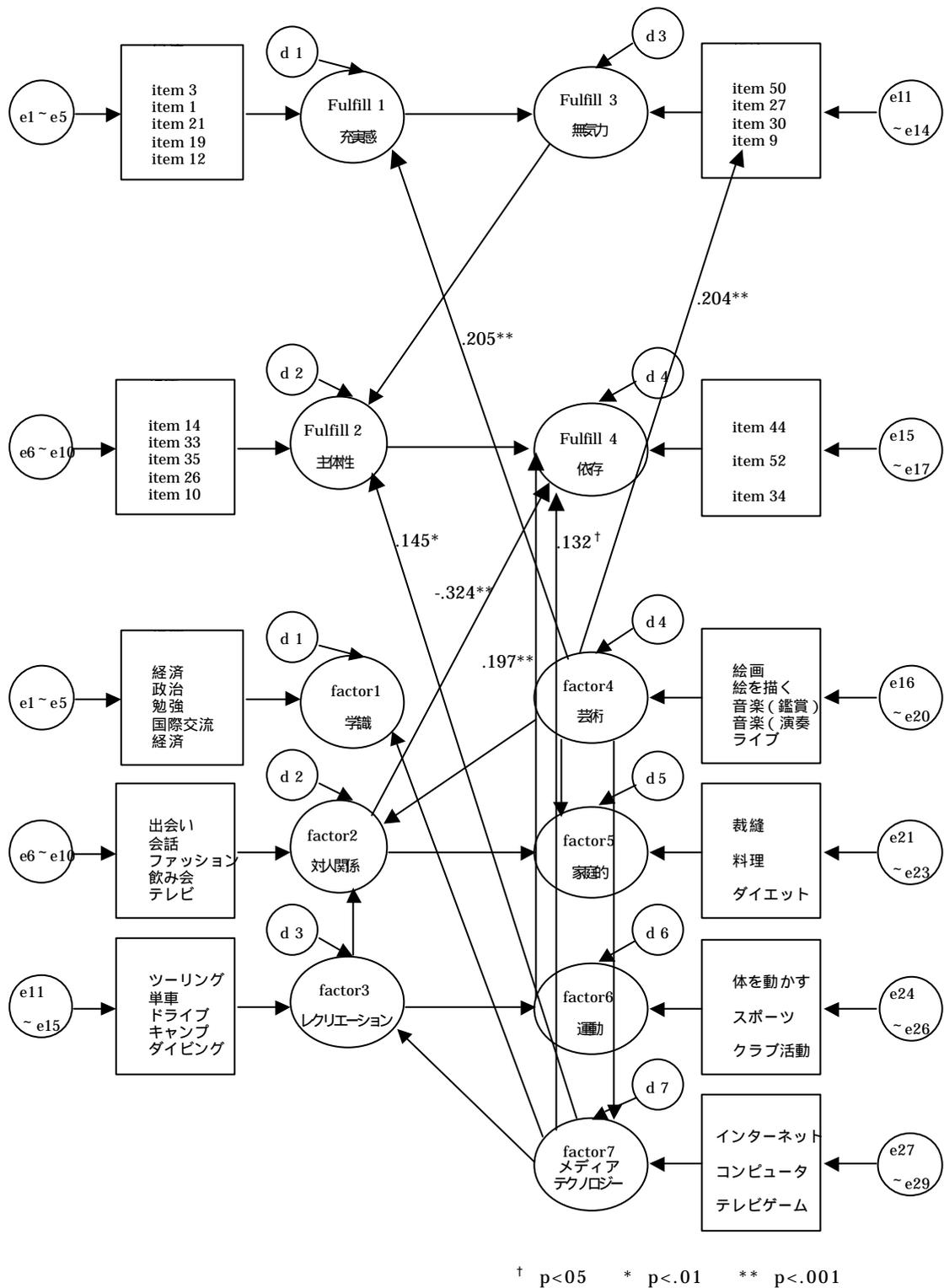


図 5-1-3 興味質問紙と充実感尺度の関係  
 (両尺度の関係を示すパスのみ係数を示した)

## 考察

本研究の結果，大学生の「興味」が相互に関係性を持つ7つの要因から構成されていることが確認された。

第1因子の「知識の獲得」は自らの生活環境の中で有意義な情報を獲得しようとする活動であると考えられることができる。つまり人間の「興味」の特徴の一つとして以下のようにまとめることができる。日常生活で経験する様々な周辺環境について，主観的な有意味性の判断をもとに修得しようとする傾向であり，本来生得的に持っていた特性が発達したものである。

第2因子の「対人関係」は人間の周辺環境のうち対人的な文脈に着目したものであると考えられることができる。こうした傾向は人間が社会的な生物であることを考えると生得的なものであると考えられることができる。事実アタッチメント理論などでは人間が他者と密接な関係性を維持しようとする傾向を生得的なものであると捉えている(Harlow, 1958)。この「対人関係」に対する「興味」はこうした生得的な傾向を基に生育期の様々な対人的交渉場面を通して形成されるものと考えられることができる。

第3因子の「レクリエーション」は日常生活から離れて行われる様々な娯楽に対する「興味」である。レクリエーションについては日常からの逸脱や，ストレスの解消，有能さについての認知，対人関係など様々な要因が関係している。レクリエーションにはこうした様々な要因が総合的に関連していると考えられる。

第4因子の「芸術的活動」は他の生物と比較した場合に

人間にとって非常に特徴的な活動であるということが出来る。特に大脳皮質の働きに依存した活動であり、創造性や美的感覚などが関係するものと考えられる。人間の活動の中で文化や社会的な影響を特に強く受けるものでもある。また「芸術的活動」には絵を描いたり音楽を聴いたりといった側面のみではなく、これらを鑑賞するという側面も存在している。このことから「芸術的活動」は単なる創造性ではなく、鑑賞によって得られる情緒的反応やストレスの解消などの様々な要因を総合的に含むものと考えられる。

第5因子の「日常生活の充実」は人間の日常生活そのものに対する「興味」であると考えられる。ここに含まれる活動は日常生活を豊かなものにし、充足感を与えるものと考えられる。これらの活動に対する「興味」は発達の初期の段階では生活そのものが養育者によって維持されるためさほど強いものではないと考えられる。しかし成長するにつれて生活環境が親から独立したものになり、家庭を持つようになるとさらに強くなっていくと考えられる。こうした変化は成熟によるものであるというよりはむしろ成長に伴う生活環境の変化によって生じるものと考えられる。

第6因子の「身体運動」は日常的な活動に伴った運動ではなく、意図的に行われる大きな動きを伴うものである。「身体運動」は運動そのものを目的として行われることもあれば有能さの感覚を得ることや統制感を得ること、ストレス解消、健康促進など様々な目的をもって行われる。また集団で行われるような競技の場合には対人的な関係性をも含めたものと考えなければならない。こうした意味では「身体運動」もまた多くの要因が複合的に関係したものであると考えられる。

第 7 因子の「メディア , テクノロジー」は様々な情報伝達手段や日常生活で接する道具などの機械的操作や機械そのものに対する「興味」である . ここでは機械操作に伴う有能感や統制感 , 操作に必要な知識の獲得など様々な要因が関係している . この領域に含まれる活動は , 各社会ごとの経済状態や技術水準 , 各々の機械や道具に対する一般的な価値基準など様々な要因の影響を受けるものと考えられる .

共分散構造分析の結果から考えると第 1 因子の「知識の獲得」, 第 2 因子の「対人関係」, 第 4 因子の「芸術的活動」, 第 5 因子の「日常生活の充実」, 第 7 因子の「メディア , テクノロジー」は非常に密接な関係を持っているため , 一連のまとまりとみなすことができる . このグループに属する項目はいずれも日常生活の中で経験されるものであると考えられる . これに対して , 第 3 因子の「レクリエーション」と第 6 因子の「身体運動」はいずれも日常生活からの逸脱や変化が特徴であると考えられる . つまり大学生の「興味」は大きく分けて日常生活に関連したものと , 日常生活からの変化に関連したものの二つのグループに分類することができる . いずれの側面を採り挙げたとしても人間の「興味」が日常生活を基盤として成立していることになる . このように考えると , 大学生の「興味」が日常生活を通して形成され , 逆にこうして形成された「興味」によって日常生活の中で経験される様々な活動に取り組むという過程が示唆される .

先に述べたように「興味」が内発的動機づけとの強い関連を持ち , さらに内発的動機づけが心理的に健康な状態をもたらすものである (Langer & Rodin 1976) とする見解がある . 本研究では心理的な健康のひとつの指標と

して充実感を採り上げた。

この結果「興味」質問紙と充実感尺度の間には正の関係が確認された。つまり、本研究で得られた「興味」の構造によって日常的に経験される充実感が高められることを示すものである。

## 2 . 研究 6 職業の相違によって生じる成人の「興味」 の構造の変化

### 目的

研究 5 では「興味」が日常生活環境との関係性の中で構成されるものであるとの結果が得られた。

そこで研究 6 では従来 of 生得的で固定化した構造とは異なって、「興味」を自らの生活環境の中で環境との積極的な適応を目指して能動的に変化する柔軟な構造を持ったものとして定義することとした。このため本研究では「興味」に対して影響を与える様々な要因のうち環境の変化を取り挙げて検討することとした。

従来 of 内発的動機づけ研究に従った場合、内発的動機づけを規定すると考えられてきた要因はすべて生得的なものである。このため環境中の様々な原因によって行動自体が抑制、促進されるとしても、「興味」そのものは必ず個体内である程度一貫した傾向を持っていると考えることができる。

しかし上記のような定義に基づいた場合には、「興味」は生物学的な制限の範囲内で適応すべき環境の変化に伴って大きく変動することが予想される。「興味」が環境に対する適応を目指したものと仮定する以上、適応すべき環境が変化すれば「興味」のあり方そのものも変化すると考えられるからである。

本来「興味」に対して影響を与える環境要因は各個人の主観的な判断に依存するものであると考えられる。し

かし環境要因には個人の主観に依存する側面が存在すると共に、環境が個人に対して特定の反応を要求するという側面も存在している。特にこのような環境からの要請が顕示的な例としては学校における学習場面や有職者の場合の労働場面、様々な儀式（結婚式や葬儀など）が挙げられる。こうした場面では環境から個人に対して加えられる制限が非常に顕著なため、個人間の主観による差異よりも環境の影響によって行動や心的状態が形成される傾向が高くなると考えられる。このため本研究ではこうした環境の変化に伴う「興味」の構造的な変化を採り上げ、これを検討することとした。

こうした目的に従って「興味」の変化を取り扱う際には「興味」に対して影響を与えるもう一つの要因である発達の影響を統制する必要がある。出生から20歳前後にかけては生理的な機能の発達に伴って心的処理能力が大きく変化し、同時にこうした心的処理過程の結果生じる「興味」もまた影響を受けると考えることができる。

これに対して成人期以降はそれ以前と比較して発達に伴う変化が緩やかになると考えられる。こうした青年期以降の「興味」に対して影響を与える環境要因の一つとして職業による環境の相違が挙げられる。現在の日本において職業とは成人の場合、日常生活の大半の時間を占める活動であると共に、生活の基盤となる経済を支えるという意味においても非常に重要な意味を持った環境である。また各個人が所属している社会に於いても各々の個人がどのような職業に就いているか、職場においてどのような地位にあるか等は各人を知る上において非常に重要な情報の一つであると考えられている。

このため我々の社会では一定の年齢以上の者が無職で

あるということは否定的に受け止められている。また青年期以降では社会的に家庭を構成し、労働によって生活を維持することが強く求められている。つまり青年期以降の生活環境を採り上げる場合に周辺環境からもっとも明示的に様々な要請を与えられる状況は職業に関連したものであり、これを青年期以降の「興味」に対して中心的な影響を与える環境の一つであると考えることができる。

こうしたことから本研究では20歳前後の時期以降の労働環境が、各個人の「興味」に対して与える影響を検討することを目的とした。

## 予備調査

### 目的

この研究は成人の「興味」が環境の変化によってどのように影響を受けるかを検討することを目的として行われた。このためにまず成人が「興味」を持つ対象について検討することが必要とされた。そこで予備調査では成人に対して、「興味」を持っている対象について自由記述で回答させた。

### 方法

#### 被験者

近畿地方在住の成人31名(男性19名,女性12名),ならびに関東地方在住の成人26名(男性15名,女性11名)であった。また年齢は22歳から61歳までであり,平均年齢は40.6歳,標準偏差は9.14であった。

#### 材料

「興味」についての質問紙:本研究に際して独自に作成された質問紙であった。現在「興味」を持っている対象について自由記述で回答を求めた。回答にあたっては「興味」を持っている対象とその理由を対にして挙げさせた。また,「興味」の強いものから順に5つまで挙げさせ,5つに満たない場合にはあるだけ回答させた。また回答に

先立って被験者の年齢，性別，職業，既婚か未婚か，子供の数，家族形態，最終学歴を回答させた。

#### 手続き

予備調査は近畿地方と関東地方の2つの企業の協力によって行なわれた。質問紙の遂行に際して各企業の担当者に質問紙を送付し，調査対象に該当するものに配布させた。この際担当者から「この質問紙には正しい答えやまちがった答え，望ましい回答が存在しないこと」，「深く考えすぎず，思ったままを回答すること」を教示させた。

#### 結果と考察

予備調査の結果，成人が「興味」を持っている対象について196項目が得られた。各個人ごとの平均回答数は3.44項目であり，標準偏差は1.48であった。意味の類似の点から分類した結果88項目が得られた。なお分類は2名によって行なわれ，意見が分かれた場合完全に一致するまで協議した。

予備調査に参加した被験者の平均年齢は40.6歳，標準偏差は9.1であった。また被験者の職種は総務，営業，主婦，事務など大きく13種に分類された。内訳については表5-2-1に示した。学歴については高校卒業，短期大学もしくは専門学校卒業，大学卒業，大学院卒業の4つに分類し，中退者については卒業した学校までで分類した。既婚者は44名，未婚者は13名であった。家族と同居しているものは52名，一人暮らしをしているものは5名であった。

表 5-2-1 予備調査参加者の職業内訳

経理	2
管理職	1
開発	1
編集	3
経営	1
総務	4
主婦	7
無職	1
事務職	16
パート	3
企画	2
営業	12
トレーダー	2
無回答	2
合計	57

## 本調査

### 目的

本調査では成人の日常生活にとってもっとも中心的な役割を果たす要因の一つである職業によって生じる環境の相違が、「興味」の変化に対して与える影響を検討することを目的とした。このため予備調査で得られた成人の「興味」のリストを基に個人の「興味」に対して環境が与える影響を検討した。検討にあたっては職業ごとに20歳前後の頃の「興味」と現在の「興味」を比較した。また回答に先立って被験者の年齢、性別、職業、既婚か未婚か、子供の数、家族形態、最終学歴を回答させた。

### 方法

#### 被験者

本研究は関西地方と関東地方の3つの企業ならびにその関係者の協力によって行われ、被験者は430名であった。平均年齢は34歳、標準偏差は11、最低18歳から最高70歳までの年齢であった。またこのうち男性は246名（平均年齢34歳）、女性は184名（平均年齢34歳）であった。

#### 材料

成人の「興味」についての質問紙：予備調査で得られた成人の「興味」のリストを基に作成された。成人が「興味」を持つ対象が88項目挙げられ、それぞれについて「ま

まったく興味がない（１）」から「非常に興味がある（５）」までの５件法で当てはまる数字に をつけて回答させるものであった。

20歳前後の「興味」についての質問紙：研究５において作成された質問紙を用いた。この質問紙は大学生に対して自由記述によって「興味」を持っている対象を回答させた結果を基に作成され、51項目の「興味」を持つ対象が含まれていた。回答に際しては20歳前後の頃のことを回想させた。回答は「まったく興味がない（１）」から「非常に興味がある（５）」までの５件法あり、それぞれ当てはまる数字に をつけて答えさせた。

#### 手続き

調査に際しては「この調査には正しい答えや間違った答えが存在しないこと」、また「深く考えすぎずに思ったままを答えること」を教示させた。

#### 結果

職業による分類 分析に先立って調査対象者のうち本研究の主旨から、無職の者ならびに非常勤労働者を除いて検討することとした。

この上で被験者の職業を４種に分類することとした。つまり営業職、工場生産関連、事務職、技術専門職の分類であった。営業職には職種として営業と回答したものが含まれた。営業職に含まれた被験者は53名であった。工場生産関連には職種として購買、生産、品質管理、資

材と回答したものが含まれた。工場生産関連に含まれた被験者は101名であった。事務職には職種として経理、総務と回答したものが含まれた。事務職に含まれた被験者は113名であった。技術専門職には職業として調理師、デザイナー、医師、編集、プログラマー、教師、技術、設計と回答したものが含まれた。技術専門職に含まれた被験者は34名であった。

この他に自営業や経営、動物病院看護婦などが見られたが適切な人数が得られなかったためこれを分析から削除した。

このため全被験者のうち今後の分析に用いた被験者は301名となった。なお職業別の分類は3名の者によって行われ、意見が完全に一致するまで協議した。

年齢による分類 上記の分類の結果、分析に含まれた被験者の年齢は18才から69才までであり、標準偏差は11.19であった。また被験者を年齢層によって5つのグループに分類した。10才代の被験者の数が6名と少なかったため、20才代の被験者と同一の群に含めることとした。この結果29才以下のグループ(以下20代グループ)には147名、30歳以上、39才以下のグループ(以下30代グループ)には82名、40歳以上、49才以下のグループ(以下40台グループ)には33名、50歳以上、59才以下のグループ(以下50台グループ)には28名、60歳以上のグループ(以下60代グループ)には11名が含まれた。

子供の数による分類 子供の数については子供の有無によって分類を行った。子供がいる者は99名、子供がいない者は195名であった。また子供の有無については

7名のものが無回答であった。

学歴による分類 被験者の最終学歴については以下のような結果が得られた。中学卒の者は14名，高校卒の者は92名，短大もしくは専門学校を卒業した者は59名，大学卒業の者は134名，大学院卒の者は1名であった。このため，大学教育を完了した者とそうでない者に分類することとした結果，大学卒以上の者は135名，大卒未満の者は165名，学歴について無回答であったものは1名となった。

その他の属性による分類 上記以外の属性による分類は以下ようになった。性別では男性が204名，女性が97名であった。既婚，未婚の別では未婚者が180名，既婚者が120名，無回答が1名であった。また家族と同居している者は231名，一人住まいのものは65名であった。

本研究で得られた被験者の学歴と現在の職種の間を関係を検討するため，学歴による分類と職業による分類を用いてクロス集計を行い，<sup>2</sup>検定を行った。この結果有意な偏りがあることが確認された。大学卒以上の学歴のものは事務職や営業職，技術専門職に多く，工場生産関連の職種では少なかった。また大学卒業未満の学歴のものは工場生産関連と事務職に多く，営業職と技術専門職に少ないことが示された。この結果については表5-2-2に示した。

表 5-2-2 学歴と職業のクロス集計

		職業				合計
		工場生産関連	事務職	営業職	技術, 専門職	
学歴	大学卒未満	80	67	12	6	165
	大学卒以上	20	46	41	28	135
合計		100	113	53	34	300

$$\chi^2 = 67.683 \quad p < .001$$

(df = 3)

20歳前後の「興味」についての検討 20歳前後の「興味」についての質問紙への回答（以下，過去の「興味」と表記する）について主因子法による因子分析を行い，プロマックス法による斜交回転によって5因子を抽出した。第1因子には問28「政治」(.720)，問15「考えること」(.661)，問45「勉強」(.616)，問19「経済」(.603)，問38「読書」(.541)などが含まれ，社会的教養と命名された。第2因子には問35「出会い」(.638)，問40「飲み会」(.622)，問39「ドライブ」(.585)，問13「会話」(.555)，問43「ファッション」(.496)などが含まれ，交友関係と命名された。第3因子には問24「裁縫」(.712)，問22「子供」(.599)，問29「ダイエット」(.562)，問49「料理」(.529)，問33「ダンス」(.504)などが含まれ，家庭的活動と命名された。第4因子には問32「単車」(.789)，問34「ツーリング」(.746)，問17「キャンプ」(.428)，問16「機械いじり」(.374)，問18「クラブ活動」(.308)が含まれ，アウトドアと命名された。第5因子には問37「テレビゲーム」(.608)，問3「インターネット」(.580)，問23「コンピュータ」(.566)，問46「漫

画」(.474)が含まれ、メディアと命名された。因子分析の詳細については表 5-2-3 に示した。また、各因子ごとの因子得点を回帰法によって算出した。

この因子分析結果を基に、各因子得点による共分散構造分析によって因子構造の検討を行った。観測変数として各因子得点を、またこれらの背後に潜在変数として個人の特徴として持っている「興味」の高さ（以後、一般興味と表記する）を仮定して各変数間の関係を検討した。また各々の観測変数には誤差要因を、潜在変数には攪乱要因を仮定した。モデルの検討には GFI、AGFI、RMSEA などを用いた。さらに当初の検討では誤差要因間の共分散を仮定していなかったが、修正指標を参考に解釈可能な項目に関しては誤差変数間の共分散を認めるモデルを構成した。なお分析にあたっては職業による「興味」の構造の差を考慮したモデルと、これを含めないモデルを構成し、適合度を比較した。この結果職業による「興味」の構造の差を含めたほうがモデルの適合度が増したため、このモデルを採用した。

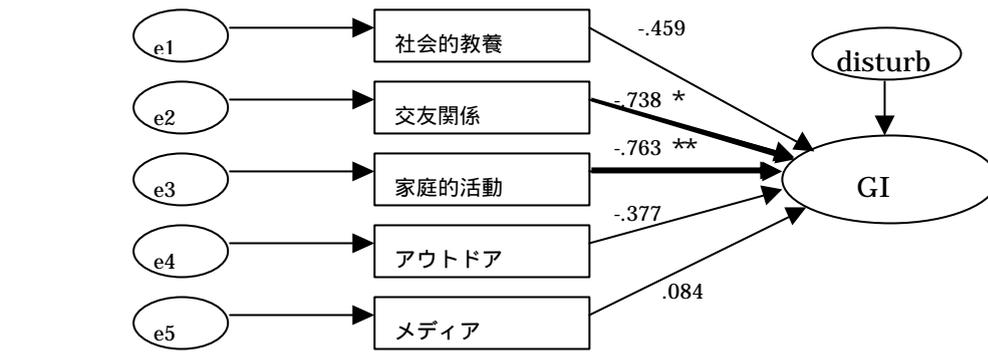
この検討の結果得られたモデルをあらわしたものが図 5-2-1 である。このモデルの GFI は .950、AGFI は .823、RMSEA は .074 であり、モデルは得られたデータと適合していると考えることができた。

表 5-2-3 20歳前後の興味質問紙の因子分析

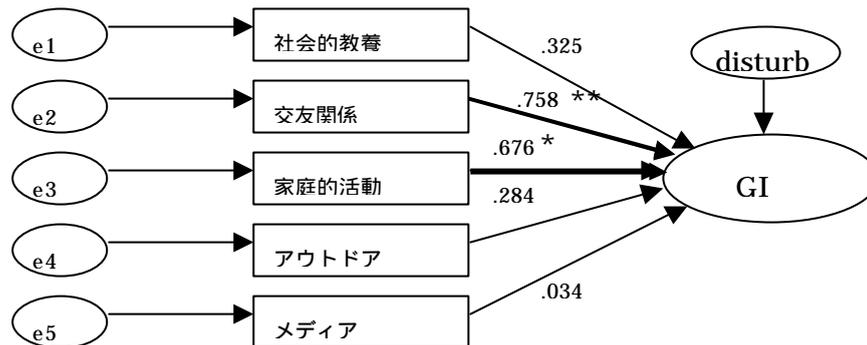
ItemNo	Item	1	2	3	4	5
PI28	政治	0.720	0.026	-0.154	-0.098	0.079
PI15	考えること	0.661	0.095	-0.073	-0.038	0.129
PI45	勉強	0.616	-0.034	-0.091	-0.005	-0.014
PI19	経済	0.603	0.121	-0.137	-0.076	0.059
PI38	読書	0.541	-0.062	-0.082	-0.130	0.245
PI06	英語	0.536	0.002	0.155	0.039	-0.067
PI08	教えること	0.529	0.014	0.059	0.076	-0.131
PI11	絵画	0.477	-0.239	0.212	0.042	0.018
PI21	国際交流	0.476	-0.013	0.257	0.124	-0.062
PI31	他人	0.345	0.297	0.005	-0.015	0.108
PI35	出会い	-0.013	0.638	-0.121	0.070	0.124
PI40	飲み会	-0.085	0.622	-0.084	0.018	-0.003
PI39	ドライブ	-0.075	0.585	-0.058	0.248	-0.032
PI13	会話	0.223	0.555	0.085	-0.229	-0.121
PI43	ファッション	-0.033	0.496	0.278	-0.094	-0.053
PI50	旅行	0.119	0.486	0.153	0.057	-0.104
PI14	体を動かす	0.097	0.419	-0.048	0.214	-0.231
PI51	食べること	-0.086	0.381	0.169	-0.005	0.044
PI02	イベント	0.210	0.376	0.059	-0.044	0.113
PI36	テレビ	-0.086	0.367	-0.010	0.041	0.210
PI41	バイト	0.081	0.347	-0.031	0.061	0.193
PI24	裁縫	0.064	-0.290	0.712	-0.056	0.009
PI22	子供	-0.030	0.015	0.599	0.017	-0.063
PI29	ダイエット	-0.182	0.177	0.562	-0.180	0.076
PI49	料理	0.039	0.049	0.529	-0.054	0.088
PI33	ダンス	0.112	-0.113	0.504	0.216	-0.174
PI04	占い	-0.016	0.169	0.486	-0.228	0.055
PI44	ペット	-0.124	0.111	0.475	0.019	0.194
PI30	ダイビング	-0.100	0.121	0.408	0.284	0.059
PI26	自転車	0.173	-0.114	0.371	0.116	0.162
PI47	ライブ	-0.130	0.186	0.312	0.063	0.166
PI32	単車	-0.158	0.042	-0.008	0.789	0.178
PI34	ツーリング	-0.093	0.072	-0.052	0.746	0.145
PI17	キャンプ	0.149	0.249	-0.028	0.428	-0.102
PI16	機械いじり	0.242	-0.130	-0.148	0.374	0.233
PI18	クラブ活動	0.164	0.076	0.031	0.308	-0.256
PI37	テレビゲーム	-0.047	0.037	-0.027	0.154	0.608
PI03	インターネット	0.068	0.052	0.201	-0.031	0.580
PI23	コンピュータ	0.166	-0.063	0.151	0.069	0.566
PI46	漫画	0.078	0.124	-0.013	0.105	0.474

因子相関行列

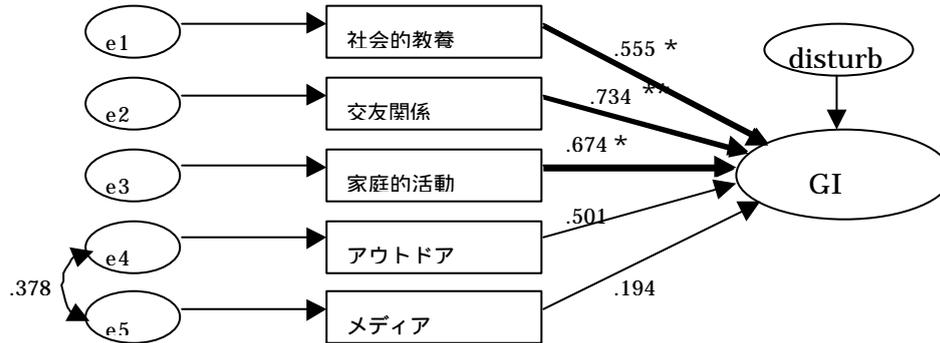
因子	1	2	3	4	5
1					
2	0.235				
3	0.266	0.432			
4	0.207	0.262	0.139		
5	-0.065	-0.026	-0.045	0.048	



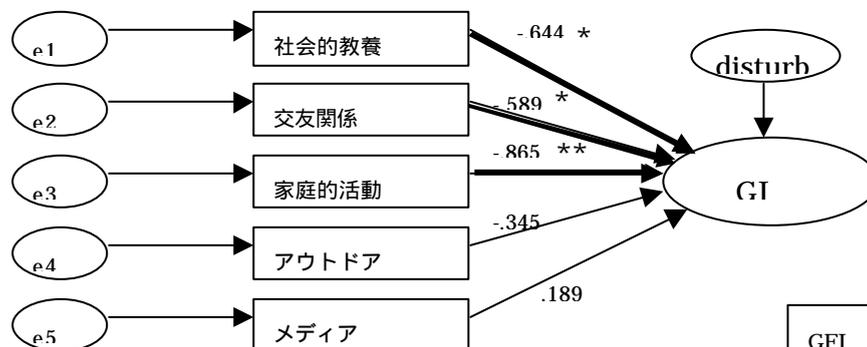
工場生産関連



事務職



営業職



技術, 専門職

\* p < .05

\*\* P < .01

GFI	.954
AGFI	.856
RMSEA	.060
AIC	121.506

図 5-2-1 20 歳前後の「興味」, 職業別に見た構造

成人の「興味」についての検討 成人の「興味」についての質問紙への回答（以下，現在の「興味」と表記する）について主因子法による因子分析を行い，プロマックス法による斜交回転によって5因子を抽出した．第1因子は問26「経済問題」(.862)，問56「税制」(.838)，問31「国内政治」(.829)，問30「国際情勢」(.707)，問25「銀行」(.666)などが含まれ，社会情勢と命名された．第2因子には問50「ショッピング」(.801)，問72「美容」(.782)，問73「ファッション」(.735)，問20「外食」(.551)，問83「料理」(.547)などが含まれ，日常生活と命名された．第3因子には問41「自分の成長」(.905)，問42「自分の存在意義」(.861)，問40「自分の将来」(.832)，問2「生き方」(.550)，問88「我々が生きている意味」(.509)などが含まれ，自己実現と命名された．第4因子には問87「ワールドカップ」(.789)，問34「サッカー観戦」(.767)，問74「プロスポーツ」(.722)，問35「サッカーをする」(.673)，問79「野球観戦」(.620)などが含まれ，スポーツと命名された．第5因子には問18「絵画鑑賞」(.626)，問11「絵を描く」(.605)，問46「宗教」(.576)，問33「作家」(.574)，問7「宇宙の成り立ち」(.541)などが含まれ，芸術，精神性と命名された．因子分析の詳細については表5-2-4に示した．また，各因子ごとの因子得点を回帰法によって算出した．また，各因子ごとの因子得点を回帰法によって算出した．

この因子分析結果を基に，各因子得点による共分散構造分析によって因子構造の検討を行った．観測変数として各因子得点を，またこれらの背後に潜在変数として個人の特性として持っている「興味」の高さ（以後，一般興味と表記する）を仮定して各変数間の関係を検討した．また各々の観測変数には誤差要因を，潜在変数には攪乱要因を仮定した．モデルの検討にはGFI，AGFI，RMSEA

などを用いた。さらに当初の検討では誤差要因間の共分散を仮定していなかったが、修正指標を参考に解釈可能な項目に関しては誤差変数間の共分散を認めるモデルを構成した。なお分析にあたっては職業による「興味」の構造の差を考慮したモデルと、これを含めないモデルを構成し、適合度を比較した。この結果職業による「興味」の構造の差を含めたほうがモデルの適合度が増したため、このモデルを採用した。

この検討の結果得られたモデルをあらわしたものが図 5-2-2 である。このモデルの GFI は .954、AGFI は .856、RMSEA は .060 であり、モデルは得られたデータと適合していると考えることができた。

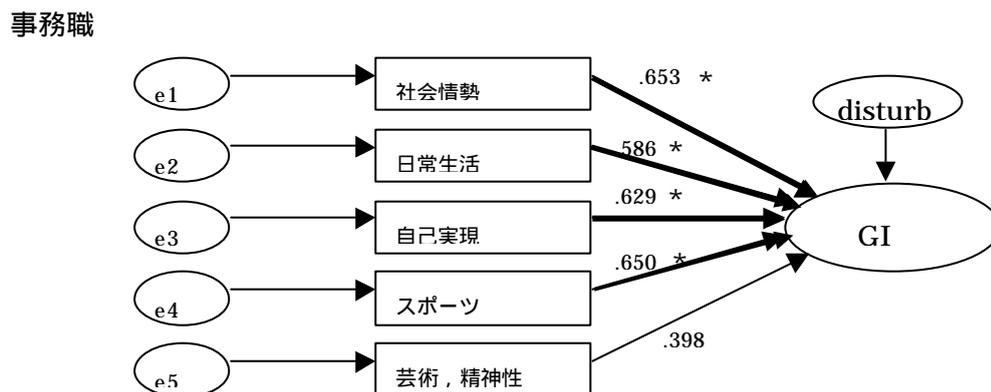
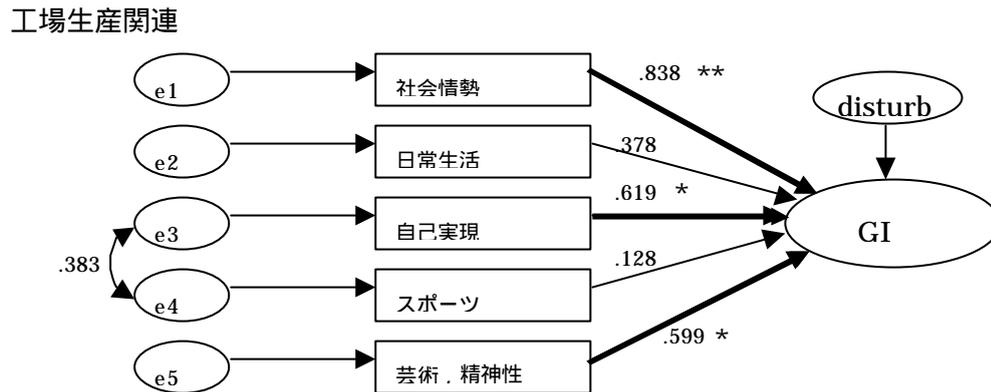
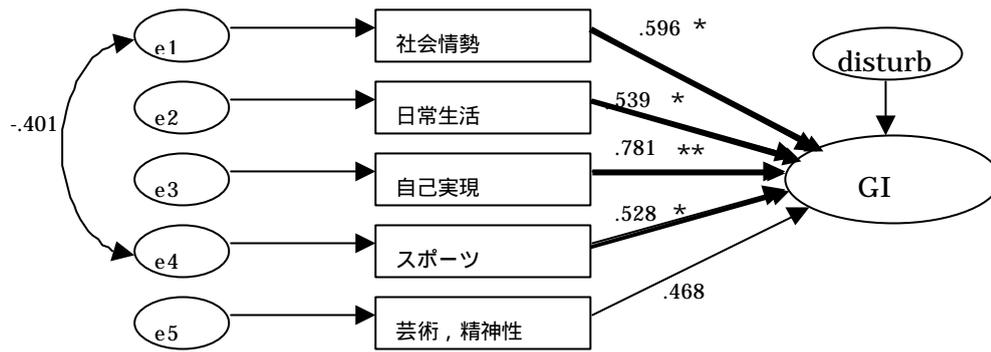
これらの結果から過去の「興味」ならびに現在の「興味」はそれぞれ因子間相関を持った 5 因子のモデルであると考えることができた。このため今後の検討は、ここで得られた過去の「興味」、現在の「興味」のモデルを基に行うこととした。

表 5-2-4 成人の興味についての質問紙の因子分析

ItemNo	Item	1	2	3	4	5
NI26	経済問題	0.862	-0.182	0.001	0.033	-0.046
NI56	税制	0.838	-0.134	-0.107	-0.020	-0.028
NI31	国内政治	0.829	-0.222	-0.008	0.103	0.030
NI30	国際情勢	0.707	-0.226	0.046	0.103	0.134
NI25	銀行	0.666	0.086	-0.028	0.028	-0.090
NI76	保険	0.666	0.287	-0.190	0.038	-0.104
NI24	教育問題	0.665	0.024	0.023	0.000	0.154
NI68	年金	0.644	0.082	0.027	0.005	-0.137
NI44	社会保障	0.636	0.005	0.118	-0.042	0.029
NI04	医療費	0.631	0.096	-0.137	-0.114	0.041
NI67	日本の将来	0.572	-0.134	0.198	0.091	0.005
NI54	政治家	0.555	-0.120	-0.053	0.222	0.150
NI23	環境問題	0.548	0.057	0.062	0.073	0.140
NI45	住居	0.505	0.266	0.185	-0.022	-0.223
NI49	食品の安全性について	0.498	0.286	-0.034	-0.071	-0.007
NI32	子供	0.465	0.242	0.049	0.019	-0.040
NI29	健康	0.423	0.212	0.312	-0.125	-0.140
NI86	老後の生活の準備	0.399	0.124	0.050	-0.122	0.225
NI85	老後の生きがい	0.337	0.190	0.167	-0.094	0.155
NI22	家族	0.335	0.185	0.253	-0.010	-0.021
NI50	ショッピング	-0.007	0.801	-0.091	0.035	-0.058
NI72	美容	-0.169	0.782	-0.032	-0.168	0.187
NI73	ファッション	-0.216	0.735	0.109	0.002	-0.009
NI20	外食	0.228	0.551	0.081	-0.049	-0.184
NI83	料理	0.015	0.547	0.020	-0.056	0.075
NI17	温泉	0.215	0.534	-0.072	-0.055	0.039
NI06	インテリア	0.118	0.532	0.036	-0.079	0.162
NI60	通信販売	0.104	0.529	-0.200	-0.051	0.010
NI84	旅行	0.114	0.514	0.116	-0.065	0.018
NI64	ドライブ	-0.009	0.487	0.110	0.093	-0.110
NI66	日用品の新製品	0.261	0.471	-0.047	0.013	-0.019
NI57	ダイエット	0.159	0.469	-0.090	0.004	0.004
NI21	歌手	-0.266	0.465	0.179	0.175	0.124
NI28	結婚	-0.177	0.456	0.133	0.138	0.047
NI75	ペット	-0.110	0.427	-0.082	0.143	0.178
NI82	ラーメン	-0.004	0.383	0.133	0.142	-0.053
NI59	タレント	-0.231	0.369	0.160	0.255	0.048
NI41	自分の成長	-0.039	-0.021	0.905	-0.041	-0.091
NI42	自分の存在意義	0.015	-0.107	0.861	-0.091	0.082
NI40	自分の将来	-0.007	0.050	0.832	-0.096	-0.107
NI02	生き方	0.153	-0.025	0.550	-0.042	0.145
NI88	我々が生きている意味	0.004	0.033	0.509	-0.009	0.328
NI81	友人関係	-0.023	0.227	0.464	0.132	-0.038
NI38	仕事	0.246	-0.106	0.454	0.031	0.051
NI03	異性	-0.185	0.080	0.401	0.274	-0.080
NI37	自己啓発	0.258	-0.079	0.401	-0.030	0.237
NI47	収入	0.233	0.214	0.398	0.064	-0.275
NI78	学ぶこと	0.257	-0.075	0.397	0.052	0.226
NI58	他人	0.050	0.166	0.316	0.090	0.131
NI87	ワールドカップ	0.032	-0.043	-0.065	0.798	0.049
NI34	サッカー観戦	0.006	-0.029	-0.008	0.767	0.131
NI74	プロスポーツ	0.086	0.022	-0.005	0.722	-0.050
NI35	サッカーをする	-0.100	-0.045	0.058	0.673	0.106
NI79	野球観戦	0.197	-0.043	-0.018	0.620	-0.121
NI80	野球をする	0.054	-0.048	0.064	0.581	-0.106
NI01	toto(サッカーくじ)	0.057	0.029	-0.111	0.572	0.024
NI27	競馬	0.014	0.113	-0.182	0.459	-0.001
NI53	スポーツをする	-0.015	0.214	0.178	0.410	-0.132
NI18	絵画鑑賞	0.028	0.120	-0.023	0.036	0.626
NI11	絵を描く	-0.065	0.045	-0.055	0.010	0.605
NI46	宗教	0.026	-0.139	0.066	-0.075	0.576
NI33	作家	0.066	-0.012	-0.050	0.128	0.574
NI07	宇宙の成り立ち	0.132	-0.148	0.132	-0.067	0.541
NI55	精神世界について	0.026	-0.150	0.280	-0.098	0.536
NI15	音楽演奏	-0.264	0.155	0.141	-0.044	0.495
NI63	陶芸	0.006	0.328	-0.154	0.079	0.477
NI12	園芸	0.229	0.213	-0.198	-0.099	0.444
NI69	農業	0.248	0.110	-0.110	0.141	0.383
NI51	書道	0.100	0.295	-0.238	0.009	0.365

因子相関行列

因子	1	2	3	4	5
1					
2	0.295				
3	0.459	0.362			
4	0.136	0.181	0.408		
5	0.441	0.179	0.239	0.078	



\* p < .05  
\*\* P < .01

GFI	.950
AGFI	.823
RMSEA	.074
AIC	130.449

図 5-2-2 成人の「興味」, 職業別に見た構造

各種の属性による「興味」の相違についての検討 被験者の各種属性による「興味」の相違について検討するため、「興味」についての各因子得点を従属変数とし、各属性を独立変数とした分散分析を行った。

年齢によるグループと性別を独立変数として行った 2 元配置の分散分析からは現在の「興味」の因子 3「自己実現」( $F(4, 291) = 2.301, p < .10$ )に有意傾向が見られ、第 5 因子「芸術、想像性」( $F(4, 291) = 3.447, p < .01$ )に有意差が見られた。これらの結果については図 5-2-3 ならびに図 5-2-4 に示した。

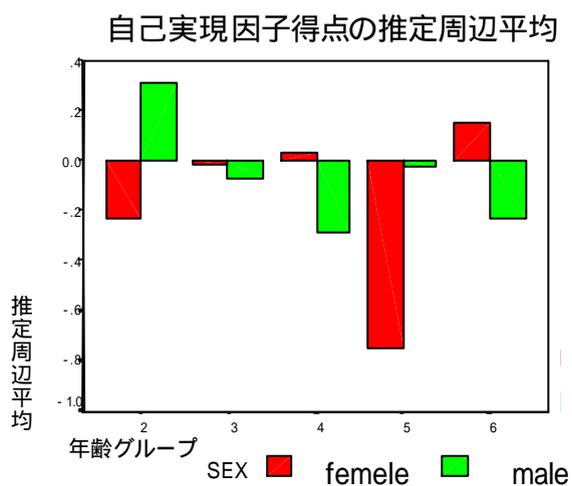


図 5-2-3 自己実現因子得点の 2 元配置分散分析 年齢 × 性別

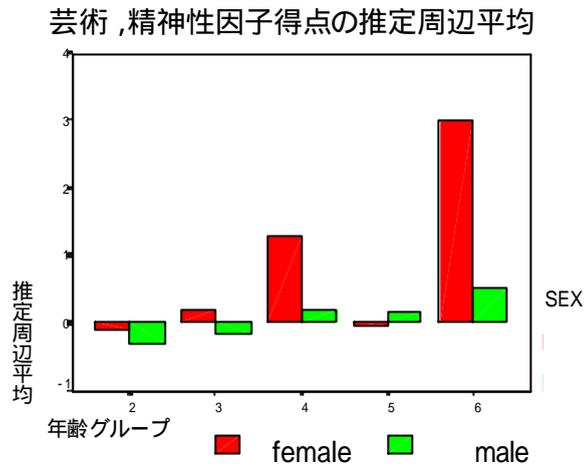


図 5-2-4 芸術,精神性因子得点の 2 元配置分散分析 年齢×性別

学歴による分類を独立変数とした分散分析では過去の「興味」の第 1 因子「社会的教養」( $F(1,298)=14.152, p<.001$  大学卒未満<大学卒以上), 第 3 因子「家庭的活動」( $F(1,298)=26.012, p<.001$  大学卒未満>大学卒以上), 因子 4「アウトドア」( $F(1,298)=16.032, p<.001$  大学卒未満<大学卒以上), 因子 5「メディア」( $F(1,298)=4.123, p<.05$  大学卒未満<大学卒以上), 現在の「興味」では因子 2「日常生活」( $F(1,298)=15.911, p<.001$  大学卒未満>大学卒以上), 因子 3「自己実現」( $F(1,298)=13.264, p<.001$  大学卒未満<大学卒以上), 因子 4「スポーツ」( $F(1,298)=24.047, p<.001$  大学卒未満<大学卒以上)に有意差が見られた。職業を独立変数とした分散分析では現在の「興味」の第 2 因子「日常生活」( $F(3,297)=4.124, p<.01$ ), 第 3 因子の「自己実現」( $F(3,297)=5.089, p<.001$ ), 第 4 因子の「スポーツ」( $F(3,297)=4.800, p<.001$ ), 第 5 因子の「芸術,精神性」( $F(3,297)=2.521, p<.05$ )に有意差が見られた。これらの結果の詳細については図 5-2-5 から図 5-2-8 に示した。

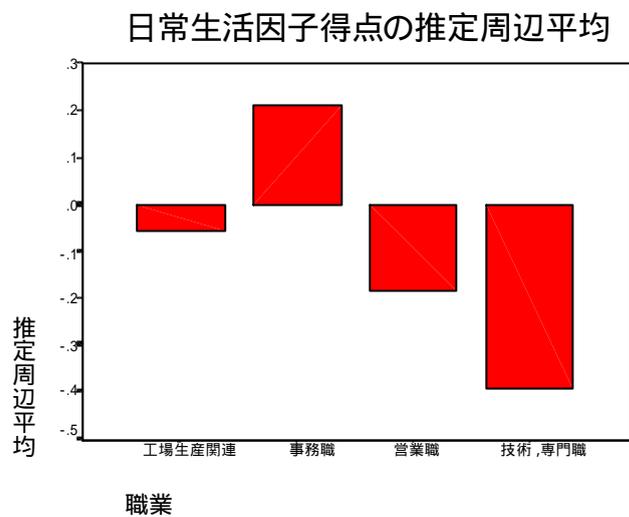


図 5-2-5 日常生活因子得点の分散分析 職業

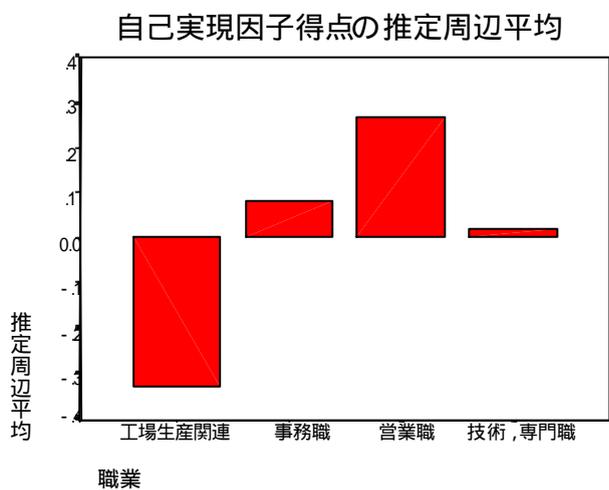


図 5-2-6 自己実現因子得点の分散分析 職業

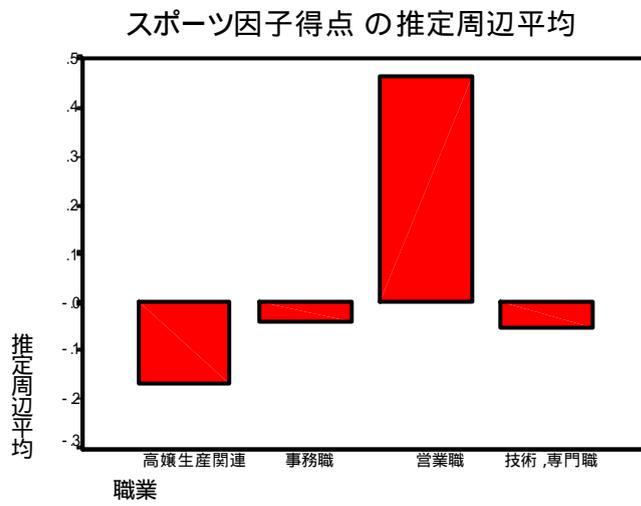


図 5-2-7 スポーツ因子得点の分散分析 職業

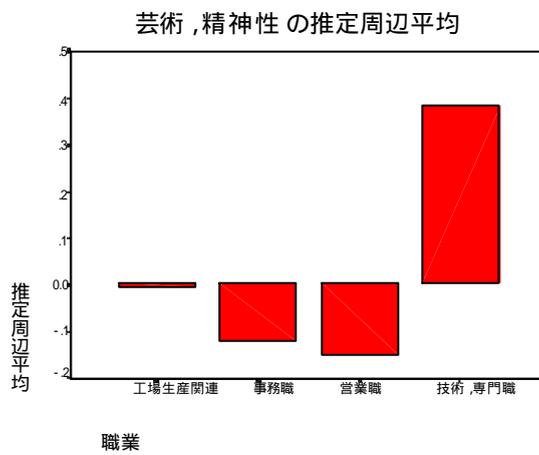


図 5-2-8 芸術,精神性因子得点の分散分析 職業

性別を独立変数とした分散分析では過去の「興味」の第2因子「交友関係」( $F(1,299)=4.663, p<.05$  男性<女性), 第3因子の「家庭的活動」( $F(1,299)=73.453, p<.001$  男性<女性), 第4因子の「アウトドア」( $F(1,299)=29.238, p<.001$  男性>女性), 第5因子の「メディア」( $F(1,299)=4.681, p<.05$  男性>女性), 現在の「興味」では第2因子の「日常生活」( $F(1,299)=47.372, p<.001$  男性<女性), 第3因子の「自己実現」( $F(1,299)=5.509, p<.05$  男性>女性), 第4因子の「スポーツ」( $F(1,299)=33.813, p<.001$  男性>女性), 第5因子の「芸術, 精神性」( $F(1,299)=4.029, p<.05$  男性<女性)に有意な差が見られた。

既婚, 未婚の別を独立変数とした分散分析では現在の「興味」の第1因子「社会情勢」( $F(1,298)=59.793, p<.001$  未婚者<既婚者), 因子2「日常生活」( $F(1,298)=4.678, p<.05$  未婚者>既婚者), 第4因子「スポーツ」( $F(1,298)=10.022, p<.01$  未婚者>既婚者), 第5因子「芸術, 精神性」( $F(1,298)=7.282, p<.01$  未婚者<既婚者)に有意差が見られた。

子供の有無を独立変数とした分散分析では現在の「興味」の第1因子「社会情勢」( $F(1,292)=55.355, p<.001$  子供無し<子供あり), 第2因子「日常生活」( $F(1,292)=8.467, p<.01$  子供無し>子供あり), 第4因子「スポーツ」( $F(1,292)=12.045, p<.01$  子供無し>子供あり), 因子5「芸術, 精神性」( $F(1,292)=5.048, p<.05$  子供無し<子供あり)に有意差が見られた。

家族形態を独立変数とした分散分析では現在の「興味」の因子4「スポーツ」( $F(1,294)=2.746, p<.1$  一人暮らし>家族と同居)に有意傾向が見られ, 因子1「社会情勢」

( $F(1, 294) = 7.910, p < .01$  一人暮らし < 家族と同居) に有意差が見られた。

なお、職業、婚姻、子供の有無、家族形態については現在の状況についての質問であるため過去の「興味」に対して影響を与えているとは考え難い。このためこれらの要因については現在の「興味」についてのみ検討を加えた。

過去の「興味」と現在の「興味」の関係性についての検討

本研究の目的は様々な環境要因が人間の「興味」の形成に対して与える影響を明らかにすることにあつた。この目的のために本研究では職業の違いによって過去の「興味」と現在の「興味」の関係がどのように異なるかについて検討する必要がある。

この検討に先立ってまず過去の「興味」と現在の「興味」の関係性が存在することを検討することとした。ここでは過去の「興味」の5因子と現在の「興味」の5因子の因子得点の相関係数を求めた。この結果過去の「興味」の因子2「交友関係」と現在の「興味」の因子5「芸術、精神性」、過去の「興味」の因子3「家庭的活動」と現在の「興味」の因子4「スポーツ」、過去の「興味」の因子4「アウトドア」と現在の「興味」の因子5「芸術、精神性」、過去の「興味」の因子5「メディア」と現在の「興味」の因子2「日常生活」、過去の「興味」の因子5「メディア」と現在の「興味」の因子3「自己実現」、過去の「興味」の因子5「メディア」と現在の「興味」の因子5「芸術、精神性」の6組以外ではすべて有意な正の相関が見られた。この結果については表5-2-9に示した。

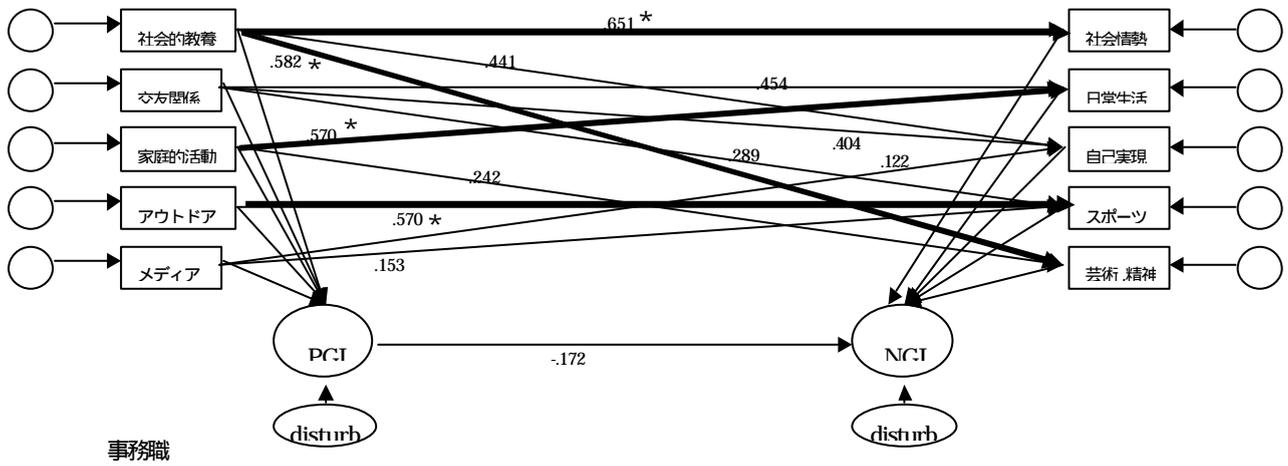
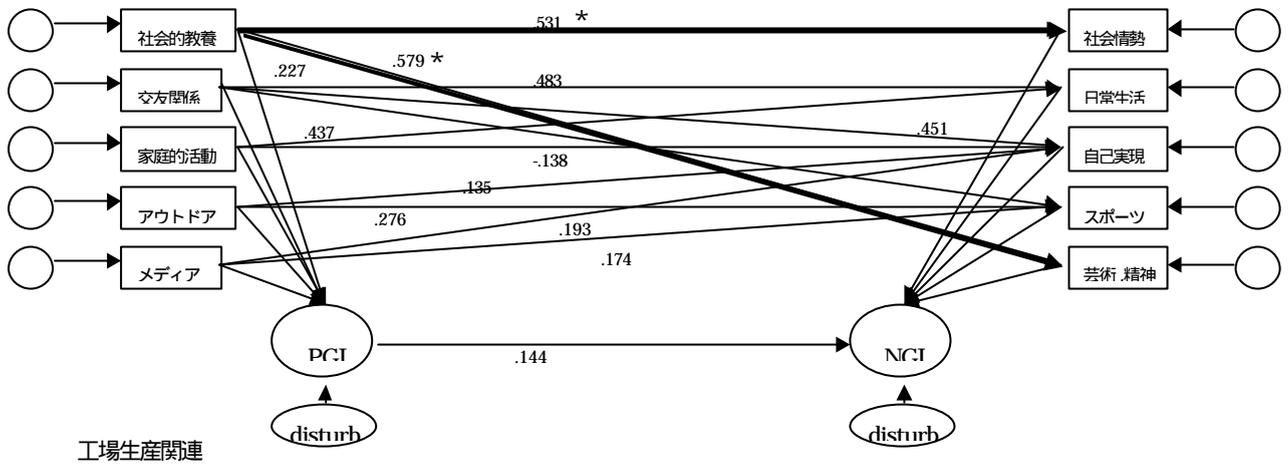
表 5-2-5 現在の興味と過去の興味の相関

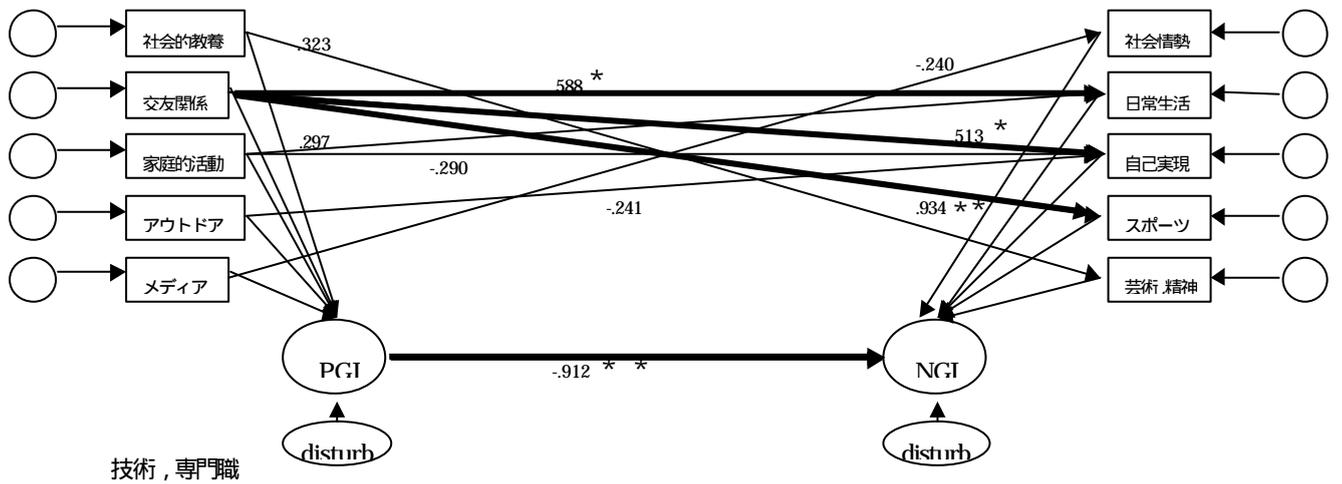
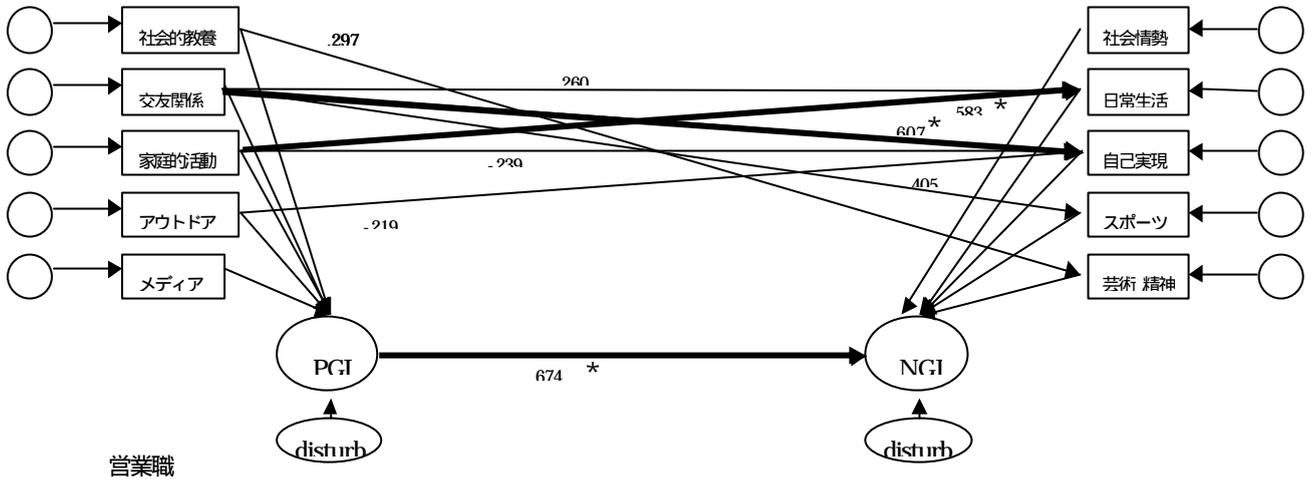
過去の興味		factor1	factor2	factor3	factor4	factor5
現在の興味						
factor1	r	0.577	0.305	0.223	0.199	-0.124
	p<	0.000	0.000	0.000	0.001	0.031
	n=	301	301	301	301	301
factor2	r	0.166	0.683	0.734	0.166	-0.055
	p<	0.004	0.000	0.000	0.004	0.341
	n=	301	301	301	301	301
factor3	r	0.388	0.533	0.212	0.197	0.041
	p<	0.000	0.000	0.000	0.001	0.476
	n=	301	301	301	301	301
factor4	r	0.197	0.424	0.085	0.337	0.139
	p<	0.001	0.000	0.139	0.000	0.016
	n=	301	301	301	301	301
factor5	r	0.631	0.078	0.369	0.088	0.008
	p<	0.000	0.176	0.000	0.129	0.894
	n=	301	301	301	301	301

このことから過去の「興味」と現在の「興味」の間には何らかの関係性が存在することは明らかである。この結果を受けて過去の「興味」と現在の「興味」の関係が職業ごとに異なっているか否か、また異なっているとすればそれぞれどのような関係が見られるのかについて検討することとした。

この検討は共分散構造分析を用いて行っている。モデルの構成に際しては先の因子構造の検証の際に用いたモデルを基に、過去の「興味」の各因子と過去の一般興味から現在の「興味」の各因子と現在の一般興味に対して単方向の影響を仮定した逐次的なモデルを構成した。モデルの検討には GFI, AGFI, RMSEA などを用いた。さらに当初の検討では誤差要因間の共分散を仮定していなかったが、修正指標を参考に解釈可能な項目に関しては誤差変数間の共分散を認めるモデルを構成した。なお分析にあたっては職業による「興味」の構造の差を考慮したモデルと、これを含めないモデルを構成し、適合度を比較した。この結果職業による「興味」の構造の差を含めたほうがモデルの適合度が増したため、このモデルを採用した。

この検討の結果得られたモデルをあらわしたものが図 5-2-9 である。ここでは過去の「興味」と現在の「興味」の関係性について表したパスの係数のみを表示した。このモデルの GFI は .904, AGFI は .784, RMSEA は .054 であり、モデルは得られたデータとほぼ適合していると考えることができた。





\* p < . 0 5

\*\* P < . 0 1

GFI	904
AGFI	784
RMSEA	.054
AIC	458.403

図 5 - 2 - 9 職業別に見た現在の興味と過去の興味の関係

## 考察

因子分析の結果から 過去の「興味」と現在の「興味」についての因子分析とこれに続く共分散構造分析の結果、過去の「興味」と現在の「興味」は各々相互に関係性を持った5因子から構成されることが示された。過去の「興味」については研究5で作成された質問紙を用いた。研究5では本研究と異なって互いに関係性を持った7因子の構造が示されている。これは本研究が過去の回想によって行われたのに対して研究5では現在の「興味」を取り扱っていたこと調査対象者の相違などが原因として挙げられる。しかし研究5で得られた「知識の獲得」、「対人関係」、「芸術活動」、「日常生活の充実」、「身体運動」、「メディア、テクノロジー」といった因子と非常に似通った内容になっていることは注目すべき点である。

過去の「興味」は「社会的教養」、「交友関係」、「家庭的活動」、「アウトドア」、「メディア」の5因子によって構成されていた。これらの因子は相互に関連性を持ったものであるが、特に「社会的教養」、「交友関係」、「家庭的活動」、「アウトドア」の間に強い関係が認められた。現在の「興味」は「社会情勢」、「日常生活」、「自己実現」、「スポーツ」、「芸術、精神性」といった5因子によって構成された。現在の「興味」の各因子間の相関からは、第3因子の「自己実現」が非常に重要な役割を持っていると考えることができる。つまり「自己実現」と他の因子の間の相関はすべて高いものであり、現在の「興味」が「自己実現」との関係性を基に構成されていると考えることができる。またこの「自己決定」は過去の「興味」では確認されなかったものであり、成人期以降の変化において重要な意味を持つと考えることができる。

被験者の様々な属性による「興味」の変化からは、社会的な環境によって生じる「興味」の相違が見出された。このことから「興味」が環境からの要請に対して非常に敏感にその構造を変化させる事が示唆されたといえる。しかしいずれの領域においても性別ごとの加齢に伴う変化を検討する際に顕著に見られた特徴として、50歳代の女性に見られた「興味」の減退が挙げられる。これに対して同年代の男性では女性に見られたような変化は現れていない。これは更年期障害の影響であると考えられる。更年期障害は特に50歳前後の女性に多く見られるものであり、閉経に伴うホルモンバランスの変化の結果として不定愁訴や倦怠感など様々な症状が見られるものである。本研究で見られた「興味」の減退はこうした症状に由来するものと考えられることができる。これに加えて我々の所属している文化圏ではほぼこの時期に子育てを終える者が多く、これに伴って目的や意味付けを喪失した状態に陥りやすいと考えることができる。このように月経閉止前後の期間は女性にとって心理、生理、社会的な危機の状況にあると考えることができる。

過去の「興味」と現在の「興味」との関係についての検討からは、職業ごとに異なった変化が見られることが分かった。工場生産関連の職業と事務職では過去の一般興味と現在の一般興味の間関係はそれほど強いものではなかった。これに対して各々の因子の間には他の職種と比較して多くのパスが存在し、過去の「興味」と現在の「興味」が非常に複雑に関連していることが示された。特に現在の「自己実現」に対しては工場生産関連では「社会的教養」を除く過去の「興味」すべてからパスが確認され、事務職では「社会的教養」と「アウトドア」を除いた因子からのパスが確認された。これに対して営業職と技

術，専門職では過去の「興味」の各因子から現在の「興味」の各因子に見られるパスは比較的少なく，比較的単純な構造となっていることが分かる．

この時期の「興味」のうちでもっとも特徴的な「自己実現」に対する「興味」もしくは欲求はすべての人間に普遍的に見られるものではなく，人間の生活環境を通して形成されることのできる成長動機であると考えられる（Maslow, 1954）．このため通常「自己実現」に対する「興味」は日常生活のすべての場面と関係しながら形成されることができると考えることができる．しかし日常生活の各々の場面はすべて同じ重要性を持っているわけではなく，こうした場面の中には日常生活の中で高い重要性を与えられることを要求するものが存在している．特に本研究で採り挙げた職業場面や学校場面などは顕在的にそれ自身を個人の中心的な環境として設定することを要求すると考えられる．本研究に当たって仮定したとおり「興味」が環境への適応という潜在的目的を持ったものであるとするならば，個人の「興味」がこうした環境からの要請に対して応答的であると仮定することが可能である．本研究で得られた様々な属性による「興味」の差や，職業による「興味」の構造やその変化の相違は，「興味」が環境からの要請に対して柔軟に対応することを示唆するものと考えられる．

### 3 . 第 5 章 の 総 括

研究 1 および研究 2 では課題興味が人間の動機づけに対して影響を与える要因の中で中心的な働きを担っていることが示された。また研究 3 では課題興味と同様に一般興味が、人間の動機づけや行動に対して直接的かつ強い影響を持つことが示された。これを受けて研究 4 では思春期から高校生までの年代で一般興味が構成される過程を検討し、「興味」が周辺環境からの影響を受けて形成されることが示された。そこで研究 5 では大学生の「興味」の構造を検討した。この結果大学生の「興味」の構造は相互に相関を持った 7 因子によって構成されていることが確認され、これらの因子はすべて日常生活と密接な関係を持っていることが示された。研究 6 では成人の日常的な生活環境と「興味」の関係について検討を行った。この結果、成人の「興味」は相互に関連を持った 5 因子によって構成されており、環境の相違によって「興味」の構造も変化することが示された。

従来の研究において「興味」と非常に密接な関係を持つとされてきた内発的動機づけ研究では生得的な基盤を持つ自己決定や有能感、関係性といった諸要因が重要視されてきた。このことは人間の「興味」がこれらの要因によって規定される生得的な機構であることを示唆するものである。しかし本研究の結果、内発的動機づけ研究において見られた 3 つの要因は人間の「興味」の構造の中に確認することはできなかつた。さらに人間の「興味」が環境の変化によって大きく影響を受けることが示されたことから「興味」が必ずしも生得的な要因によって規定されるのみではなく、生存環境に対して柔軟に適應する能動的な構造を持つと考えることができる。

## 第 6 章 総合考察と要約

本研究にあたって「興味」について以下のように仮定した。本研究で採り上げた「興味」には二つの見方が存在している。

狭義に捉えた場合の「興味」は Berlyne(1971)のいう特殊な探索類似した概念である。狭義の「興味」は「特定の課題や対象に直面した際に生じる判断であり、この対象との相互交渉を持つか否かを決定するものである」として仮定された。本研究の中では課題興味がこれにあたる。

広義の「興味」は Berlyne(1971)の拡散的探索と類似した概念である。広義の「興味」とは「個人内で比較的一定した傾向として存在している興味度の高さを指す」として定義された。この場合の「興味」は一般的な用語で言うと好奇心の強さと非常に近い意味を持つと、考えられ、過去の経験や個人の価値観、意味づけの過程などが関係していると考えられた。また広義の「興味」は人間がより積極的に環境に対して適応するための個人的な傾向であると考えることができた。本研究の中では一般興味がこれにあたる。

上記のような「興味」の定義に基づいて本研究を振り返ると以下のようにまとめる事ができる。第3章で採り上げた研究1から研究2までは目的は従来の内発的動機づけ研究に対する反証を挙げることであった。

従来の内発的動機づけ研究では人間の「興味」を「自己決定」や「有能感」、「重要な他者」といった要因によって生

起される心理状態として仮定していた。この中でも特に近年では自己決定に着目した研究が多く見られるようになってきた(Ryan, & Deci, 2000)。これに対して研究1では自己決定よりも「興味」のほうが課題への動機づけに対して強い影響をもつことが示された。また研究2では課題への動機づけに対して従来の内発的動機づけ研究や学習性無力感研究において採り上げられてきた要因が、「興味」を媒介した間接的な影響をもつことが示唆された。このことから内発的動機づけ研究や学習性無力感研究など、一連の認知的動機づけを扱った諸理論の中に「興味」という概念を取り入れることが必要であることが示されたと考えられる。

さらに研究3では失敗経験後の課題に対する動機づけの維持に対して、課題興味と共に一般興味が非常に重要な役割を果たしている事が示された。特に遂行不可能な課題を与えた場合の動機づけの維持に対しては課題興味や一般興味が直接的かつ強い影響を与えていることが示された。このことは「興味」と動機づけの関係が非常に直接的かつ密接であることを示唆しており、「興味」の持つ二つの側面を取り上げることが必要であると考えられた。

第4章においては思春期の親の養育態度が高校生の「興味」に対して与える影響が確認された。この結果、思春期において親が子供の様々な物事への取り組みに対して関わる事が、子供の「興味」に強い影響をもつことが示された。つまり「興味」は従来の内発的動機づけ研究の中心であった認知的評価理論(Deci, 1972)及び自己決定理論(Ryan, & Deci, 2000)において提唱されてきたほど生得的な要因によって構成されているのではなく、各々の時期において各個人にとって中心的な役割を果た

す環境の影響を強く受けて変化するものであることを示唆するものと考えられる。

第5章ではここまでの研究を受けて成人の「興味」の構造を明らかにし、周辺環境との相互作用のあり方を検討した。

研究5では大学生の「興味」の構造についての検討を行った。この結果、大別して日常生活に密着した5つの要因と日常生活からの変化を志向した2つの要因が確認され、これらの各要因が日常生活の中で経験される充実感と関係を持つことが示された。この研究では大学生の「興味」が自己決定や有能感、関係性といった単純な要因によって構成されているのではなく、これらの要因が複雑に絡み合った個々の具体的活動そのものに対して向けられている事が示された。さらにこれらの「興味」の構造は日常生活との密接な関連において構成されているものであり、生活環境が「興味」に対して与える影響が非常に大きなものであることが示唆された。

研究6では職業が成人の「興味」に対して与える影響が検討された。これは研究5において生活環境が「興味」に対して影響を与えることが示唆されたことを受けてのものであった。成人期において個人に対してもっとも顕在的な要請を与える環境の一つとして職業を採り上げた。この結果、職業によって「興味」の構造やその変化に相違があることが確認された。このことは「興味」が環境に対して適応的に構成され、各々の環境中で有意義な対象に対して「興味」が発発されるということを示唆するものである。

これらの結果から，本研究の結論として以下のように考えることができる．

- 1 . 「興味」は動機づけに対して直接的に影響をもつものであり，従来の研究で採り上げられてきた様々な要因は「興味」に対して影響を与えることによって間接的に動機づけに対する影響をもつものである．このことは動機づけ研究の中で「興味」を採り上げることの重要性を示していると考えられる．
- 2 . 「興味」は固体発達の初期の段階では親の養育態度の影響を強く受けて形成され，それ以降多様な環境との相互作用の経験の中から，環境に対してより適応的に変化するものである．この傾向は，人間が環境に対してより積極的な適応を求める存在であるということを示唆している．
- 3 . 「興味」を喚起する対象は従来の研究で採り上げられてきたような単純化された要因ではなく，これらの要因が複雑に絡み合った特定の構造を持った対象である．このことから人間が「興味」を持つ対象は，現実の生活場面との密接な関係を持った対象であると考えることができる．つまり本研究の初頭に仮定したように，広義の「興味」とは個人の経験や価値観，有意味性の判断などを含んだ全人間的な反応であると考えられる．

本研究では狭義の「興味」として「課題や状況など，特定の対象に直面した際に，この対象と交渉を持つか否かを判断する働き」を取り上げた後に Berlyne(1949)の興

味の概念化を参考に「態度」や「Personality structure」の概念を広義の「興味」の中に取り入れる試みを行ってきた。しかし本研究では動機づけの概念としての狭義の「興味」と、「態度」や「Personality structure」などを含んだ狭義の「興味」の関係についての十分な検討までには行われていない。また Berlyne の概念化では自我の中心的機能としての興味を採り上げており、これは本研究で扱った広義の「興味」の概念よりもさらに広範な全人格的概念であると考えられる。今後本研究で採り上げた「興味」をさらに発展させ、Berlyne のいう興味との関係を検討し、これに近づけることが必要とされている。

参 考 ， 引 用 文 献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D., 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, 87, 49-74.
- Angyal, A. 1941 *Foundation for a science of personality*. New York: Common wealth fund.
- Atkinson, J.W., 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, N, J:van Nostrand.
- Baumeister, M. R., & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological bulletin*, 117, 497-529.
- Berlyne, D. E. 1949 'Interest' as a psychological concept. *British journal of psychology*, 39, 184-195.
- Berlyne, D. E. 1950 Novelty and curiosity as determinants of exploratory behavior. *British journal of psychology*, 41, 68-80.
- Berlyne, D. E. 1971 What next? Concluding summary. In H. I. Day, D. E. Berlyne, & D. E. Hunt (Eds) *Intrinsic motivation: A new direction in education*. Toronto: Holt, Rinehart, & Winston of Canada.
- Boggiano, A. K., & Barrett, M., 1985 Performance and Motivational Deficits of Helplessness: The Role of Motivational Orientations. *Journal of personality and Social Psychology*, 49, 1753-1761
- Butler, R. A. 1953 Discrimination learning by rhesus monkeys to visual exploration motivation. *Journal of comparative and physiological psychology*.
- Clifford, M. M., 1984 Thoughts on a theory of constructive failure. *Educational Psychologist*, 19, 108-120

- Condry, S. M., Haltom, M., & Neisser, U., 1977 Infant sensitivity to audio-visual discrepancy: A failure to replicate. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 9, 431-432.
- Dashiell, J. F. 1925 A quantitative demonstration of animal drive. *Journal of comparative psychology*, 5, 205-208.
- deCharms, S. R. 1968 *Personal causation :The Internal Affective Determinations of Behavior*. New York: Academic Press .
- Deci, E.L. 1971 Effect of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of personality and social psychology*, 18, 105-115
- Deci, E.L. 1972, Intrinsic motivation, extrinsic reinforcement and inequity. *Journal of personality and social psychology* 22, 113-120
- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic Motivation*. Plenum Press: New York
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1985 *Intrinsic motivation and self determination in human behavior*. Plenum press: New York.
- Dweck, C. S. 1975 The role of expectations and attributions in the alleviation of learned helplessness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 674-685.
- Edwards, A. L., 1954 *Edwards Personal Preference Schedule*. Psychological corporation, New York
- Fair, E. M., & Silvestri, L. 1992 Effects of rewards, competition and outcome on intrinsic motivation. *Journal of Instructional Psychology*, 19, 3-8
- Freud, S., 1940 *An outline of psychoanalysis*. Norton, New York

- Harlow, H. F. 1953 Mice, monkeys, men, and motives. Psychological review. 60, 23-32.
- Harlow, H., 1958 The nature of love. American Psychologist, 13, 673-685.
- 波多野 誼余夫・ 稲垣 佳世子 1971 発達と教育における内発的動機づけ 明治図書
- 肥田野 直・ 岩原 信九郎・ 岩脇 三良・ 杉村 健・ 福原 真知子 1970 EPPS 性格検査手引き 日本文化科学社
- Hiroto, D. S., 1974 Locus of control and learned helplessness. Journal of Experimental Psychology, 102, 187-193
- Hiroto, D, S., & Seligman, M. E. P., 1975 Generality of learned helplessness in man. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 311-327.
- Hunt, J. McV. 1965 Intrinsic motivation and it's role in psychological development. Nebraska symposium on motivation, 13,189-282.
- 稲垣 佳世子 1984 知ることへの内発的動機づけ 児童心理学の進歩, 23, 249-276.
- Izard, C. 1977 Human emotions. New York: Plenum Press.
- 鹿毛 雅治 1994 内発的動機づけの展望 教育心理学研究, 42, 345-359.
- Kruglanski, A. W., Friedman, I., & Zeevi, G. 1971 The effect of extrinsic incentive on some qualitative aspect of task performance. Journal of personality, 39, 606-617.
- 強矢 秀夫・ 細田 一秋・高島 直子・青柳 肇 1987 学習性無力感に関する研究 その3 - 認知的課題および帰属スタイルとの関連 - 立川短大紀要, 20, 23-28
- Langer, E.J., & Rodin, J. 1976 The effects of choice

- and enhanced personal responsibility for the aged:  
A field experiment in an institutional setting.  
*Journal of Personality and Social Psychology*, 34,  
191-198.
- Lepper, M. R. & Cordova, D. I. 1992 A desire to be  
taught: Intrinsic consequences of intrinsic  
motivation. *Motivation and Emotion*, 16, 187-208.
- Lepper, M. R., Greene, D., & Nisbett, R. E. 1973  
Undermining children's intrinsic interest with  
extrinsic rewards : A test of the overjustification  
hypothesis. *Journal of personality and social  
psychology*, 28, 129-137.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the  
self: Implications for cognition, emotion, and  
motivation. *Psychological Review*. 98, 224-253.
- Maslow, A. H. 1954 *Motivation and personality*.  
Harper & Row, New York
- Myers, A. K., & Miller, N. E. 1954 Failure to find a  
learned drive based on hunger: Evidence for  
learning motivated by "exploration". *Journal of  
Comparative and physiological psychology*, 47,  
428-436.
- Montgomery, K. C. 1952 A test of two explorations of  
spontaneous alternation. *Journal of Comparative  
and physiological psychology*, 45, 287-293.
- Murray, H. A. 1938 *Explorations in psychology*.  
Oxford, New York.
- Nissen, H. W. 1930 A study of exploratory behavior in  
the white rat by means of the obstruction method.  
*Journal of Genetic Psychology*. 37, 361-376.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 現代青  
年の心情モデルについての検討 教育心理学研究 32,

100-109.

Pelletier, L. G., Tuson, K. M., & Haddad, N. K. 1997 Client Motivation for Therapy Scale: A measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation for therapy. *Journal of Personality Assessment*, 68, 414-435.

Peterson, C., Semmel, A., Bayer, C., Abramson, L. Y., Metalsky, G. I., & Seligman, M. E. P. 1982 The Attributional style Questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, 92, 96-103,

Reeve, J., & Deci, E. L. 1996 Elements of the competitive situation that affect intrinsic motivation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 18, 680-684.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2000 Self determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American psychologist*, 55, 68-78.

桜井茂男 1991 子供の動機付けに及ぼす教師の激励の効果 心理学研究 62, 31-37

Schulz, R. 1976 The effect of control and predictability on the psychological and physical well-being of the institutionalized aged. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 563-573.

Seta, J. J., & Seta, C. E. 1982 Personal equity: An intrapersonal comparator system analysis of reward value. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 222-235

Seligman, M. E. P. 1975 Helplessness: On depression, development, and death. Freeman, San Francisco

Vroom, V. H. 1964 Work and motivation. New York: Wiley.

Weiner, B. 1974 Motivational psychology and educational research. Educational Psychologist, 11, 96-101

White, R. W. 1959 Motivation Reconsidered :The concept of Competence. Psychological Review 66, 297-333

芳野 郁朗・青柳 肇 1998 学習性無力感に及ぼす課題の自己決定の効果 ヒューマンサイエンスリサーチ, 7, 217-227.